# 江添売の詳説により17

■江添 亮 著



**ASCII** 

本文中に記載されている社名および商品名は、一般に開発メーカーの登録商標です。なお、本文中では TM・⑥・® 表示を明記しておりません。

### はじめに

本書は 2017 年に規格制定されたプログラミング言語 C++ の国際規格、ISO/IEC 14882:2017 の新機能をほぼすべて解説している。

新しい C++17 は不具合を修正し、プログラマーの日々のコーディングを楽にする 新機能がいくつも追加された。その結果、C++ の特徴であるパフォーマンスや静的 型付けは損なうことなく、近年の動的な型の弱い言語に匹敵するほどの柔軟な記述を 可能にしている。

人によっては、新機能を学ぶのは労多くして益少なしと考えるかもしれぬが、C++の新機能は現実の問題を解決するための便利な道具として追加されるもので、仮に機能を使わないとしても問題はなくならないため、便利な道具なく問題に対処しなければならぬ。また、C++の機能は一般的なプログラマーにとって自然だと感じるように設計されているため、利用は難しくない。もし C++ が難しいと感じるのであれば、それは C++ が解決すべき現実の問題が難しいのだ。なんとなれば、我々は理想とは程遠い歪なアーキテクチャのコンピューターを扱う時代に生きている。CPUの性能上昇は停滞し、メモリは CPU に比べて遥かに遅く、しかもそのアクセスは定数時間ではない。キャッシュに収まる局所性を持つデータへの操作は無料同然で、キャッシュサイズの単位はすでに MB で数えられている。手のひらに乗る超低電力 CPU でさえマルチコアが一般的になり、並列処理、非同期処理は全プログラマーが考慮せねばならぬ問題になった。

そのような時代にあたっては、かつては最良であった手法はその価値を失い、あるいは逆に悪い手法と成り下がる。同時に昔は現実的ではなかった手法が今ではかえってまともな方法になることさえある。このため、現在活発に使われている生きている言語は、常に時代に合わない機能を廃止し、必要な機能を追加する必要がある。C++の発展はここで留まることなく、今後もC++が使われ続ける限り、修正と機能追加が行われていくだろう。

本書の執筆は Github 上で公開して行われた。

https://github.com/EzoeRyou/cpp17book

本書のライセンスは GPLv3 だ。

本書の執筆では株式会社ドワンゴと GitHub 上で Pull Request を送ってくれた多くの貢献者の協力によって、誤りを正し、より良い記述を実現できた。この場を借りて謝意を表したい。

本書に誤りを見つけたならば、Pull Request を送る先は

https://github.com/EzoeRyou/cpp17book

だ。

江添亮

### 序

### 0.1 C++ の規格

プログラミング言語 C++ は ISO の傘下で国際規格 ISO/IEC 14882 として制定されている。この規格は数年おきに改定されている。一般に C++ の規格を参照するときは、規格が制定した西暦の下二桁を取って、C++98 (1998 年発行)とか C++11 (2011 年発行)と呼ばれている。現在発行されている C++ の規格は以下のとおり。

### 0.1.1 C++98

C++98 は 1998 年に制定された最初の C++ の規格である。本来ならば 1994 年か 1995 年には制定させる予定が大幅にずれて、1998 年となった。

### $0.1.2 \quad C++03$

C++03 は C++98 の文面の曖昧な点を修正したマイナーアップデートとして 2003 年に制定された。新機能の追加はほとんどない。

### 0.1.3 C++11

C++11 は制定途中のドラフト段階では元 C++0x と呼ばれていた。これは、200x 年までに規格が制定される予定だったからだ。予定は大幅に遅れ、ようやく規格が制定されたときにはすでに 2011 年の年末になっていた。C++11 ではとても多くの新機能が追加された。

### 0.1.4 C++14

C++14 は 2014 年に制定された。C++11 の文面の誤りを修正した他、少し新機能が追加された。本書で解説する。

### $0.1.5 \quad C++17$

C++17 は 2017 年に制定されることが予定されている最新の C++ 規格で、本書で解説する。

### 0.2 C++ の将来の規格

### 0.2.1 C++20

C++20 は 2020 年に制定されることが予定されている次の C++ 規格だ。この規格では、モジュール、コンセプト、レンジ、ネットワークに注力することが予定されている。

### 0.3 コア言語とライブラリ

C++ の標準規格は、大きく分けて、C プリプロセッサーとコア言語とライブラリからなる。

Cプリプロセッサーとは、C++がC言語から受け継いだ機能だ。ソースファイルをトークン列単位で分割して、トークン列の置換ができる。

コア言語とは、ソースファイルに書かれたトークン列の文法とその意味のことだ。 ライブラリとは、コア言語機能を使って実装されたもので、標準に提供されている ものだ。標準ライブラリには、純粋にコア言語の機能のみで実装できるものと、それ 以外の実装依存の方法やコンパイラーマジックが必要なものとがある。

# 目次

はじめに		iii
序		v
0.1	C++ の規格	v
	0.1.1 C++98	v
	0.1.2 C++03	v
	0.1.3 C++11	v
	0.1.4 C++14	v
	0.1.5 C++17	vi
0.2	C++ の将来の規格	vi
	0.2.1 C++20	vi
0.3	コア言語とライブラリ	vi
第1章	<b>SD-6 C++</b> のための機能テスト推奨	1
1.1	機能テストマクロ	1
1.2	has_include 式: ヘッダーファイルの存在を判定する	3
1.3	has_cpp_attribute 式	4
第2章	C++14 のコア言語の新機能	5
2.1	二進数リテラル	5
2.2	数値区切り文字・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	5
2.3	[[deprecated]] 属性	6
2.4	通常の関数の戻り値の型推定	8
2.5	decltype(auto):厳格な auto	9
2.6	ジェネリックラムダ	14
2.7	初期化ラムダキャプチャー	15
2.8	変数テンプレート	18
	281 章味は同じだが刑が違う定数	21

	2.8.2 traits のラッパー	22
2.9	constexpr 関数の制限緩和	23
2.10	メンバー初期化子とアグリゲート初期化の組み合わせ	23
2.11	サイズ付き解放関数	25
第3章	C++17 のコア言語の新機能	27
3.1	トライグラフの廃止	27
3.2	16 進数浮動小数点数リテラル	27
3.3	UTF-8 文字リテラル	28
3.4	関数型としての例外指定	29
3.5	fold 式	30
3.6	ラムダ式で *this のコピーキャプチャー	34
3.7	constexpr ラムダ式	37
3.8	文字列なし static_assert	39
3.9	ネストされた名前空間定義	39
3.10	[[fallthrough]] 属性	40
3.11	[[nodiscard]] 属性	41
3.12	[[maybe_unused]] 属性	43
3.13	演算子のオペランドの評価順序の固定	45
3.14	constexpr if 文:コンパイル時条件分岐	46
	3.14.1 実行時の条件分岐	46
	3.14.2 プリプロセス時の条件分岐	48
	3.14.3 コンパイル時の条件分岐	49
	3.14.4 超上級者向け解説	52
	3.14.5 constexpr if では解決できない問題	55
	3.14.6 constexpr if で解決できる問題	55
3.15	初期化文付き条件文	56
3.16	クラステンプレートのコンストラクターからの実引数推定	59
	3.16.1 推定ガイド	59
3.17	auto による非型テンプレートパラメーターの宣言	61
3.18	using 属性名前空間	62
3.19	非標準属性の無視	63
3.20	構造化束縛	63
	3.20.1 超上級者向け解説	67
	3.20.2 構造化束縛宣言の仕様	69
	2.20.2 知期化乙の刑が配列の担合	60

	3.20.4	初期化子の型が配列ではなく、std::tuple_size <e> が完全形</e>
		の名前である場合 71
	3.20.5	上記以外の場合 73
3.21	inline	変数
	3.21.1	inline の歴史的な意味
	3.21.2	現代の inline の意味
	3.21.3	inline 変数の意味
3.22	可変長	using 宣言
3.23	std::by	rte:バイトを表現する型
第 4 章	C++1	.7 の型安全な値を格納するライブラリ <b>85</b>
4.1	variant	t: 型安全な union 85
	4.1.1	使い方 85
	4.1.2	型非安全な古典的 union
	4.1.3	variant の宣言
	4.1.4	variant の初期化
		デフォルト初期化 88
		コピー初期化 89
		variant のコンストラクターに値を渡した場合 89
		in_place_type による emplace 構築 90
	4.1.5	variant の破棄
	4.1.6	variant の代入
	4.1.7	variant $\mathcal{O}$ emplace
	4.1.8	variant に値が入っているかどうかの確認 93
		valueless_by_exception メンバー関数 93
		index メンバー関数
	4.1.9	swap
	4.1.10	variant_size <t>: variant が保持できる型の数を取得 95</t>
	4.1.11	variant_alternative <i, t="">: インデックスから型を返す 96</i,>
	4.1.12	holds_alternative: variant が指定した型の値を保持してい
		るかどうかの確認
	4.1.13	get <i>(v): インデックスから値の取得 97</i>
	4.1.14	get <t>(v):型から値の取得 99</t>
	4.1.15	get_if: 値を保持している場合に取得 100
	4.1.16	variant の比較
		日 姓の比較

		大小比較	. 102
	4.1.17	visit: variant が保持している値を受け取る	. 103
4.2	any:	どんな型の値でも保持できるクラス	. 104
	4.2.1	使い方	. 104
	4.2.2	any の構築と破棄	. 105
	4.2.3	in_place_type コンストラクター	. 105
	4.2.4	any への代入	. 106
	4.2.5	any のメンバー関数	. 106
		emplace	. 106
		reset: 値の破棄	. 106
		swap: スワップ	. 107
		has_value:値を保持しているかどうか調べる	. 107
		type:保持している型の type_info を得る	. 108
	4.2.6	any のフリー関数	. 108
		make_any <t>: T型の any を作る</t>	. 108
		any_cast: 保持している値の取り出し	. 109
4.3	option	al:値を保有しているか、していないクラス	. 110
	4.3.1	使い方	. 110
	4.3.2	optional のテンプレート実引数	. 112
	4.3.3	optional の構築	. 112
	4.3.4	optional の代入	
	4.3.5	optional の破棄	. 113
	4.3.6	swap	
	4.3.7	has_value:値を保持しているかどうか確認する	
	4.3.8	operator bool:値を保持しているかどうか確認する	
	4.3.9	value: 保持している値を取得	
	4.3.10	value_or: 値もしくはデフォルト値を返す	
	4.3.11	reset: 保持している値を破棄する	
	4.3.12	optional 同士の比較	
		同一性の比較・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
		大小比較	. 118
		optional と std::nullopt との比較	
		optional <t>と T の比較</t>	
		make_optional <t>: optional<t>を返す</t></t>	. 119
	4.3.16	$make\_optional < T,  Args  \dots \qquad >  :  \  optional < T > \not e$	
		in place type 構築して返す	120

第5章	<b>string_view</b> : 文字列ラッパー	121
5.1	使い方	121
5.2	basic_string_view	123
5.3	文字列の所有、非所有	123
5.4	string_view の構築	125
	5.4.1 デフォルト構築	126
	5.4.2 null 終端された文字型の配列へのポインター	126
	5.4.3 文字型へのポインターと文字数	. 126
	5.4.4 文字列クラスからの変換関数	. 127
5.5	string_view の操作	. 128
	5.5.1 remove_prefix/remove_suffix: 先頭、末尾の要素の削除	. 129
5.6	ユーザー定義リテラル	130
第6章	メモリーリソース:動的ストレージ確保ライブラリ	133
6.1	メモリーリソース	133
	6.1.1 メモリーリソースの使い方	
	6.1.2 メモリーリソースの作り方	
6.2	polymorphic_allocator:動的ポリモーフィズムを実現するアロケー	
	ター	. 137
	6.2.1 コンストラクター	. 138
6.3	プログラム全体で使われるメモリーリソースの取得	139
	6.3.1 new_delete_resource()	139
	6.3.2 null_memory_resource()	139
	6.3.3 デフォルトリソース	140
6.4	標準ライブラリのメモリーリソース	. 140
6.5	プールリソース	. 142
	6.5.1 アルゴリズム	. 142
	6.5.2 synchronized/unsynchronized_pool_resource	. 145
	6.5.3 pool_options	146
	6.5.4 プールリソースのコンストラクター	
	6.5.5 プールリソースのメンバー関数	. 147
	${ m release}()$	. 147
	$upstream\_resource()$	. 147
	$\operatorname{options}()$	
6.6	モノトニックバッファーリソース	. 147
		1.40

	6.6.2 コンストラクター	0
	6.6.3 その他の操作	1
	release()	1
	upstream_resource()	2
第7章	並列アルゴリズム 15	3
7.1	並列実行について	3
7.2	使い方	5
7.3	並列アルゴリズム詳細	6
	7.3.1 並列アルゴリズム	6
	$7.3.2$ ユーザー提供する関数オブジェクトの制約 $\dots \dots 15$	7
	実引数で与えられたオブジェクトを直接、間接に変更しては	
	ならない $\dots$ 15	7
	実引数で与えられたオブジェクトの一意性に依存してはなら	
	ない	8
	データ競合と同期 $\dots$ 15	9
	7.3.3 例外	0
	7.3.4 実行ポリシー16	1
	is_execution_policy traits	
	シーケンス実行ポリシー	
	パラレル実行ポリシー	
	パラレル非シーケンス実行ポリシー16	
	実行ポリシーオブジェクト	2
第8章	数学の特殊関数群 16	5
8.1	ラゲール多項式(Laguerre polynomials)	6
8.2	ラゲール陪多項式(Associated Laguerre polynomials) 16	6
8.3	ルジャンドル多項式(Legendre polynomials) 16	6
8.4	ルジャンドル陪関数(Associated Legendre functions) 16	7
8.5	球面ルジャンドル陪関数(Spherical associated Legendre functions) 16	
8.6	エルミート多項式(Hermite polynomials) 16	
8.7	ベータ関数(Beta function)	8
8.8	第 1 種完全楕円積分(Complete elliptic integral of the first kind) 16	9
8.9	第 2 種完全楕円積分(Complete elliptic integral of the second kind) 16	9
8.10	第 3 種完全楕円積分(Complete elliptic integral of the third kind) 16	9
8.11	第 1 種不完全楕円積分(Incomplete elliptic integral of the first	
	kind)	0

8.12	第2種不完全楕円積分(Incomplete elliptic integroal of the second	
	kind)	70
8.13	第3種不完全楕円積分 (Incomplete elliptic integral of the third	
	kind)1	71
8.14	第1種ベッセル関数(Cylindrical Bessel functions of the first kind)1	71
8.15	ノイマン関数(Cylindrical Neumann functions)	71
8.16	第1種変形ベッセル関数 (Regular modified cylindrical Bessel func-	
	tions)	72
8.17	第 2 種変形ベッセル関数 (Irregular modified cylindrical Bessel	
	functions)	72
8.18	第1種球ベッセル関数(Spherical Bessel functions of the first kind) 1	73
8.19	球ノイマン関数(Spherical Neumann functions)	73
8.20	指数積分(Exponential integral)	74
8.21	リーマンゼータ関数(Riemann zeta function)	74
第 9 章		75
9.1	ハードウェア干渉サイズ(キャッシュライン) 1	75
9.2	std::uncaught_exceptions	76
9.3	apply: tuple の要素を実引数に関数を呼び出す	78
9.4	Searcher: 検索1	79
	9.4.1 default_searcher	79
	9.4.2 boyer_moore_searcher	80
	9.4.3 boyer_moore_horspool_searcher	82
9.5	sample: 乱択アルゴリズム	83
	9.5.1 乱択アルゴリズム	83
	9.5.2 アルゴリズム S:選択標本、要素数がわかっている集合から	
	の標本の選択1	86
	9.5.3 アルゴリズム R:保管標本、要素数がわからない集合からの	
	標本の選択1	87
	9.5.4 C++ $\mathcal{O}$ sample	89
9.6	shared_ptr <t[]>: 配列に対する shared_ptr</t[]>	92
9.7	as_const: const 性の付与1	93
9.8	make_from_tuple: tuple の要素を実引数にコンストラクターを呼	
	び出す	94
9.9	invoke: 指定した関数を指定した実引数で呼び出す1	95
0.10	not fn・豆 h 値の不完ラッパー	06

9.11	メモリー管理アルゴリズム196
	9.11.1 addressof
	9.11.2 uninitialized_default_construct 197
	9.11.3 uninitialized_value_construct
	9.11.4 uninitialized_copy
	9.11.5 uninitialized_move
	9.11.6 uninitialized_fill
	9.11.7 destroy
9.12	shared_ptr::weak_type
9.13	void_t
9.14	bool_constant
9.15	type_traits
	9.15.1 変数テンプレート版 traits
	9.15.2 論理演算 traits
	conjunction:論理積
	disjunction: 論理和
	negation: 否定
	9.15.3 is_invocable: 呼び出し可能か確認する traits 204
	9.15.4 has_unique_object_representations : 同値の内部表現が同
	ーか確認する traits
	9.15.5 is_nothrow_swappable: 無例外 swap 可能か確認する traits 206
9.16	コンテナーで不完全型のサポート
9.17	emplace の戻り値
9.18	map と unordered_map の変更
	9.18.1 try_emplace
	9.18.2 insert_or_assign
9.19	連想コンテナーへの splice 操作
	9.19.1 merge
	9.19.2 ノードハンドル
	9.19.3 extract : ノードハンドルの取得
	9.19.4 insert: ノードハンドルから要素の追加 215
	9.19.5 ノードハンドルの利用例
	ストレージの再確保なしに、コンテナーの一部の要素だけ別
	のコンテナーに移す
	コンテナーの寿命を超えて要素を存続させる218

9.20	コンテナーアクセス関数219
9.21	clamp
9.22	3 次元 hypot
9.23	atomic <t>::is_always_lock_free</t>
9.24	scoped_lock:可変長引数 lock_guard
9.25	std::byte
9.26	最大公約数 (gcd) と最小公倍数 (lcm)
	9.26.1 gcd: 最大公約数
	9.26.2 lcm: 最小公倍数
第 10 章	ファイルシステム 225
10.1	名前空間
10.2	POSIX 準拠
10.3	ファイルシステムの全体像
10.4	エラー処理 227
	10.4.1 例外
	10.4.2 非例外
10.5	path: ファイルパス文字列クラス
	10.5.1 path: ファイルパスの文字列
	10.5.2 ファイルパスの操作
10.6	file_status
10.7	directory_entry
10.8	directory_iterator
	10.8.1 エラー処理241
10.9	recursive_directory_iterator
	10.9.1 オプション242
	10.9.2 depth: 深さ取得
	10.9.3 pop: 現在のディレクトリーの列挙中止 244
	10.9.4 recursion_pending: 現在のディレクトリーの再帰をスキッ
	$\mathcal{I}$
10.10	ファイルシステム操作関数248
	10.10.1 ファイルパス取得
	current_path
	temp_directory_path
	10.10.2 ファイルパス操作
	absolute 248

### 目次

canonical	248
weakly_canonical	248
relative	249
proximate	249
10.10.3 作成	249
create_directory	249
create_directories	249
$create\_directory\_symlink  . \ . \ . \ . \ . \ . \ . \ . \ . \ .$	250
create_symlink	250
$create\_hard\_link  .  .  .  .  .  .  .  .  .  $	251
10.10.4 コピー	251
copy_file	251
copy	251
copy_symlink	252
10.10.5 削除	253
remove	253
remove_all	253
10.10.6 変更	254
permissions	254
rename	255
resize_file	256
10.10.7 情報取得	256
ファイルタイプの判定	256
status	259
$status\_known \dots \dots \dots \dots \dots \dots \dots \dots \dots$	259
symlink_status	259
equivalent	259
exists	259
file_size	259
${\rm hard\_link\_count}  \dots \dots \dots \dots \dots \dots \dots$	260
last_write_time	260
read_symlink	262
space	262

索引 266

xvi

### 第1章

# **SD-6 C++** のための 機能テスト推奨

C++17 には機能テストのための C プリプロセッサー機能が追加された。

### 1.1 機能テストマクロ

機能テストというのは、C++ の実装(C++ コンパイラー)が特定の機能をサポートしているかどうかをコンパイル時に判断できる機能だ。本来、C++17 の規格に準拠した C++ 実装は、C++17 の機能をすべてサポートしているべきだ。しかし、残念ながら現実の C++ コンパイラーの開発はそのようには行われていない。C++17 に対応途中の C++ コンパイラーは将来的にはすべての機能を実装することを目標としつつも、現時点では一部の機能しか実装していないという状態になる。

たとえば、C++11 で追加された rvalue リファレンスという機能に現実の C++ コンパイラーが対応しているかどうかをコンパイル時に判定するコードは以下のようになる。

```
#ifndef __USE_RVALUE_REFERENCES
#if (__GNUC__ > 4 || __GNUC__ == 4 && __GNUC_MINOR__ >= 3) || \
    __MSC_VER >= 1600
#if __EDG_VERSION__ > 0
    #define __USE_RVALUE_REFERENCES (__EDG_VERSION__ >= 410)
#else
    #define __USE_RVALUE_REFERENCES 1
#endif
#elif __clang__
#define __USE_RVALUE_REFERENCES __has_feature(cxx_rvalue_references)
#else
#define __USE_RVALUE_REFERENCES 0
```

### 第1章 SD-6 C++ のための機能テスト推奨

### #endif

### #endif

このそびえ立つクソのようなコードは現実に書かれている。このコードは GCC と MSVC と EDG と Clang という現実に使われている主要な 4 つの C++ コンパイラーに対応した rvalue リファレンスが実装されているかどうかを判定する機能テストコードだ。

この複雑なプリプロセッサーを解釈した結果、\_\_USE\_RVALUE\_REFERENCES というプリプロセッサーマクロの値が、もし C++ コンパイラーが rvalue リファレンスをサポートしているならば 1、そうでなければ 0 となる。後は、このプリプロセッサーマクロで #if ガードしたコードを書く。

### // 文字列を処理する関数

void process\_string( std::string const & str ) ;

### #if \_\_USE\_RVALUE\_REFERENCES == 1

// 文字列をムーブして処理してよい実装の関数

// C++ コンパイラーが rvalue リファレンスを実装していない場合はコンパイルされない

void process\_string( std::string && str ) ;

### #endif

C++17では、上のようなそびえ立つクソのようなコードを書かなくてもすむように、標準の機能テストマクロが用意された。C++ 実装が特定の機能をサポートしている場合、対応する機能テストマクロが定義される。機能テストマクロの値は、その機能が C++ 標準に採択された年と月を合わせた 6 桁の整数で表現される。

たとえば rvalue リファレンスの場合、機能テストマクロの名前は\_\_cpp\_rvalue \_referencesとなっている。rvalue リファレンスは 2006 年 10 月に採択されたので、機能テストマクロの値は 200610 という値になっている。将来 rvalue リファレンスの機能が変更されたときは機能テストマクロの値も変更される。この値を調べることによって使っている C++ コンパイラーはいつの時代の C++ 標準の機能をサポートしているか調べることもできる。

この機能テストマクロを使うと、上のコードの判定は以下のように書ける。

### // 文字列を処理する関数

void process\_string( std::string const & str ) ;

### #ifdef \_\_cpp\_rvalue\_references

// 文字列をムーブして処理してよい実装の関数

// C++ コンパイラーが rvalue リファレンスを実装していない場合はコンパイルさ

### 1.2 \_\_has\_include 式: ヘッダーファイルの存在を判定する

```
れない
void process_string( std::string && str ) ;
#endif
```

機能テストマクロの値は通常は気にする必要がない。機能テストマクロが存在するかどうかで機能の有無を確認できるので、通常は #ifdef を使えばよい。

### **1.2** \_\_has\_include 式: ヘッダーファイルの存在を判定する

\_\_has\_include 式は、ヘッダーファイルが存在するかどうかを調べるための機能だ。

```
__has_include( ヘッダー名 )
```

\_\_has\_include 式はヘッダー名が存在する場合 1 に、存在しない場合 0 に置換される。

たとえば、C++17の標準ライブラリにはファイルシステムが入る。そのヘッダー名は  $\langle filesystem \rangle$  だ。C++ コンパイラーがファイルシステムライブラリをサポートしているかどうかを調べるには、以下のように書く。

```
#if __has_include(<filesystem>)
// ファイルシステムをサポートしている
#include <filesystem>
namespace fs = std::filesystem;
#else
// 実験的な実装を使う
#include <experimental/filesystem>
namespace fs = std::experimental::filesystem;
#endif
```

C++ 実装が $_-$ has\_include をサポートしているかどうかは、 $_-$ has\_include の存在をプリプロセッサーマクロのように #ifdef で調べることによって判定できる。

```
#ifdef __has_include
// __has_include をサポートしている
#else
// __has_include をサポートしていない
#endif
__has_include 式は #if と #elif の中でしか使えない。
int main()
{
```

第 1 章 SD-6 C++ のための機能テスト推奨

```
// エラー
if ( __has_include(<vector>) )
{ }
}
```

### 1.3 \_\_has\_cpp\_attribute 式

C++ 実装が特定の属性トークンをサポートしているかどうかを調べるには、\_\_has\_cpp\_attribute 式が使える。

```
__has_cpp_attribute( 属性トークン )
```

\_\_has\_cpp\_attribute 式は、属性トークンが存在する場合は属性トークンが標準規格に採択された年と月を表す数値に、存在しない場合は0に置換される。

```
// [[nodiscard]] がサポートされている場合は使う
#if __has_cpp_attribute(nodiscard)
[[nodiscard]]
#endif
void * allocate_memory( std::size_t size );
```

\_\_has\_include 式と同じく、\_\_has\_cpp\_attribute 式も #if か #elif の中でしか使えない。#ifdef で\_\_has\_cpp\_attribute 式の存在の有無を判定できる。

### 第2章

## C++14 のコア言語の新機能

C++14 で追加された新機能は少ない。C++14 は C++03 と同じくマイナーアップデートという位置付けで積極的な新機能の追加は見送られたからだ。

### 2.1 二進数リテラル

二進数リテラルは整数リテラルを二進数で記述する機能だ。整数リテラルのプレフィクスに 0B もしくは 0b を書くと、二進数リテラルになる。整数を表現する文字は 0 と 1 しか使えない。

```
int main()
{
    int x1 = 0b0 ; // 0
    int x2 = 0b1 ; // 1
    int x3 = 0b10 ; // 2
    int x4 = 0b11001100 ; // 204
}
```

二進数リテラルは浮動小数点数リテラルには使えない。 機能テストマクロは \_\_cpp\_binary\_literals, 値は 201304。

### 2.2 数値区切り文字

数値区切り文字は、整数リテラルと浮動小数点数リテラルの数値をシングルクオート文字で区切ることができる機能だ。区切り桁は何桁でもよい。

```
int main()
{
   int x1 = 123'456'789 ;
```

```
int x2 = 1'2'3'4'5'6'7'8'9 ;
int x3 = 1'2345'6789 ;
int x4 = 1'23'456'789 ;
double x5 = 3.14159'26535'89793 ;
}
```

他には、1バイト単位で見やすいように区切ることもできる。

```
int main()
{
    unsigned int x1 = 0xde'ad'be'ef;
    unsigned int x2 = 0b110111110'10101101'10111110'11101111 ;
}
```

数値区切りはソースファイルを人間が読みやすくするための機能で、数値に影響を与えない。

### 2.3 [[deprecated]] 属性

[[deprecated]] 属性は名前とエンティティが、まだ使えるものの利用は推奨されない状態であることを示すのに使える。[[deprecated]] 属性が指定できる名前とエンティティは、クラス、typedef 名、変数、非 static データメンバー、関数、名前空間、enum, enumerator, テンプレートの特殊化だ。

それぞれ以下のように指定できる。

```
// 変数

// どちらでもよい

[[deprecated]] int variable_name1 { } ;

int variable_name2 [[deprecated]] { } ;

// typedef 名

[[deprecated]] typedef int typedef_name1 ;

typedef int typedef_name2 [[deprecated]] ;

using typedef_name3 [[deprecated]] = int ;
```

### 2.3 [[deprecated]] 属性

```
// 関数
  // メンバー関数も同じ文法
  // どちらでもよい
   [[deprecated]] void function_name1() { }
  void function_name2 [[deprecated]] () { }
  // クラス
  // union も同じ
  class [[deprecated]] class_name
  // 非 static データメンバー
   [[deprecated]] int non_static_data_member_name ;
  // enum
  enum class [[deprecated]] enum_name
  // enumerator
   enumerator_name [[deprecated]] = 42
  namespace [[deprecated]] namespace_name { int x ; }
  // テンプレートの特殊化
  template < typename T >
  class template_name { } ;
  template < >
  class [[deprecated]] template_name<void> { } ;
 [[deprecated]] 属性が指定された名前やエンティティを使うと、C++ コンパイ
ラーは警告メッセージを出す。
 [[deprecated]] 属性には、文字列を付け加えることができる。これは C++ 実装
によっては警告メッセージに含まれるかもしれない。
   [[deprecated("Use of f() is deprecated. Use f(int option) instead.")]]
  void f();
```

```
void f(int option);
機能テストマクロは __has_cpp_attribute(deprecated), 値は 201309。
```

### 2.4 通常の関数の戻り値の型推定

関数の戻り値の型として auto を指定すると、戻り値の型を return 文から推定して くれる。

```
// int ()
auto a(){ return 0 ; }
// double ()
auto b(){ return 0.0 ; }

// T(T)
template < typename T >
auto c(T t){ return t ; }

return 文の型が一致していないとエラーとなる。
auto f()
{
 return 0 ; // エラー、一致していない
return 0.0 ; // エラー、一致していない
```

すでに型が決定できる return 文が存在する場合、関数の戻り値の型を参照するコードも書ける。

```
auto a()
{
          &a ; // エラー、aの戻り値の型が決定していない
          return 0 ;
}

auto b()
{
          return 0 ;
          &b ; // OK、戻り値の型は int
}
```

関数 a へのポインターを使うには関数 a の型が決定していなければならないが、 return 文の前に型は決定できないので関数 a はエラーになる。関数 b は return 文が 現れた後なので戻り値の型が決定できる。

再帰関数も書ける。

```
auto sum( unsigned int i )
{
   if ( i == 0 )
      return i ; // 戻り値の型は unsigned int
   else
      return sum(i-1)+i ; // OK
}
```

このコードも、return 文の順番を逆にすると戻り値の型が決定できずエラーとなるので注意。

```
auto sum( unsigned int i )
{
   if ( i != 0 )
      return sum(i-1)+i ; // エラー
   else
      return i ;
}
```

機能テストマクロは \_\_cpp\_return\_type\_deduction, 値は 201304。

### 2.5 decltype(auto): 厳格な auto

警告:この項目はC++ 規格の詳細な知識を解説しているため極めて難解になっている。平均的なC++ プログラマーはこの知識を得てもよりよいコードが書けるようにはならない。この項目は読み飛ばすべきである。

decltype(auto) は auto 指定子の代わりに使える厳格な auto だ。利用には C++ の規格の厳格な理解が求められる。

auto と decltype(auto) は型指定子と呼ばれる文法の一種で、プレイスホルダー型として使う。

わかりやすく言うと、具体的な型を式から決定する機能だ。

```
// a は int
auto a = 0 ;
// b は int
```

```
auto b() { return 0 ; }
```

変数宣言にプレイスホルダー型を使う場合、型を決定するための式は初期化子と呼ばれる部分に書かれる式を使う。関数の戻り値の型推定にプレイスホルダー型を使う場合、return 文の式を使う。

decltype(auto) は auto の代わりに使うことができる。decltype(auto) も型を式から決定する。

```
// a は int
decltype(auto) a = 0 ;
// b は int
decltype(auto) b() { return 0 ; }
```

一見すると auto と decltype(auto) は同じようだ。しかし、この 2 つは式から型を決定する方法が違う。どちらも C++ の規格の極めて難しい規則に基づいて決定される。習得には熟練の魔法使いであることが要求される。

auto が式から型を決定するには、auto キーワードをテンプレートパラメーター名 で置き換えた関数テンプレートの仮引数に、式を実引数として渡してテンプレート実 引数推定を行わせた場合に推定される型が使われる。

たとえば

```
auto x = 0;
```

の場合は、

```
template < typename T >
void f( T u ) ;
```

のような関数テンプレートに対して、

```
f(0);
```

と実引数を渡したときにuの型として推定される型と同じ型になる。

```
int i ;
auto const * x = &i ;
```

の場合には、

```
template < typename T >
void f( T const * u ) ;
```

のような関数テンプレートに

2.5 decltype(auto): 厳格な auto

f(&i);

と実引数を渡したときに  $\mathbf{u}$  の型として推定される型と同じ型になる。この場合は int const \* になる。

ここまでが auto の説明だ。decltype(auto) の説明は簡単だ。

decltype(auto) の型は、auto を式で置き換えた decltype の型になる。

```
// int
decltype(auto) a = 0;

// int
decltype(auto) f() { return 0; }

上のコードは、下のコードと同じ意味だ。
decltype(0) a = 0;
decltype(0) f() { return 0; }
```

ここまでは簡単だ。そして、これ以降は黒魔術のような C++ の規格の知識が必要になってくる。

auto と decltype(auto) は一見すると同じように見える。型を決定する方法として、auto は関数テンプレートの実引数推定を使い、decltype(auto) は decltype を使う。どちらも式を評価した結果の型になる。いったい何が違うというのか。

主な違いは、auto は関数呼び出しを使うということだ。関数呼び出しの際にはさまざまな暗黙の型変換が行われる。

たとえば、配列を関数に渡すと、暗黙の型変換の結果、配列の先頭要素へのポインターになる。

```
template < typename T >
void f( T u ) {}

int main()
{
    int array[5];
    // Tはint *
    f( array );
}

では auto と decltype(auto) を使うとどうなるのか。
int array[5];
// int *
```

```
auto x1 = array ;
  // エラー、配列は配列で初期化できない
  decltype(auto) x2 = array ;
 このコードは、以下と同じ意味になる。
  int array[5] ;
  // int *
  int * x1 = array ;
  // エラー、配列は配列で初期化できない
  int x2[5] = array;
 autoの場合、型は int *となる。配列は配列の先頭要素へのポインターへと暗黙に
変換できるので、結果のコードは正しい。
 decltype(auto) の場合、型は int [5] となる。配列は配列で初期化、代入ができ
ないので、このコードはエラーになる。
 関数型も暗黙の型変換により関数へのポインター型になる。
  void f();
  // 型は void(*)()
  auto x1 = f;
  // エラー、関数型は変数にできない
  decltype(auto) x2 = f;
 auto はトップレベルのリファレンス修飾子を消すが、decltype(auto) は保持する。
  int & f()
     static int x ;
     return x ;
  int main()
     // int
     auto x1 = f();
     // int &
     decltype(auto) x2 = f();
```

リスト初期化は auto では std::initializer\_list だが、decltype(auto) では式で

### 2.5 decltype(auto): 厳格な auto

```
はないためエラー。

int main()
{

    // std::initializer_list<int>
    auto x1 = { 1,2,3 };

    // エラー、decltype({1,2,3}) はできない
    decltype(auto) x2 = { 1,2,3 };
}

decltype(auto) は単体で使わなければならない。

// OK
auto const x1 = 0;

// エラー
decltype(auto) const x2 = 0;
```

この他にも auto と decltype(auto) にはさまざまな違いがある。すべての違いを列挙するのは煩雑なので省略するが、decltype(auto) は式の型を直接使う。auto はたいていの場合は便利な型の変換が入る。

auto は便利でたいていの場合はうまくいくが暗黙の型の変換が入るため、意図どおりの推定をしてくれないことがある。

たとえば、引数でリファレンスを受け取り、戻り値でそのリファレンスを返す関数 を書くとする。以下のように書くのは間違いだ。

```
// int ( int & )
auto f( int & ref )
{ return ref ; }
```

なぜならば、戻り値の型は式の型から変化して int になってしまうからだ。ここで decltype(auto) を使うと、

```
// int & ( int & )
decltype(auto) f( int & ref )
{ return ref ; }
```

式の型をそのまま使ってくれる。

ラムダ式に decltype(auto) を使う場合は以下のように書く。

```
[]() -> decltype(auto) { return 0 ; } ;
```

decltype(auto) は主に関数の戻り値の型推定で式の型をそのまま推定してくれる

ようにするために追加された機能だ。その利用には C++ の型システムの深い理解が必要になる。

機能テストマクロは \_\_cpp\_decltype\_auto, 値は 201304。

### 2.6 ジェネリックラムダ

ジェネリックラムダはラムダ式の引数の型を書かなくてもすむようにする機能だ。 通常のラムダ式は以下のように書く。

```
int main()
{
    []( int i, double d, std::string s ) { } ;
}
```

ラムダ式の引数には型が必要だ。しかし、クロージャーオブジェクトのoperator () に渡す型はコンパイル時にわかる。コンパイル時にわかるということはわざわざ人間が指定する必要はない。ジェネリックラムダを使えば、引数の型を書くべき場所に auto キーワードを書くだけで型を推定してくれる。

```
int main()
{
    []( auto i, auto d, auto s ) { } ;
}
```

ジェネリックラムダ式の結果のクロージャー型には呼び出しごとに違う型を渡すことができる。

```
int main()
{
    auto f = []( auto x ) { std::cout << x << '\n' ; } ;
    f( 123 ) ; // int
    f( 12.3 ) ; // double
    f( "hello" ) ; // char const *
}</pre>
```

仕組みは簡単で、以下のようなメンバーテンプレートの operator ()を持ったクロージャーオブジェクトが生成されているだけだ。

```
struct closure_object
{
```

```
template < typename T >
  auto operator () ( T x )
  {
     std::cout << x << '\n' ;
  }
};</pre>
```

機能テストマクロは \_\_cpp\_generic\_lambdas, 値は 201304。

### 2.7 初期化ラムダキャプチャー

初期化ラムダキャプチャーはラムダキャプチャーする変数の名前と式を書くことが できる機能だ。

ラムダ式は書かれた場所から見えるスコープの変数をキャプチャーする。

```
int main()
{
    int x = 0 ;
    auto f = [=]{ return x ; } ;
    f() ;
}
```

初期化ラムダキャプチャーはラムダキャプチャーに初期化子を書くことができる機能だ。

```
int main()
{
    int x = 0;
    [x = x, y = x, &ref = x, x2 = x * 2]
    {// キャプチャーされた変数を使う
        x;
        y;
        ref;
        x2;
    };
```

初期化ラムダキャプチャーは、"識別子 = expr"という文法でラムダ導入子 [] の中に書く。するとあたかも "auto 識別子 = expr ;" と書いたかのように変数が作られる。これによりキャプチャーする変数の名前を変えたり、まったく新しい変数を宣言することができる。

初期化ラムダキャプチャーの識別子の前に & を付けると、リファレンスキャプチャー扱いになる。

```
int main()
{
    int x = 0;
    [&ref = x]()
    {
       ref = 1;
    }();
    // x は 1
}
```

初期化ラムダキャプチャーが追加された理由には変数の名前を変えたりまったく新しい変数を導入したいという目的の他に、非 static データメンバーをコピーキャプチャーするという目的がある。

以下のコードには問題があるが、わかるだろうか。

```
struct X
{
    int data = 42;

    auto get_closure_object()
    {
        return [=]{ return data; };
    }
};

int main()
{
    std::function< int() > f;

    {
        X x;
        f = x.get_closure_object();
    }

    std::cout << f() << std::endl;
}</pre>
```

```
X::get_closure_object は X::data を返すクロージャーオブジェクトを返す。
```

```
auto get_closure_object()
{
    return [=]{ return data ; } ;
}
```

これを見ると、コピーキャプチャーである [=] を使っているので、data はクロージャーオブジェクト内にコピーされているように思える。しかし、ラムダ式は非 static データメンバーをキャプチャーしてはいない。ラムダ式がキャプチャーしているのは this ポインターだ。上のコードと下のコードは同じ意味になる。

```
auto get_closure_object()
{
    return [this]{ return this->data; };
}

さて、main 関数をもう一度見てみよう。
int main()
{
    // クロージャーオブジェクトを代入するための変数
    std::function< int() > f;

    {
        X x ; // x が構築される
        f = x.get_closure_object();
        // x が破棄される
    }

    // すでに x は破棄された
    // return &x->data で破棄された x を参照する
    std::cout << f() << std::endl;
```

なんと、すでに破棄されたオブジェクトへのリファレンスを参照してしまっている。これは未定義の動作だ。

初期化ラムダキャプチャーを使えば、非 static データメンバーもコピーキャプチャーできる。

```
auto get_closure_object()
{
```

```
return [data=data]{ return data; };
}

なお、ムーブキャプチャーは存在しない。ムーブというのは特殊なコピーなので初期化ラムダキャプチャーがあれば実現できるからだ。

auto f()
{

std::string str;

std::cin >> str;

// ムーブ

return [str = std::move(str)]{ return str; };
}

機能テストマクロは __cpp_init_captures, 値は 201304。
```

### 2.8 変数テンプレート

変数テンプレートとは変数宣言をテンプレート宣言にできる機能だ。

```
template < typename T >
T variable { };

int main()
{
    variable<int> = 42;
    variable<double> = 1.0;
}

これだけではわからないだろうから、順を追って説明する。
C++ではクラスを宣言できる。
    class X
{
        int member;
    };

C++ではクラスをテンプレート宣言できる。型テンプレートパラメーターは型として使える。
    template < typename T >
    class X
```

```
{
  public :
     T member ;
  int main()
  {
     X<int>i;
     i.member = 42; // int
     X<double> d ;
     d.member = 1.0 ; // double
 C++ では関数を宣言できる。
  int f( int x )
  { return x ; }
 C++ では関数をテンプレート宣言できる。型テンプレートパラメーターは型とし
て使える。
  template < typename T >
  T f( T x )
  { return x ; }
  int main()
     auto i = f(42); // int
     auto d = f(1.0); // double
 C++11 では typedef 名を宣言するためにエイリアス宣言ができる。
  using type = int ;
 C++11 ではエイリアス宣言をテンプレート宣言できる。型テンプレートパラメー
ターは型として使える。
  template < typename T >
  using type = T;
  int main()
```

```
{
    type<int> i = 42 ; // int
    type<double> d = 1.0 ; // double
}
```

そろそろパターンが見えてきたのではないだろうか。C++ では一部の宣言はテンプレート宣言できるということだ。このパターンを踏まえて以下を考えてみよう。 C++ では変数を宣言できる。

### int variable{};

C++14 では変数宣言をテンプレート宣言できる。型テンプレートパラメーターは型として使える。

```
template < typename T >
T variable { } ;
int main()
{
   variable<int> = 42 ;
   variable<double> = 1.0 ;
}
```

変数テンプレートは名前どおり変数宣言をテンプレート宣言できる機能だ。変数テンプレートはテンプレート宣言なので、名前空間スコープとクラススコープの中にしか書くことができない。

// これはグローバル名前空間スコープという特別な名前空間スコープ

```
namespace ns {
    // 名前空間スコープ
}
class
{
    // クラススコープ
} ;
```

変数テンプレートの使い道は主に2つある。

}

#### 2.8.1 意味は同じだが型が違う定数

プログラムでマジックナンバーを変数化しておくのは良い作法であるとされている。たとえば円周率を 3.14... などと書くよりも pi という変数名で扱ったほうがわかりやすい。変数化すると、円周率の値が後で変わったときにプログラムを変更するのも楽になる。

```
constexpr double pi = 3.1415926535;
```

しかし、円周率を表現する型が複数ある場合どうすればいいのか。よくあるのは名前を分ける方法だ。

```
constexpr float pi_f = 3.1415 ;
 constexpr double pi_d = 3.1415926535 ;
 constexpr int pi_i = 3 ;
 // 任意の精度の実数を表現できるクラスとする
 const Real pi_r("3.141592653589793238462643383279") ;
しかしこれは、使う側で型によって名前を変えなければならない。
 // 円の面積を計算する関数
 template < typename T >
 T calc_area( T r )
    // Tの型によって使うべき名前が変わる
    return r * r * ???;
 }
関数テンプレートを使うという手がある。
 template < typename T >
 constexpr T pi()
    return static_cast<T>(3.1415926535) ;
 }
 template < >
 Real pi()
 {
    return Real("3.141592653589793238462643383279");
```

### 第2章 C++14のコア言語の新機能

template < typename T >

```
T calc_area( T r )
      return r * r * pi<T>() ;
   }
  しかし、この場合引数は何もないのに関数呼び出しのための()が必要だ。
 変数テンプレートを使うと以下のように書ける。
   template < typename T >
   constexpr T pi = static_cast<T>(3.1415926535);
   template < >
   Real pi<Real>("3.141592653589793238462643383279") ;
   template < typename T >
   T calc_area( T r )
      return r * r * pi < T > ;
2.8.2 traits のラッパー
 値を返す traits で値を得るには::value と書かなければならない。
   std::is_pointer<int>::value ;
   std::is_same< int, int >::value ;
 C++14 では std::integral_constant に constexpr operator bool が追加された
ので、以下のようにも書ける。
   std::is_pointer<int>{} ;
   std::is_same< int, int >{} ;
  しかしまだ面倒だ。変数テンプレートを使うと traits の記述が楽になる。
   template < typename T >
   constexpr bool is_pointer_v = std::is_pointer<T>::value ;
   template < typename T, typename U >
   constexpr bool is_same_v = std::is_same<T, U>::value ;
   is_pointer_v<int> ;
```

```
is_same_v< int, int > ;
```

C++ の標準ライブラリでは従来の traits ライブラリを変数テンプレートでラップした \_v 版を用意している。

機能テストマクロは \_\_cpp\_variable\_templates, 値は 201304。

## 2.9 constexpr 関数の制限緩和

C++11 で追加された constexpr 関数はとても制限が強い。constexpr 関数の本体には実質 return 文 1 つしか書けない。

C++14 では、ほとんど何でも書けるようになった。

機能テストマクロは \_\_cpp\_constexpr, 値は 201304。

C++11 の constexpr 関数に対応しているが C++14 の constexpr 関数に対応していない C++ 実装では、\_\_cpp\_constexpr マクロの値は 200704 になる。

# 2.10 メンバー初期化子とアグリゲート初期化の組み合わせ

C++14 ではメンバー初期化子とアグリゲート初期化が組み合わせられるようになった。

メンバー初期化子とはクラスの非 static データメンバーを = で初期化できる C++11 の機能だ。

struct S

第2章 C++14のコア言語の新機能

```
{
    // メンバー初期化子
    int data = 123 ;
} ;
```

アグリゲート初期化とはアグリゲートの条件を満たす型をリスト初期化で初期化で きる C++11 の機能だ。

```
struct S
{
    int x, y, z;
};

S s = { 1,2,3 };
// s.x == 1, s.y == 2, s.z == 3
```

C++11 ではメンバー初期化子を持つクラスはアグリゲート型の条件を満たさないのでアグリゲート初期化ができない。

C++14 では、この制限が緩和された。

```
struct S
{
    int x, y=1, z;
};

S s1 = { 1 };
// s1.x == 1, s1.y == 1, s1.z == 0

S s2{ 1,2,3 };
// s2.x == 1, s2.y == 2, s2.z == 3
```

アグリゲート初期化で、メンバー初期化子を持つ非 static データメンバーに対応 する値がある場合はアグリゲート初期化が優先される。省略された場合はメンバー初 期化子で初期化される。アグリゲート初期化でもメンバー初期化子でも明示的に初期 化されていない非 static データメンバーは空の初期化リストで初期化された場合と 同じになる。

機能テストマクロは \_\_cpp\_aggregate\_nsdmi, 値は 201304。

# 2.11 サイズ付き解放関数

C++14 では operator delete のオーバーロードに、解放すべきストレージのサイズを取得できるオーバーロードが追加された。

```
( void *, std::size_t ) noexcept ;
  void operator delete
  void operator delete[] ( void *, std::size_t ) noexcept ;
 第二引数は std::size_t 型で、第一引数で指定されたポインターが指す解放すべき
ストレージのサイズが与えられる。
 たとえば以下のように使える。
  void * operator new ( std::size_t size )
      void * ptr = std::malloc( size ) ;
      if ( ptr == nullptr )
          throw std::bad_alloc() ;
      std::cout << "allocated storage of size: " << size << '\n';</pre>
      return ptr ;
  void operator delete ( void * ptr, std::size_t size ) noexcept
      std::cout << "deallocated storage of size: " << size << '\n' ;
      std::free( ptr ) ;
  int main()
      auto u1 = std::make_unique<int>(0) ;
```

機能テストマクロは \_\_cpp\_sized\_deallocation, 値は 201309。

auto u2 = std::make\_unique<double>(0.0) ;

# 第3章

# C++17 のコア言語の新機能

C++14 の新機能のおさらいが終わったところで、いよいよ C++17 のコア言語の新機能を解説していく。

C++17 のコア言語の新機能には、C++11 ほどの大きなものはない。

# 3.1 トライグラフの廃止

C++17 ではトライグラフが廃止された。

トライグラフを知らない読者はこの変更を気にする必要はない。トライグラフを知っている読者はなおさら気にする必要はない。

### 3.2 16 進数浮動小数点数リテラル

C++17 では浮動小数点数リテラルに 16 進数を使うことができるようになった。 16 進数浮動小数点数リテラルは、プレフィクス 0x に続いて仮数部を 16 進数 (0123456789abcdefABCDEF) で書き、p もしくは P に続けて指数部を 10 進数で書く。

```
double d1 = 0x1p0 ; // 1
double d2 = 0x1.0p0 ; // 1
double d3 = 0x10p0 ; // 16
double d4 = 0xabcp0 ; // 2748

指数部は e ではなく p か P を使う。
double d1 = 0x1p0 ;
double d2 = 0x1P0 ;
```

16 進数浮動小数点数リテラルでは、指数部を省略できない。

```
int a = 0x1 ; // 整数リテラル
```

0x1.0 ; // エラー、指数部がない

指数部は 10 進数で記述する。16 進数浮動小数点数リテラルは仮数部に 2 の指数部乗を掛けた値になる。つまり、

MqNx0

という浮動小数点数リテラルの値は

 $N \times 2^M$ 

となる。

0x1p0 ; // 1
0x1p1 ; // 2
0x1p2 ; // 4
0x10p0 ; // 16
0x10p1 ; // 32
0x1p-1 ; // 0.5
0x1p-2 ; // 0.25

16 進数浮動小数点数リテラルには浮動小数点数サフィックスを記述できる。

auto a = 0x1p0f ; // float
auto b = 0x1p0l ; // long double

16 進数浮動小数点数リテラルは、浮動小数点数が表現方法の詳細を知っている環境(たとえば IEEE-754)で、正確な浮動小数点数の表現が記述できるようになる。機能テストマクロは \_\_cpp\_hex\_float, 値は 201603。

#### 3.3 UTF-8 文字リテラル

C++17 では UTF-8 文字リテラルが追加された。

char c = u8'a';

UTF-8 文字リテラルは文字リテラルにプレフィクス u8 を付ける。UTF-8 文字リテラルは UTF-8 のコード単位 1 つで表現できる文字を扱うことができる。UCS の 規格としては、C0 制御文字と基本ラテン文字 Unicode ブロックが該当する。UTF-8 文字リテラルに書かれた文字が複数の UTF-8 コード単位を必要とする場合はエラーとなる。

// エラー

```
// U+3042 は UTF-8 は 0xE3, 0x81, 0x82 という 3 つのコード単位で表現する必要が // あるため u8' あ';
```

機能テストマクロはない。

# 3.4 関数型としての例外指定

C++17 では例外指定が関数型に組み込まれた。

例外指定とは noexcept のことだ。noexcept と noexcept(true)が指定された関数は例外を外に投げない。

C++14 ではこの例外指定は型システムに入っていなかった。そのため、無例外指定の付いた関数へのポインター型は型システムで無例外を保証することができなかった。

```
// C++14 のコード
void f()
{
    throw 0;
}

int main()
{
    // 無例外指定の付いたポインター
    void (*p)() noexcept = &f;

    // 無例外指定があるにもかかわらず例外を投げる
    p();
}
```

C++17 では例外指定が型システムに組み込まれた。例外指定のある関数型を例外 指定のない関数へのポインター型に変換することはできる。逆はできない。

```
// 型は void()
void f() { }

// 型は void() noexcept
void g() noexcept { }

// OK

// p1, &f は例外指定のない関数へのポインター型
void (*p1)() = &f;
```

```
// OK
// 例外指定のある関数へのポインター型&g を例外指定のない関数へのポインター型p2
// に変換できる
void (*p2)() = &g ; // OK

// エラー
// 例外指定のない関数へのポインター型&f は例外指定のある関数へのポインター型p3
// に変換できない
void (*p3)() noexcept = &f ;

// OK
// p4, &g は例外指定のある関数へのポインター型
void (*p4)() noexcept = &g ;
```

機能テストマクロは \_\_cpp\_noexcept\_function\_type, 値は 201510。

## 3.5 fold 式

C++17 には fold 式が入った。fold は元は数学の概念で畳み込みとも呼ばれている。

C++ における fold 式とはパラメーターパックの中身に二項演算子を適用するための式だ。

今、可変長テンプレートを使って受け取った値をすべて加算した合計を返す関数 sum を書きたいとする。

```
template < typename T, typename ... Types > auto sum( T x, Types ... args ) ;

int main()
{
   int result = sum(1,2,3,4,5,6,7,8,9) ; // 45
}

このような関数テンプレート sum は以下のように実装することができる。

template < typename T > auto sum( T x )
{
   return x ;
}
```

```
template < typename T, typename ... Types >
auto sum( T x, Types ... args )
{
    return x + sum( args... ) ;
}
```

sum(x, args) は 1 番目の引数を x で、残りをパラメーターパック args で受け取る。そして、x + sum(args ...) を返す。すると、sum(args ...) はまた sum(x, args) に渡されて、1 番目の引数、つまり最初から見て 2 番目の引数が x に入り、また sum が呼ばれる。このような再帰的な処理を繰り返していく。

そして、引数が1つだけになると、可変長テンプレートではない sum が呼ばれる。これは重要だ。なぜならば可変長テンプレートは0個の引数を取ることができるので、そのまま可変長テンプレート版の sum が呼ばれてしまうと、次の sum の呼び出しができずにエラーとなる。これを回避するために、また再帰の終了条件のために、引数が1つの sum のオーバーロード関数を書いておく。

可変長テンプレートでは任意個の引数に対応するために、このような再帰的なコードが必須になる。

しかし、ここで実現したいこととは N 個あるパラメーターパック args の中身に対して、仮に N 番目を args#N とする表記を使うと、args#0 + args#1 + ... + args#N-1 のような展開をしたいだけだ。C++17 の fold 式はパラメーターパックに対して二項演算子を適用する展開を行う機能だ。

fold 式を使うと sum は以下のように書ける。

```
template < typename ... Types >
auto sum( Types ... args )
{
    return ( ... + args ) ;
}
```

( ... + args ) は、args#0 + args#1 + ... + args#N-1 のように展開される。 fold 式には、単項 fold 式と二項 fold 式がある。そして、演算子の結合順序に合わせて左 fold と右 fold がある。

fold 式は必ず括弧で囲まなければならない。

```
template < typename ... Types >
auto sum( Types ... args )
{
    // fold 式
    ( ... + args ) ;
```

```
// エラー、括弧がない
      ... + args ;
  }
 単項 fold 式の文法は以下のいずれかになる。
   単項右fold
   ( cast-expression fold-operator \dots )
   単項左fold
   ( ... fold-operator cast-expression )
例:
   template < typename ... Types >
  void f( Types ... args )
      // 単項左 fold
      ( ... + args ) ;
      // 単項右 fold
      ( args + ... ) ;
 cast-expression には未展開のパラメーターパックが入っていなければならない。
例:
   template < typename T >
  T f(Tx) { return x; }
  template < typename ... Types >
   auto g( Types ... args )
      // f(args#0) + f(args#1) + ... + f(args#N-1)
      return ( ... + f(args) ) ;
  }
 これは f(args) というパターンが展開される。
 fold-operator には以下のいずれかの二項演算子を使うことができる。
                         | << >>
                       &
   += -= *= /= %= ^= &= |= <<= >>=
                <= >= && || , .* ->*
```

fold 式には左 fold と右 fold がある。

左 fold 式の ( ... op pack ) では、展開結果は ((( pack#0 op pack#1 ) op pack#2 ) ... op pack#N-1 )となる。右 fold 式の ( pack op ... ) では、展開結果は ( pack#0 op ( pack#1 op ( pack#2 op ( ... op pack#N-1 ))))となる。

浮動小数点数のような交換法則を満たさない型に fold 式を適用する際には注意が必要だ。

二項 fold 式の文法は以下のいずれかになる。

```
( cast-expression fold-operator \dots fold-operator cast-expression )
```

左右の cast-expression のどちらか片方だけに未展開のパラメーターパックが入っていなければならない。2つの fold-operator は同じ演算子でなければならない。 ( e1 op1 ... op2 e2 ) という二項 fold 式があったとき、e1 にパラメーターパッ

(el opl ... op2 e2)という二項 fold 式があったこさ、e1 にハクメーターハックがある場合は二項右 fold 式、e2 にパラメーターパックがある場合は二項左 fold 式になる。

```
template < typename ... Types >
void sum( Types ... args )
{
    // 左 fold
    // (((((0+1)+2)+3)+4)+5)
    auto left = ( 0 + ... + args ) ;
    // 右 fold
    // (1+(2+(3+(4+(5+0)))))
```

```
auto right = ( args + ... + 0 ) ;
}
int main()
{
    sum(1,2,3,4,5) ;
}
```

fold 式はパラメーターパックのそれぞれに二項演算子を適用したいときにわざわざ複雑な再帰的テンプレートを書かずにすむ方法を提供してくれる。

機能テストマクロは \_\_cpp\_fold\_expressions, 値は 201603。

### 3.6 ラムダ式で \*this のコピーキャプチャー

C++17 ではラムダ式で \*this をコピーキャプチャーできるようになった。 \*this をコピーキャプチャーするには、ラムダキャプチャーに \*this と書く。

```
struct X {
    int data = 42;
    auto get()
    {
        return [*this]() { return this->data; };
    }
};

int main()
{
    std::function < int () > f;
    {
        X x;
        f = x.get();
    }// x の寿命はここまで

    // コピーされているので問題ない
    int data = f();
}
```

コピーキャプチャーする \*this はラムダ式が書かれた場所の \*this だ。 また、以下のようなコードで挙動の違いを見るとわかりやすい。

#### 3.6 ラムダ式で \*this のコピーキャプチャー

```
struct X
   int data = 0 ;
   void f()
       // this はポインターのキャプチャー
       // data は this ポインターをたどる
       [this] { data = 1 ; }() ;
       // this->dataは1
       // エラー、*this はコピーされている
       // クロージャーオブジェクトのコピーキャプチャーされた変数は
       // デフォルトで変更できない
       [*this]{ data = 2 ; } () ;
       // OK、mutable を使っている
       [*this]() mutable { data = 2 ; } ();
       // this->dataは1
       // 変更されたのはコピーされたクロージャーオブジェクト内の*this
 };
最初のラムダ式で生成されるクロージャーオブジェクトは以下のようなものだ。
 class closure_object
    X * this_ptr ;
 public :
    closure_object( X * this_ptr )
       : this_ptr(this_ptr) { }
    void operator () () const
       this_ptr->data = 1 ;
    }
 };
```

2番目のラムダ式では以下のようなクロージャーオブジェクトが生成される。

```
class closure_object
      X this_obj ;
      X const * this_ptr = &this_obj ;
  public :
      closure_object( X const & this_obj )
         : this_obj(this_obj) { }
     void operator () () const
         this_ptr->data = 2 ;
      }
  };
 これは C++ の文法に従っていないのでやや苦しいコード例だが、コピーキャプ
チャーされた値を変更しようとしているためエラーとなる。
 3番目のラムダ式では以下のようなクロージャーオブジェクトが生成される。
  class closure_object
     X this_obj ;
      X * this_ptr = &this_obj ;
  public :
      closure_object( X const & this_obj )
         : this_obj(this_obj) { }
     void operator () ()
      {
         this_ptr->data = 2 ;
      }
  } ;
 ラムダ式に mutable が付いているのでコピーキャプチャーされた値も変更できる。
 *this をコピーキャプチャーした場合、this キーワードはコピーされたオブジェク
トへのポインターになる。
  \mathtt{struct}\ \mathtt{X}
     int data = 42 ;
     void f()
```

この場合、出力される2つのポインターの値は異なる。

ラムダ式での \*this のコピーキャプチャーは名前どおり \*this のコピーキャプチャーを提供する提案だ。同等の機能は初期化キャプチャーでも可能だが、表記が冗長で間違いの元だ。

```
struct X
{
    int data ;
    auto f()
    {
        return [ tmp = *this ] { return tmp.data ; } ;
    }
} ;
```

機能テストマクロは \_\_cpp\_capture\_star\_this, 値は 201603。

# 3.7 constexpr ラムダ式

C++17 ではラムダ式が constexpr になった。より正確に説明すると、ラムダ式の クロージャーオブジェクトの operator () は条件を満たす場合 constexpr になる。

```
int main()
{
    auto f = []{ return 42 ; } ;
```

```
第3章 C++17のコア言語の新機能
```

```
constexpr int value = f() ; // OK
  }
 constexpr の条件を満たすラムダ式はコンパイル時定数を必要とする場所で使うこ
とができる。たとえば constexpr 変数や配列の添字や static_assert などだ。
  int main()
  {
     auto f = []{ return 42; };
     int a[f()] ;
     static_assert( f() == 42 ) ;
     std::array<int, f()> b ;
  }
 constexprの条件を満たすのであれば、キャプチャーもできる。
  int main()
     int a = 0 ; // 実行時の値
     constexpr int b = 0 ; // コンパイル時定数
     auto f = [=]{ return a ; } ;
     auto g = [=]{ return b ; } ;
     // エラー、constexpr の条件を満たさない
     constexpr int c = f() ;
     // OK、constexpr の条件を満たす
     constexpr int d = g() ;
  }
 以下の内容は上級者向けの解説であり、通常の読者は理解する必要がない。
 constexpr ラムダ式は SFINAE の文脈で使うことができない。
  // エラー
  template < typename T,
     bool b = []{
        T t;
         t.func();
         return true ;
     }(); >
```

```
void f()
{
    T t ;
    t.func() ;
}
```

なぜならば、これを許してしまうとテンプレート仮引数に対して任意の式や文がテンプレートの Substitution に失敗するかどうかをチェックできてしまうからだ。 上級者向けの解説終わり。

機能テストマクロは \_\_cpp\_constexpr, 値は 201603。

\_\_cpp\_constexpr マクロの値は、C++11 の時点で 200704、C++14 の時点で 201304 だ。

## 3.8 文字列なし static\_assert

C++17 では static\_assert に文字列リテラルを取らないものが追加された。

```
static_assert( true ) ;
```

C++11 で追加された  $static_assert$  には、文字列リテラルが必須だった。

```
static_assert( true, "this shall not be asserted." ) ;
```

特に文字列を指定する必要がない場合もあるので、文字列リテラルを取らない static\_assert が追加された。

機能テストマクロは \_\_cpp\_static\_assert, 値は 201411。 C++11 の時点で \_\_cpp\_static\_assert の値は 200410。

## 3.9 ネストされた名前空間定義

C++17 ではネストされた名前空間の定義を楽に書ける。

ネストされた名前空間とは、A::B::C のように名前空間の中に名前空間が入っている名前空間のことだ。

```
namespace A {
   namespace B {
      namespace C {
      // ...
   }
}
```

```
}
C++17では、上記のコードと同じことを以下のように書ける。
namespace A::B::C {
// ...
}
```

機能テストマクロは \_\_cpp\_nested\_namespace\_definitions, 値は 201411。

# 3.10 [[fallthrough]] 属性

[[fallthrough]] 属性は switch 文の中の case ラベルを突き抜けるというヒントを 出すのに使える。

switch 文では対応する case ラベルに処理が移る。通常、以下のように書く。

```
void f( int x )
    switch (x)
    {
    case 0 :
        // 処理 0
        break ;
    case 1 :
        // 処理 1
        break ;
    case 2 :
        // 処理 2
        break ;
    default :
        // x がいずれでもない場合の処理
        break ;
    }
}
この例を以下のように書くと
 case 1 :
    // 処理 1
 case 2 :
    // 処理 2
    break ;
```

x が 1 のときは処理 1 を実行した後に、処理 2 も実行される。switch 文を書くときはこのような誤りを書いてしまうことがある。そのため、賢い C++ コンパイラーはswitch 文の case ラベルで break 文や return 文などで処理が終わらず、次の case ラベルや default ラベルに処理に突き抜けるコードを発見すると、警告メッセージを出す。

しかし、プログラマーの意図がまさに突き抜けて処理してほしい場合、警告メッセージは誤った警告となってしまう。そのような警告メッセージを抑制するため、またコード中に処理が突き抜けるという意図をわかりやすく記述するために、[[fallthrough]] 属性が追加された。

[[fallthrough]] 属性を書くと、C++ コンパイラーは処理がその先に突き抜けることがわかるので、誤った警告メッセージを抑制できる。また、他人がコードを読むときに意図が明らかになる。

機能テストマクロは \_\_has\_cpp\_attribute(fallthrough), 値は 201603。

# 3.11 [[nodiscard]] 属性

[[nodiscard]] 属性は関数の戻り値が無視されてほしくないときに使うことができる。[[nodiscard]] 属性が付与された関数の戻り値を無視すると警告メッセージが表示される。

```
[[nodiscard]] int f()
{
    return 0;
}

void g( int ) { }

int main()
{
    // エラー、戻り値が無視されている
f();
```

```
// OK、戻り値は無視されていない
int result = f();
g(f);
f() + 1;
(void) f();
}
```

戻り値を無視する、というのは万能ではない。上の例でも、意味的には戻り値は無視されていると言えるが、コンパイラーはこの場合に戻り値が無視されているとは考えない。

[[nodiscard]] の目的は、戻り値を無視してほしくない関数をユーザーが利用したときの初歩的な間違いを防ぐためにある。void 型にキャストするような意図的な戻り値の無視まで防ぐようには作られていない。

[[nodiscard]] 属性を使うべき関数は、戻り値を無視してほしくない関数だ。どのような関数が戻り値を無視してほしくないかというと大きく2つある。

戻り値をエラーなどのユーザーが確認しなければならない情報の通知に使う関数。

```
enum struct error_code
   no_error, some_operations_failed, serious_error
} ;
// 失敗するかもしれない処理
error_code do_something_that_may_fail()
{
   // 処理
   if ( is_error_condition() )
       return error_code::serious_error ;
   // 処理
   return error_code::no_error ;
}
// エラーがいっさい発生しなかったときの処理
int do_something_on_no_error() ;
int main()
{
```

```
// エラーを確認していない
     do_something_that_may_fail() ;
     // エラーがない前提で次の処理をしようとする
     do_something_on_no_error() ;
  }
 関数に [[nodiscard]] 属性を付与しておけば、このようなユーザー側の初歩的なエ
ラー確認の欠如に警告メッセージを出せる。
 [[nodiscard]] 属性は、クラスと enum にも付与することができる。
  class [[nodiscard]] X { } ;
  enum class [[nodiscard]] Y { };
 [[nodiscard]] が付与されたクラスか enum が戻り値の型である関数は
[[nodiscard]] が付与された扱いとなる。
  class [[nodiscard]] X { } ;
  X f() { return X{} ; }
  int main()
     // 警告、戻り値が無視されている
     f();
```

# 3.12 [[maybe\_unused]] 属性

[[maybe\_unused]] 属性は名前やエンティティが意図的に使われないことを示すのに使える。

機能テストマクロは \_\_has\_cpp\_attribute(nodiscard), 値は 201603。

現実のC++のコードでは、宣言されているのにソースコードだけを考慮するとどこからも使われていないように見える名前やエンティティが存在する。

```
void do_something( int *, int * ) ;
void f()
{
   int x[5] ;
```

```
char reserved[1024] = { } ;
int y[5] ;
do_something( x, y ) ;
}
```

ここでは reserved という名前はどこからも使われていない。一見すると不必要な名前に見える。優秀な C++ コンパイラーはこのようなどこからも使われていない名前に対して「どこからも使われていない」という警告メッセージを出す。

しかし、コンパイラーから見えているソースコードがプログラムのすべてではない。さまざまな理由で reserved のような一見使われていない変数が必要になる。

たとえば、reserved はスタック破壊を検出するための領域かもしれない。プログラムは C++ 以外の言語で書かれたコードとリンクしていて、そこで使われるのかもしれない。あるいは OS や外部デバイスが読み書きするメモリーとして確保しているのかもしれない。

どのような理由にせよ、名前やエンティティが一見使われていないように見えるが存在が必要であるという意味を表すのに、[[maybe\_unused]] 属性を使うことができる。これにより、C++ コンパイラーの「未使用の名前」という警告メッセージを抑制できる。

#### [[maybe\_unused]] char reserved[1024];

[[maybe\_unused]] 属性を適用できる名前とエンティティの宣言は、クラス、typedef 名、変数、非 static データメンバー、関数、enum, enumerator だ。

```
// クラス
class [[maybe_unused]] class_name
{
// 非 static データメンバー
        [[maybe_unused]] int non_static_data_member;
};

// typedef 名
// どちらでもよい
[[maybe_unused]] typedef int typedef_name1;
typedef int typedef_name2 [[maybe_unused]];

// エイリアス宣言によるtypedef 名
using typedef_name3 [[maybe_unused]] = int;
```

### 3.13 演算子のオペランドの評価順序の固定

```
// 変数
// どちらでもよい
[[maybe_unused]] int variable_name1{};
int variable_name2 [[maybe_unused]] { };

// 関数
// メンバー関数も同じ文法
// どちらでもよい
[[maybe_unused]] void function_name1() { }
void function_name2 [[maybe_unused]] () { }

enum [[maybe_unused]] enum_name
{
// enumerator
    enumerator_name [[maybe_unused]] = 0
};
```

機能テストマクロは \_\_has\_cpp\_attribute(maybe\_unused), 値は 201603

## 3.13 演算子のオペランドの評価順序の固定

C++17 では演算子のオペランドの評価順序が固定された。

以下の式は、a, b の順番に評価されることが規格上保証される。 e= の e には文法上許される任意の演算子が入る(+=, -= など)。

```
a.b

a->b

a->*b

a(b1,b2,b3)

b = a

b @= a

a[b]

a << b

a >> b

T$ b,

int* f();
```

```
int main()
{
    f()[g()];
}
```

と書いた場合、関数 f がまず先に呼び出されて、次に関数 g が呼び出されることが保証される。

関数呼び出しの実引数のオペランド b1, b2, b3 の評価順序は未規定のままだ。 これにより、既存の未定義の動作となっていたコードの挙動が定まる。

# 3.14 constexpr if 文: コンパイル時条件分岐

constexpr if 文はコンパイル時の条件分岐ができる機能だ。 constexpr if 文は、通常の if 文を if constexpr で置き換える。

```
// if 文
if ( expression )
    statement ;

// constexpr if 文
if constexpr ( expression )
    statement ;
```

constexpr if 文という名前だが、実際に記述するときは if constexpr だ。 コンパイル時の条件分岐とは何を意味するのか。以下は constexpr if が行わない ものの一覧だ。

- 最適化
- 非テンプレートコードにおける挙動の変化

コンパイル時の条件分岐の機能を理解するには、まず C++ の既存の条件分岐について理解する必要がある。

#### 3.14.1 実行時の条件分岐

通常の実行時の条件分岐は、実行時の値を取り、実行時に条件分岐を行う。

```
void f( bool runtime_value )
{
   if ( runtime_value )
      do_true_thing() ;
```

### 3.14 constexpr if 文: コンパイル時条件分岐

```
else
        do_false_thing() ;
  }
 この場合、runtime_value が true の場合は関数 do_true_thing が呼ばれ、false の
場合は関数 do_false_thing が呼ばれる。
 実行時の条件分岐の条件には、コンパイル時定数を指定できる。
  if (true)
     do_true_thing() ;
  else
     do_false_thing() ;
 この場合、賢いコンパイラーは以下のように処理を最適化するかもしれない。
  do_true_thing() ;
 なぜならば、条件は常に true だからだ。このような最適化は実行時の条件分岐で
もコンパイル時に行える。コンパイル時の条件分岐はこのような最適化が目的では
ない。
 もう一度コード例に戻ろう。今度は完全なコードを見てみよう。
  // do_true_thing の宣言
  void do_true_thing() ;
  // do_false_thing の宣言は存在しない
  void f( bool runtime_value )
     if ( true )
        do_true_thing();
       do_false_thing() ; // エラー
 このコードはエラーになる。その理由は、do_false_thingという名前が宣言され
ていないからだ。C++ コンパイラーは、コンパイル時にコードを以下の形に変形す
ることで最適化することはできるが、
  void do_true_thing() ;
```

void f( bool runtime\_value )

```
{
    do_true_thing();
}
```

最適化の結果失われたものも、依然としてコンパイル時にコードとして検証はされる。コードとして検証されるということは、コードとして誤りがあればエラーとなる。名前 do\_false\_thing は宣言されていないのでエラーとなる。

#### 3.14.2 プリプロセス時の条件分岐

C++ が C 言語から受け継いだ C プリプロセッサーには、プリプロセス時の条件分岐の機能がある。

```
// do_true_thingの宣言
void do_true_thing();

// do_false_thingの宣言は存在しない

void f( bool runtime_value )
{

#if true
    do_true_thing();

#else
    do_false_thing();

#endif
}

このコードは、プリプロセスの結果、以下のように変換される。
void do_true_thing();

void f( bool runtime_value )
{
    do_true_thing();
}
```

この結果、プリプロセス時の条件分岐では、選択されない分岐はコンパイルされないので、コンパイルエラーになるコードも書くことができる。

プリプロセス時の条件分岐は、条件が整数とか bool 型のリテラルか、リテラルに比較演算子を適用した結果ではうまくいく。しかし、プリプロセス時とはコンパイル時ではないので、コンパイル時計算はできない。

### 3.14 constexpr if 文: コンパイル時条件分岐

```
constexpr int f()
{
    return 1;
}

void do_true_thing();

int main()
{
// エラー
// 名前fはプリプロセッサーマクロではない
#if f()
    do_true_thing();

#else
    do_false_thing();

#endif
}
```

### 3.14.3 コンパイル時の条件分岐

コンパイル時の条件分岐とは、分岐の条件にコンパイル時計算の結果を使い、かつ、選択されない分岐にコンパイルエラーが含まれていても、使われないのでコンパイルエラーにはならない条件分岐のことだ。

たとえば、std::distance という標準ライブラリを実装してみよう。 std::distance(first, last) は、イテレーター first と last の距離を返す。

```
template < typename Iterator >
constexpr typename std::iterator_traits<Iterator>::difference_type
distance( Iterator first, Iterator last )
{
    return last - first ;
}
```

残念ながら、この実装は Iterator がランダムアクセスイテレーターの場合にしか動かない。入力イテレーターに対応させるには、イテレーターを 1 つずつインクリメントして last と等しいかどうか比較する実装が必要になる。

```
template < typename Iterator >
constexpr typename std::iterator_traits<Iterator>::difference_type
distance( Iterator first, Iterator last )
{
```

```
typename std::iterator_traits<Iterator>::difference_type n = 0 ;
while ( first != last )
{
    ++n ;
    ++first ;
}
return n ;
}
```

残念ながら、この実装は Iterator にランダムアクセスイテレーターを渡したとき に効率が悪い。

ここで必要な実装は、Iterator がランダムアクセスイテレーターならば last - first を使い、そうでなければ地道にインクリメントする遅い実装を使うことだ。Iterator がランダムアクセスイテレーターかどうかは、以下のコードを使えば、is\_random\_access\_iterator<iterator> で確認できる。

```
template < typename Iterator >
 constexpr bool is_random_access_iterator =
     std::is_same_v<
         typename std::iterator_traits<</pre>
             std::decay_t<Iterator>
         >::iterator_category,
         std::random_access_iterator_tag > ;
すると、distance は以下のように書けるのではないか。
 // ランダムアクセスイテレーターかどうかを判定するコード
 template < typename Iterator >
 constexpr bool is_random_access_iterator =
     std::is_same_v<
         typename std::iterator_traits<</pre>
             std::decay_t<Iterator>
         >::iterator_category,
         std::random_access_iterator_tag > ;
 // distance
 template < typename Iterator >
 constexpr typename std::iterator_traits<Iterator>::difference_type
 distance( Iterator first, Iterator last )
```

### 3.14 constexpr if 文: コンパイル時条件分岐

```
{
   // ランダムアクセスイテレーターかどうか確認する
   if ( is_random_access_iterator<Iterator> )
   {// ランダムアクセスイテレーターなので速い方法を使う
      return last - first ;
   }
   else
   { // ランダムアクセスイテレーターではないので遅い方法を使う
      typename std::iterator_traits<Iterator>::difference_type n = 0 ;
      while ( first != last )
      {
          ++n ;
          ++first ;
      }
      return n ;
   }
}
```

残念ながら、このコードは動かない。ランダムアクセスイテレーターではないイテレーターを渡すと、last - first というコードがコンパイルされるので、コンパイルエラーになる。コンパイラーは、

### if ( is\_random\_access\_iterator<Iterator> )

という部分について、is\_random\_access\_iterator<Iterator> の値はコンパイル時に計算できるので、最終的なコード生成の結果としては、if (true)か if (false)になると判断できる。したがってコンパイラーは選択されない分岐のコード生成を行わないことはできる。しかしコンパイルはするので、コンパイルエラーになる。

constexpr if を使うと、選択されない部分の分岐はコンパイルエラーであっても コンパイルエラーとはならなくなる。

```
// distance
template < typename Iterator >
constexpr typename std::iterator_traits<Iterator>::difference_type
distance( Iterator first, Iterator last )
{
    // ランダムアクセスイテレーターかどうか確認する
    if constexpr ( is_random_access_iterator<Iterator> )
    {// ランダムアクセスイテレーターなので速い方法を使う
```

```
return last - first;
}
else
{ // ランダムアクセスイテレーターではないので遅い方法を使う
    typename std::iterator_traits<Iterator>::difference_type n = 0;

while ( first != last )
    {
        ++n;
        ++first;
    }

return n;
}
```

## 3.14.4 超上級者向け解説

constexpr if は、実はコンパイル時条件分岐ではない。テンプレートの実体化時に、選択されないブランチのテンプレートの実体化の抑制を行う機能だ。

constexpr if によって選択されない文は discarded statement となる。 discarded statement はテンプレートの実体化の際に実体化されなくなる。

```
struct X
{
   int get() { return 0 ; }
};

template < typename T >
int f(T x)
{
   if constexpr ( std::is_same_v< std::decay_t<T>, X > )
      return x.get() ;
   else
      return x ;
}

int main()
{
   X x ;
```

### 3.14 constexpr if 文: コンパイル時条件分岐

```
f( x ); // return x.get()
f( 0 ); // return x
}
```

f(x) では、return x が discarded statement となるため実体化されない。X は int 型に暗黙に変換できないが問題がなくなる。f(0) では return x.get() が discarded statement となるため実体化されない。int 型にはメンバー関数 get はないが問題はなくなる。

discarded statement は実体化されないだけで、もちろんテンプレートのエンティティの一部だ。discarded statement がテンプレートのコードとして文法的、意味的に正しくない場合は、もちろんコンパイルエラーとなる。

```
template < typename T >
void f(Tx)
{
    // エラー、名前g は宣言されていない
    if constexpr (false)
        g();

    // エラー、文法違反
    if constexpr (false)
        !#$%^&*()_+;
}
```

何度も説明しているように、constexpr if はテンプレートの実体化を条件付きで抑制するだけだ。条件付きコンパイルではない。

```
template < typename T >
void f()
{
    if constexpr ( std::is_same_v<T, int> )
    {
        // 常にコンパイルエラー
        static_assert( false ) ;
    }
}
```

このコードは常にコンパイルエラーになる。なぜならば、static\_assert(false)はテンプレートに依存しておらず、テンプレートの宣言を解釈するときに、依存名ではないから、そのまま解釈される。

このようなことをしたければ、最初から static\_assert のオペランドに式を書けば

```
template < typename T >
void f()
{
    static_assert( std::is_same_v<T, int> ) ;
    if constexpr ( std::is_same_v<T, int> )
      {
       }
}
```

もし、どうしても constexpr 文の条件に合うときにだけ static\_assert が使いたい場合もある。これは、constexpr if をネストしたりしていて、その内容を全部 static\_assert に書くのが冗長な場合だ。

現実には、E1, E2, E3 は複雑な式なので、 $static\_assert(E1 && E2 && E3) と書くのは冗長だ。同じ内容を二度書くのは間違いの元だ。$ 

このような場合、static\_assert のオペランドをテンプレート引数に依存するようにすると、constexpr if の条件に合うときにだけ発動する static\_assert が書ける。

```
template < typename ... >
bool false_v = false ;

template < typename T >
void f()
{
    if constexpr ( E1 )
        if constexpr ( E2 )
```

### 3.14 constexpr if 文: コンパイル時条件分岐

```
if constexpr ( E3 )
{
     static_assert( false_v<T> ) ;
}
```

このように false\_v を使うことで、static\_assert をテンプレート引数 T に依存させる。その結果、static\_assert の発動をテンプレートの実体化まで遅延させることができる。

constexpr if は非テンプレートコードでも書くことができるが、その場合は普通の if 文と同じだ。

#### 3.14.5 constexpr if では解決できない問題

constexpr if は条件付きコンパイルではなく、条件付きテンプレート実体化の抑制なので、最初の問題の解決には使えない。たとえば以下のコードはエラーになる。

```
// do_true_thingの宣言
void do_true_thing();

// do_false_thingの宣言は存在しない

void f( bool runtime_value )
{
   if constexpr ( true )
        do_true_thing();
   else
        do_false_thing(); // エラー
}
```

理由は、名前 do\_false\_thing は非依存名なのでテンプレートの宣言時に解決されるからだ。

# 3.14.6 constexpr if で解決できる問題

constexpr if は依存名が関わる場合で、テンプレートの実体化がエラーになる場合に、実体化を抑制させることができる。

たとえば、特定の型に対して特別な操作をしたい場合

```
struct X
{
   int get_value() ;
```

```
} ;
   template < typename T >
   void f(T t)
      int value{} ;
      // Tの型が X ならば特別な処理を行いたい
      if constexpr ( std::is_same<T, X>{} )
         value = t.get_value() ;
      }
      else
      {
         value = static_cast<int>(t) ;
      }
   }
もし constexpr if がなければ、T の型が X ではないときも t.get_value() という式
が実体化され、エラーとなる。
 再帰的なテンプレートの特殊化をやめさせたいとき
   // factorial<N>はNの階乗を返す
   template < std::size_t I >
   constexpr std::size_t factorial()
      if constexpr ( I == 1 )
      { return 1 ; }
      else
      { return I * factorial<I-1>() ; }
```

もし constexpr if がなければ、factorial<N-1> が永遠に実体化されコンパイル時ループが停止しない。

機能テストマクロは \_\_cpp\_if\_constexpr, 値は 201606。

# 3.15 初期化文付き条件文

C++17では、条件文に初期化文を記述できるようになった。

# 3.15 初期化文付き条件文

なぜこのような機能が追加されたかというと、変数を宣言し、if 文の条件に変数を使い、if 文を実行後は変数を使用しない、というパターンは現実のコードで頻出するからだ。

```
// これ以降 file は使わない
  auto int_ptr = std::make_unique<int>(42) ;
  if ( ptr )
  {
     // 処理
  }
  // これ以降 int_ptr は使わない
 上記のコードには問題がある。これ以降変数は使わないが、変数自体は使えるか
らだ。
  auto ptr = std::make_unique<int>(42) ;
  if ( ptr )
  {
     // 処理
  }
  // これ以降 ptr は使わない
  // でも使える
  int value = *ptr ;
 変数を使えないようにするには、ブロックスコープで囲むことで、変数をスコープ
から外してやればよい。
  {
     auto int_ptr = std::make_unique<int>(42) ;
     if ( ptr )
        // 処理
     }
     // ptr は破棄される
  // これ以降 ptr は使わないし使えない
 このようなパターンは頻出するので、初期化文付きの条件文が追加された。
  if ( auto ptr = std::make_unique<int>(42) ; ptr )
  {
     // 処理
  }
```

# 3.16 クラステンプレートのコンストラクターからの実引数推定

C++17 ではクラステンプレートのコンストラクターの実引数からテンプレート実引数の推定が行えるようになった。

```
template < typename T >
struct X
{
         X( T t ) { }
};
int main()
{
         X x1(0) ; // X<int>
         X x2(0.0) ; // X<double>
         X x3("hello") ; // X<char const *>
}
```

これは関数テンプレートが実引数からテンプレート実引数の推定が行えるのと同じだ。

```
template < typename T >
void f( T t ) { }

int main()
{
   f( 0 ) ; // f<int>
   f( 0.0 ) ; // f<double>
   f( "hello" ) ; // f<char const *>
}
```

# 3.16.1 推定ガイド

クラステンプレートのコンストラクターからの実引数は便利だが、クラスのコンストラクターはクラステンプレートのテンプレートパラメーターに一致しない場合もある。そのような場合はそのままでは実引数推定ができない。

```
// コンテナー風のクラス
template < typename T >
class Container
```

```
std::vector<T> c ;
  public :
      // 初期化にイテレーターのペアを取る
      // Iterator はTではない
      // T は推定できない
      template < typename Iterator >
      Container( Iterator first, Iterator last )
         : c(first, last)
      { }
  } ;
  int main()
  {
      int a[] = \{ 1,2,3,4,5 \} ;
      // エラー
      // Tを推定できない
      Container c( std::begin(a), std::end(a));
  }
 このため、C++17には推定ガイドという機能が提供されている。
  テンプレート名(引数リスト) -> テンプレート id;
 これを使うと、以下のように書ける。
  template < typename Iterator >
  Container( Iterator, Iterator )
  -> Container< typename std::iterator_traits< Iterator >::value_type > ;
 C++ コンパイラーはこの推定ガイドを使って、Container<T>::Container(
Iterator, Iterator)からは、Tを std::iterator_traits<Iterator>::value_type
として推定すればいいのだと判断できる。
 たとえば、初期化リストに対応するには以下のように書く。
  template < typename T >
  class Container
      std::vector<T> c ;
  public :
```

### 3.17 auto による非型テンプレートパラメーターの宣言

# 3.17 auto による非型テンプレートパラメーターの宣言

C++17 では非型テンプレートパラメーターの宣言に auto を使うことができるようになった。

```
void f() { }
int main()
{
    X<int, 0> x1;
    X<long, 01> x2;
    X<void(*)(), &f> x3;
}
```

機能テストマクロは \_\_cpp\_template\_auto, 値は 201606。

# **3.18** using 属性名前空間

C++17 では、属性名前空間に using ディレクティブのような記述ができるようになった。

```
// [[extension::foo, extension::bar]] と同じ
[[using extension : foo, bar ]] int x ;
```

属性トークンには、属性名前空間を付けることができる。これにより、独自拡張の 属性トークンの名前の衝突を避けることができる。

たとえば、ある C++ コンパイラーには独自拡張として foo, bar という属性トークンがあり、別の C++ コンパイラーも同じく独自拡張として foo, bar という属性トークンを持っているが、それぞれ意味が違っている場合、コードの意味も違ってしまう。

```
[[ foo, bar ]] int x;
```

このため、C++ には属性名前空間という文法が用意されている。注意深い C++ コンパイラーは独自拡張の属性トークンには属性名前空間を設定していることだろう。

```
[[ extension::foo, extension::bar ]] int x ;
```

問題は、これをいちいち記述するのは面倒だということだ。

C++17 では、using 属性名前空間という機能により、using ディレクティブのような名前空間の省略が可能になった。文法は using ディレクティブと似ていて、属性の中で using name : ... と書くことで、コロンに続く属性トークンに、属性名前空間 name を付けたものと同じ効果が得られる。

# 3.19 非標準属性の無視

C++17 では、非標準の属性トークンは無視される。

```
// OK、無視される
[[wefapiaofeaofjaopfij]] int x ;
```

属性は C++ コンパイラーによる独自拡張を C++ の規格に準拠する形で穏便に追加するための機能だ。その属性のためにコンパイルエラーになった場合、けっきょく C プリプロセッサーを使うか、わずらわしさから独自の文法が使われてしまう。そのためこの機能は必須だ。

# 3.20 構造化束縛

C++17 で追加された構造化束縛は多値を分解して受け取るための変数宣言の文法だ。

```
int main()
{
    int a[] = { 1,2,3 } ;
    auto [b,c,d] = a ;

    // b == 1
    // c == 2
    // d == 3
}
```

C++ では、さまざまな方法で多値を扱うことができる。たとえば配列、クラス、tuple, pair だ。

```
int a[] = { 1,2,3 } ;
struct B
{
   int a;
   double b;
   std::string c;
};
B b{ 1, 2.0, "hello" } ;
```

```
std::tuple< int, double, std::string > c { 1, 2.0, "hello" } ;
   std::pair< int, int > d{ 1, 2 } ;
 C++ の関数は配列以外の多値を返すことができる。
   std::tuple< int, double, std::string > f()
      return { 1, 2.0, "hello" } ;
 多値を受け取るには、これまでは多値を固まりとして受け取るか、ライブラリで分
解して受け取るしかなかった。
 多値を固まりで受け取るには以下のように書く。
   std::tuple< int, double, std::string > f()
      return { 1, 2.0, "hello" } ;
   int main()
      auto result = f() ;
      std::cout << std::get<0>(result) << '\n'
         << std::get<1>(result) << '\n'
         << std::get<2>(result) << std::endl ;
  }
 多値をライブラリで受け取るには以下のように書く。
  std::tuple< int, double, std::string > f()
      return { 1, 2.0, "hello" } ;
  int main()
      int a ;
      double b ;
      std::string c ;
```

```
std::tie( a, b, c ) = f();
      std::cout << a << '\n'
          << b << '\n'
         << c << std::endl ;
  }
 構造化束縛を使うと、以下のように書ける。
  std::tuple< int, double, std::string > f()
      return { 1, 2.0, "hello" } ;
  }
  int main()
      auto [a, b, c] = f() ;
      std::cout << a << '\n'
         << b << '\n'
         << c << std::endl ;
  }
 変数の型はそれぞれ対応する多値の型になる。この場合、a, b, c はそれぞれ int,
double, std::string 型になる。
 tuple だけではなく、pair も使える。
  int main()
      std::pair<int, int> p( 1, 2 );
      auto [a,b] = p ;
      // aは int 型、値は 1
      // bは int 型、値は 2
  }
 構造化束縛は if 文と switch 文、for 文でも使える。
  int main()
  {
```

```
int expr[] = \{1,2,3\};
      if ( auto[a,b,c] = expr ; a )
      { }
      switch( auto[a,b,c] = expr ; a )
      { }
      for ( auto[a,b,c] = expr; false; )
      { }
 構造化束縛は range-based for 文にも使える。
   int main()
      std::map< std::string, std::string > translation_table
          {"dog", "犬"},
          {"cat", "猫"},
          {"answer", "42"}
      };
      for ( auto [key, value] : translation_table )
          std::cout<<
              "key="<< key <<
              ", value=" << value << '\n' ;
      }
   }
 これは、map の要素型 std::pair<const std::string, std::string> を構造化束
縛 [key, value] で受けている。
 構造化束縛は配列にも使える。
   int main()
      int values[] = {1,2,3};
      auto [a,b,c] = values ;
 構造化束縛はクラスにも使える。
   struct Values
```

```
{
      int a ;
      double d ;
      std::string c ;
  } ;
  int main()
  {
      Values values{ 1, 2.0, "hello" } ;
      auto [a,b,c] = values ;
  }
 構造化束縛でクラスを使う場合は、非 static データメンバーはすべて 1 つのクラ
スの public なメンバーでなければならない。
 構造化束縛は constexpr にはできない。
  int main()
      constexpr int expr[] = { 1,2 } ;
      // エラー
      constexpr auto [a,b] = expr ;
  }
```

# 3.20.1 超上級者向け解説

構造化束縛は、変数の宣言のうち、構造化束縛宣言(structured binding declaration)に分類される文法で記述する。構造化束縛宣言となる宣言は、単純宣言(simpledeclaration)とfor-range宣言(for-range-declaration)のうち、[識別子リスト] があるものだ。

### 単純宣言:

識別子リスト:

```
属性 auto CV 修飾子 (省略可) リファレンス修飾子 (省略可) [ 識別子リスト ] 初期化子 ; for-range 宣言: 属性 auto CV 修飾子 (省略可) リファレンス修飾子 (省略可) [ 識別子リスト ] ;
```

```
コンマで区切られた識別子
```

```
初期化子:
    = 式
    { 式 }
     (式)
以下は単純宣言のコード例だ。
 int main()
 {
    int e1[] = \{1,2,3\};
    struct { int a,b,c ; } e2{1,2,3} ;
    auto e3 = std::make_tuple(1,2,3) ;
     // "= 式"の例
     auto [a,b,c] = e1;
     auto [d,e,f] = e2;
     auto [g,h,i] = e3;
     // "{式}", "(式)"の例
     auto [j,k,l]{e1} ;
     auto [m,n,o](e1);
     // CV 修飾子とリファレンス修飾子を使う例
     auto const & [p,q,r] = e1;
 }
以下は for-range 宣言の例だ。
 int main()
 {
    std::pair<int, int> pairs[] = { {1,2}, {3,4}, {5,6} } ;
    for ( auto [a, b] : pairs )
        std::cout << a << ", " << b << '\n' ;
    }
 }
```

### 3.20.2 構造化束縛宣言の仕様

構造化束縛の構造化束縛宣言は以下のように解釈される。

構造化束縛宣言によって宣言される変数の数は、初期化子の多値の数と一致していなければならない。

```
int main()
{
    // 2個の値を持つ
    int expr[] = {1,2};

    // エラー、変数が少なすぎる
    auto[a] = expr;
    // エラー、変数が多すぎる
    auto[b,c,d] = expr;
}
```

構造化束縛宣言で宣言されるそれぞれの変数名について、記述されたとおりの属性、CV 修飾子、リファレンス修飾子の変数が宣言される。

### 3.20.3 初期化子の型が配列の場合

初期化子が配列の場合、それぞれの変数はそれぞれの配列の要素で初期化される。 リファレンス修飾子がない場合、それぞれの変数はコピー初期化される。

```
int main()
{
    int expr[3] = {1,2,3};
    auto [a,b,c] = expr;
}

これは、以下と同じ意味になる。
int main()
{
    int expr[3] = {1,2,3};
    int a = expr[0];
    int b = expr[1];
    int c = expr[2];
```

```
リファレンス修飾子がある場合、変数はリファレンスとなる。
  int main()
      int expr[3] = \{1,2,3\};
      auto & [a,b,c] = expr ;
      auto && [d,e,f] = expr ;
  }
 これは、以下と同じ意味になる。
  int main()
      int expr[3] = \{1,2,3\};
      int & a = expr[0] ;
      int & b = expr[1] ;
      int & c = expr[2];
      int && d = expr[0] ;
      int && e = expr[1] ;
      int && f = expr[2] ;
  }
 もし、変数の型が配列の場合、配列の要素はそれぞれ対応する配列の要素で初期化
される。
  int main()
  {
      int expr[][2] = \{\{1,2\},\{1,2\}\};
      auto [a,b] = expr ;
  }
 これは、以下と同じ意味になる。
  int main()
      int expr[][2] = \{\{1,2\},\{1,2\}\}\;
      int a[2] = { expr[0][0], expr[0][1] };
      int b[2] = { expr[1][0], expr[1][1] } ;
```

# **3.20.4** 初期化子の型が配列ではなく、**std::tuple\_size<E>** が完全形の名前である場合

構造化束縛宣言の初期化子の型 E が配列ではない場合で、std::tuple\_size<E> が 完全形の名前である場合、構造化束縛宣言の初期化子の型を E, その値を e とする。 構造化束縛宣言で宣言される 1 つ目の変数を 0, 2 つ目の変数を 1, ..., とインクリメントされていくインデックスを 1 とする。

std::tuple\_size<E>::value は整数のコンパイル時定数式で、その値は初期化子の値の数でなければならない。

```
int main()
{
    // std::tuple< int, int, int >
    auto e = std::make_tuple( 1, 2, 3 ) ;
    auto [a,b,c] = e ;

    // std::tuple_size<decltype(e)>::size は 3
}
```

それぞれの値を取得するために、非修飾名 get が型 E のクラススコープから探される。 get が見つかった場合、それぞれの変数の初期化子は e.get<i>() となる。

```
auto [a,b,c] = e ;
```

という構造化束縛宣言は、以下の意味になる。

```
type a = e.get<0>() ;
type b = e.get<1>() ;
type c = e.get<2>() ;
```

そのような get の宣言が見つからない場合、初期化子は get<i>(e) となる。この場合、get は連想名前空間から探される。通常の非修飾名前検索は行われない。

```
// ただし通常の非修飾名前検索は行われない
```

```
type a = get<0>(e) ;
type b = get<1>(e) ;
type c = get<2>(e) ;
```

構造化束縛宣言で宣言される変数の型は以下のように決定される。

変数の型 type は "std::tuple\_element<i, E>::type"となる。

```
std::tuple_element<0, E>::type a = get<0>(e) ;
```

```
std::tuple_element<1, E>::type b = get<1>(e) ;
   std::tuple_element<2, E>::type c = get<2>(e) ;
 以下のコードは、
   int main()
       auto e = std::make_tuple( 1, 2, 3 );
       auto [a,b,c] = e ;
   }
以下とほぼ同等の意味になる。
   int main()
       auto e = std::make_tuple( 1, 2, 3 );
       using E = decltype(e) ;
       std::tuple_element<0, E>::type & a = std::get<0>(e) ;
       std::tuple_element<1, E>::type & b = std::get<1>(e) ;
       std::tuple\_element<2, E>::type & c = std::get<2>(e) ;
 以下のコードは、
   int main()
       auto e = std::make_tuple( 1, 2, 3 ) ;
       auto && [a,b,c] = std::move(e) ;
以下のような意味になる。
   int main()
   {
       auto e = std::make_tuple( 1, 2, 3 ) ;
       using E = decltype(e) ;
       {\tt std::tuple\_element<0,\ E>::type\ \&\&\ a\ =\ std::get<0>(std::move(e))\ ;}
       std::tuple_element<1, E>::type && b = std::get<1>(std::move(e)) ;
       std::tuple_element<2, E>::type && c = std::get<2>(std::move(e)) ;
```

}

# 3.20.5 上記以外の場合

上記以外の場合、構造化束縛宣言の初期化子の型 E はクラス型で、すべての非 static データメンバーは public の直接のメンバーであるか、あるいは単一の曖昧で はない public 基本クラスのメンバーである必要がある。E に匿名 union メンバーが あってはならない。

以下は型Eとして適切なクラスの例である。

```
struct A
    int a, b, c ;
 } ;
 struct B : A { } ;
以下は型Eとして不適切なクラスの例である。
 // public 以外の非 static データメンバーがある
 struct A
 public :
    int a ;
 private :
    int b ;
 };
 struct B
    int a ;
 };
 // クラスにも基本クラスにも非static データメンバーがある
 \mathtt{struct}\ \mathtt{C}\ :\ \mathtt{B}
    int b ;
 } ;
 // 匿名 union メンバーがある
 struct D
```

```
{
      union
      {
         int i ;
         double d ;
      }
  } ;
 型Eの非staticデータメンバーは宣言された順番で多値として認識される。
 以下のコードは、
  int main()
  {
      struct { int x, y, z ; } e{1,2,3} ;
     auto [a,b,c] = e ;
以下のコードと意味的に等しい。
   int main()
   {
      struct { int x, y, z ; } e{1,2,3} ;
      int a = e.x ;
      int b = e.y ;
      int c = e.z ;
  }
 構造化束縛はビットフィールドに対応している。
  struct S
      int x : 2 ;
      int y : 4 ;
  };
  int main()
      S e\{1,3\};
      auto [a,b] = e;
  }
```

機能テストマクロは \_\_cpp\_structured\_bindings, 値は 201606。

# 3.21 inline 変数

C++17 では変数に inline キーワードを指定できるようになった。

```
inline int variable ;
```

このような変数を inline 変数と呼ぶ。その意味は inline 関数と同じだ。

### 3.21.1 inline の歴史的な意味

今は昔、本書執筆から 30 年以上は昔に、inline キーワードが C++ に追加された。 inline の現在の意味は誤解されている。

inline 関数の意味は、「関数を強制的にインライン展開させるための機能」ではない。

大事なことなのでもう一度書くが、inline 関数の意味は、「関数を強制的にインライン展開させるための機能」ではない。

確かに、かつて inline 関数の意味は、関数を強制的にインライン展開させるための機能だった。

関数のインライン展開とは、たとえば以下のようなコードがあったとき、

```
int min( int a, int b )
{ return a < b ? a : b ; }
int main()
{
   int a, b ;
   std::cin >> a >> b ;

   // aとbのうち小さい方を選ぶ
   int value = min( a, b ) ;
}
```

この関数 min は十分に小さく、関数呼び出しのコストは無視できないオーバーヘッドになるため、以下のような最適化が考えられる。

```
int main()
{
    int a, b;
    std::cin >> a >> b;
```

```
\label{eq:int_value} \mbox{int value = a < b ? a : b ;}
```

このように関数の中身を展開することを、関数のインライン展開という。

人間が関数のインライン展開を手で行うのは面倒だ。それにコードが読みにくい。 " $\min(a,b)$ " と "a < b?a:b" のどちらが読みやすいだろうか。

幸い、C++ コンパイラーはインライン展開を自動的に行えるので人間が苦労する必要はない。

インライン展開は万能の最適化ではない。インライン展開をすると逆に遅くなる場合もある。

たとえば、ある関数をコンパイルした結果のコードサイズが 1K バイトあったとして、その関数を呼んでいる箇所がプログラム中に 1000 件ある場合、プログラム全体のサイズは 1M バイト増える。コードサイズが増えるということは、CPU のキャッシュを圧迫する。

たとえば、ある関数の実行時間が関数呼び出しの実行時間に比べて桁違いに長いとき、関数呼び出しのコストを削減するのは意味がない。

したがって関数のインライン展開という最適化を適用すべきかどうかを決定するには、関数のコードサイズが十分に小さいとき、関数の実行時間が十分に短いとき、タイトなループの中など、さまざまな条件を考慮しなければならない。

昔のコンパイラー技術が未熟だった時代のC++ コンパイラーは関数をインライン展開するべきかどうかの判断ができなかった。そのため inline キーワードが追加された。インライン展開してほしい関数を inline 関数にすることで、コンパイラーはその関数がインライン展開するべき関数だと認識する。

#### 3.21.2 現代の inline の意味

現代では、コンパイラー技術の発展により C++ コンパイラーは十分に賢くなったので、関数をインライン展開させる目的で inline キーワードを使う必要はない。実際、現代の C++ コンパイラーでは inline キーワードはインライン展開を強制しない。関数をインライン展開すべきかどうかはコンパイラーが判断できる。

inline キーワードにはインライン展開以外に、もう 1 つの意味がある。ODR (One Definition Rule、定義は 1 つの原則) の回避だ。

C++ では、定義はプログラム中に1つしか書くことができない。

void f(); // OK、宣言 void f(); // OK、再宣言

```
void f() { } // OK、定義 void f() { } // エラー、再定義
```

通常は、関数を使う場合には宣言だけを書いて使う。定義はどこか 1 つの翻訳単位 に書いておけばよい。

```
// f.h
void f();

// f.cpp
void f() { }

// main.cpp
#include "f.h"
int main()
{
    f();
}
```

しかし、関数のインライン展開をするには、コンパイラーの実装上の都合で、関数 の定義が同じ翻訳単位になければならない。

```
inline void f();
int main()
{
    // エラー、定義がない
    f();
}
```

しかし、翻訳単位ごとに定義すると、定義が重複して ODR に違反する。

C++ ではこの問題を解決するために、inline 関数は定義が同一であれば、複数の翻訳単位で定義されてもよいことにしている。つまり ODR に違反しない。

```
// a.cpp
inline void f() { }
```

```
void a()
{
    f();
}

// b.cpp

// OK, inline 関数
inline void f() { }

void b()
{
    f();
}
```

これは例のために同一の inline 関数を直接記述しているが、inline 関数は定義の同一性を保証させるため、通常はヘッダーファイルに書いて #include して使う。

# **3.21.3** inline 変数の意味

inline 変数は、ODR に違反せず変数の定義の重複を認める。同じ名前の inline 変数は同じ変数を指す。

```
// a.cpp
inline int data;

void a() { ++data ; }

// b.cpp
inline int data ;

void b() { ++data ; }

// main.cpp
inline int data ;

int main()
{
```

```
a();
b();
data; // 2
```

この例で関数 a, b の中の変数 data は同じ変数を指している。変数 data は static ストレージ上に構築された変数なのでプログラムの開始時にゼロで初期化される。2 回インクリメントされるので値は 2 となる。

これにより、クラスの非 static データメンバーの定義を書かなくてすむようになる。

C++17以前のC++では、以下のように書かなければならなかったが、

```
// S.h

struct S
{
 static int data;
};

// S.cpp

int S::data;

C++17では、以下のように書けばよい。

// S.h

struct S
{
 inline static int data;
};

S.cpp に変数 S::data の定義を書く必要はない。
機能テストマクロは __cpp_inline_variables, 値は 201606。
```

# 3.22 可変長 using 宣言

この機能は超上級者向けだ。

C++17 では using 宣言をコンマで区切ることができるようになった。

```
int x, y;
int main()
{
    using ::x, ::y;
}
これは、C++14で
using ::x;
using ::y;
```

# と書くのと等しい。

C++17 では、using 宣言でパック展開ができるようになった。この機能に正式な名前は付いていないが、可変長 using 宣言(Variadic using declaration)と呼ぶのがわかりやすい。

```
template < typename ... Types >
struct S : Types ...
   using Types::operator() ...;
   void operator () ( long ) { }
} ;
struct A
    void operator () ( int ) { }
};
struct B
    void operator () ( double ) { }
};
int main()
{
   S<A, B> s ;
   s(0); // A::operator()
   s(OL) ; // S::operator()
   s(0.0) ; // B::operator()
}
```

機能テストマクロは \_\_cpp\_variadic\_using, 値は 201611。

# **3.23** std::byte: バイトを表現する型

C++17 では、バイトを表現する型が入った。ライブラリでもあるのだがコア言語で特別な型として扱われている。

バイトとは C++ のメモリーモデルにおけるストレージの単位で、C++ においてユニークなアドレスが付与される最小単位だ。C++ の規格はいまだに 1 バイトが具体的に何ビットであるのかを規定していない。これは過去にバイトのサイズが 8 ビットではないアーキテクチャーが存在したためだ。

バイトのビット数は <climits> で定義されているプリプロセッサーマクロ、CHAR\_BIT で知ることができる。

C++17 では、1 バイトは UTF-8 の 8 ビットの 1 コード単位をすべて表現できると規定している。

std::byte 型は、生のバイト列を表すための型として使うことができる。生の1バイトを表すには unsigned char 型が慣習的に使われてきたが、std::byte 型は生の1バイトを表現する型として、新たにC++17で追加された。複数バイトが連続するストレージは、unsigned char の配列型、もしくは std::byte の配列型として表現できる。

std::byte 型は、<cstddef> で以下のように定義されている。

```
namespace std
{
    enum class byte : unsigned char { } ;
}
```

std::byte はライブラリとして scoped enum 型で定義されている。これにより、他の整数型からの暗黙の型変換が行えない。

値 0x12 の std::byte 型の変数は以下のように定義できる。

```
int main()
{
    std::byte b{0x12};
}
std::byte 型の値がほしい場合は、以下のように書くことができる。
int main()
{
```

```
std::byte b{} ;

b = std::byte( 1 ) ;

b = std::byte{ 1 } ;

b = static_cast< std::byte >( 1 ) ;

b = static_cast< std::byte >( 0b11110000 ) ;
}
```

std::byte型は他の数値型からは暗黙に型変換できない。これによりうっかりと型を取り違えてバイト型と他の型を演算してしまうことを防ぐことができる。

```
int main()
{
    // エラー、() による初期化はint 型からの暗黙の変換が入る
    std::byte b1(1);

    // エラー、=による初期化はint 型からの暗黙の変換が入る
    std::byte b2 = 1;

    std::byte b{};

    // エラー、operator =による int 型の代入は暗黙の変換が入る
    b = 1;
    // エラー、operator =による double 型の代入は暗黙の変換が入る
    b = 1.0;
}
```

std::byte 型は {} によって初期化するが、縮小変換を禁止するルールにより、std::byte 型が表現できる値の範囲でなければエラーとなる。

たとえば、今 std::byte が 8 ビットで、最小値が 0、最大値が 255 の環境だとする。

```
int main()
{
    // エラー、表現できる値の範囲ではない
    std::byte b1{-1};
    // エラー、表現できる値の範囲ではない
    std::byte b2{256};
}
```

std::byte は内部のストレージをバイト単位でアクセスできるようにするため、規格上 char と同じような配慮が行われている。

# 3.23 std::byte: バイトを表現する型

```
int main()
{
   int x = 42 ;
   std::byte * rep = reinterpret_cast< std::byte * >(&x) ;
}
```

std::byte は一部の演算子がオーバーロードされているので、通常の整数型のように使うことができる。ただし、バイトをビット列演算するのに使う一部の演算子だけだ。

具体的には、以下に示すシフト、ビット OR, ビット列 AND, ビット列 XOR, ビット列 NOT だ。

```
<<= <<
>>= >>
|= |
&= &
^= ^
```

四則演算などの演算子はサポートしていない。

std::byte は std::to\_intenger<IntType>(std::byte) により、IntType 型の整数型に変換できる。

```
int main()
{
    std::byte b{42} ;
    // int 型の値は 42
    auto i = std::to_integer<int>(b) ;
}
```

# 第4章

# **C++17** の型安全な値を 格納するライブラリ

C++17 では型安全に値を格納するライブラリとして、variant, any, optional が 追加された。

# 4.1 variant: 型安全な union

### 4.1.1 使い方

ヘッダーファイル <variant> で定義されている variant は、型安全な union として使うことができる。

### 第4章 C++17の型安全な値を格納するライブラリ

```
// true を返す
bool has_string = std::holds_alternative<std::string> ( x );

// 入っている値を得る
// "hello"
std::string str = std::get<std::string>(x);
}
```

### 4.1.2 型非安全な古典的 union

C++ が従来から持っている古典的な union は、複数の型のいずれか 1 つだけの値を格納する型だ。union のサイズはデータメンバーのいずれかの型を 1 つ表現できるだけのサイズとなる。

になる。

union はメモリー効率がよい。union は variant と違い型非安全だ。どの型の値を保持しているかという情報は保持しないので、ユーザーが適切に管理しなければならない

試しに、冒頭のコードを union で書くと、以下のようになる。

# 4.1 variant: 型安全な union

```
union U
   int i ;
   double d ;
   std::string s ;
   // コンストラクター
   // int 型をデフォルト初期化する
   U() : i{} { }
   // デストラクター
   // 何もしない。オブジェクトの破棄はユーザーの責任に任せる
   ~U() { }
};
// デストラクター呼び出し
template < typename T >
void destruct ( T & x )
   x.~T();
int main()
   Uи;
   // 基本型はそのまま代入できる
   // 破棄も考えなくてよい
   u.i = 0;
   u.d = 0.0;
   // 非トリビアルなコンストラクターを持つ型
   // placement new が必要
   new(&u.s) std::string("hello") ;
   // ユーザーはどの型を入れたか別に管理しておく必要がある
   bool has_int = false ;
   bool has_string = true ;
   std::cout << u.s << '\n' ;
```

// 非トリビアルなデストラクターを持つ型

第4章 C++17の型安全な値を格納するライブラリ

```
// 破棄が必要
destruct( u.s ) ;
}
```

このようなコードは書きたくない。variant を使えば、このような面倒で冗長なコードを書かずに、型安全に union と同等機能を実現できる。

# 4.1.3 variant の宣言

variant はテンプレート実引数で保持したい型を与える。

```
std::variant< char, short, int, long > v1 ;
std::variant< int, double, std::string > v2 ;
std::variant< std::vector<int>, std::list<int> > v3 ;
```

#### **4.1.4 variant** の初期化

# デフォルト初期化

variant はデフォルト構築すると、最初に与えた型の値をデフォルト構築して保持する。

```
// int
std::variant< int, double > v1 ;
// double
std::variant< double, int > v2 ;
```

variant にデフォルト構築できない型を最初に与えると、variant もデフォルト構築できない。

```
// デフォルト構築できない型
struct non_default_constructible
{
     non_default_constructible() = delete;
};

// エラー
// デフォルト構築できない
std::variant< non_default_constructible > v;
```

デフォルト構築できない型だけを保持する variant をデフォルト構築するためには、最初の型をデフォルト構築可能な型にすればよい。

```
struct A { A() = delete ; } ;
```

4.1 variant: 型安全な union

```
struct B { B() = delete; };
struct C { C() = delete; };
struct Empty { };

int main()
{
    // OK、Empty を保持
    std::variant < Empty, A, B, C > v;
}

このような場合に、Empty のようなクラスをわざわざ独自に定義するのは面倒なので、標準ライブラリには std::monostate クラスが以下のように定義されている。
namespace std {
    struct monostate { };
}

したがって、上の例は以下のように書ける。
// OK、std::monostate を保持
std::variant < std::monostate, A, B, C > v;
```

std::monostate は variant の最初のテンプレート実引数として使うことで variant をデフォルト構築可能にするための型だ。それ以上の意味はない。

# コピー初期化

variant に同じ型の variant を渡すと、コピー/ムーブする。

### variant のコンストラクターに値を渡した場合

variant のコンストラクターに上記以外の値を渡した場合、variant のテンプレート実引数に指定した型の中から、オーバーロード解決により最適な型が選ばれ、その型の値に変換され、値を保持する。

# 第 4 章 C++17 の型安全な値を格納するライブラリ

```
using val = std::variant< int, double, std::string > ;

int main()
{
    // int
    val a(42);
    // double
    val b(0.0);

    // std::string
    // char const *型は std::string 型に変換される
    val c("hello");

    // int
    // char 型は Integral promotion により int 型に優先的に変換される
    val d('a');
}
```

# in\_place\_type による emplace 構築

variant のコンストラクターの第一引数に  $std::in\_place\_type<T>$  を渡すことにより、T 型の要素を構築するために T 型のコンストラクターに渡す実引数を指定できる。

ほとんどの型はコピーかムーブができる。

しかし、もし型  $\mathbf x$  がコピーもムーブもできない型だったとしたら、上記のコードは動かない。

struct X

4.1 variant: 型安全な union

```
{
    X( int, int, int ) { }
    X( X const & ) = delete;
    X( X && ) = delete;
};
int main()
{
    // X を構築
    X x( 1, 2, 3 );
    // エラー、X はコピーできない
    std::variant<X> v( x );
}
```

このような場合、variant が内部で X を構築する際に、構築に必要なコンストラクターの実引数を渡して、variant に X を構築させる必要がある。そのために S std::in\_place\_type<T> が使える。T に構築したい型を指定して第一引数とし、第二引数以降を T のコンストラクターに渡す値にする。

```
struct X
{
         X( int, int, int ) { }
         X( X const & ) = delete;
         X( X && ) = delete;
};
int main()
{
         // X の値を構築して保持
         std::variant<X> v( std::in_place_type<X>, 1, 2, 3 );
}
```

### **4.1.5 variant** の破棄

variant のデストラクターは、そのときに保持している値を適切に破棄してくれる。

```
int main()
{
    std::vector<int> v ;
    std::list<int> l ;
    std::deque<int> d ;
```

# 第 4 章 C++17 の型安全な値を格納するライブラリ

```
std::variant<
        std::vector<int>,
        std::list<int>,
        std::deque<int>
> val;

val = v;
val = l;
val = d;

// variant のデストラクターは deque<int>を破棄する
}

variant のユーザーは何もする必要がない。
```

# **4.1.6 variant** の代入

variant の代入はとても自然だ。variant を渡せばコピーするし、値を渡せばオーバーロード解決に従って適切な型の値を保持する。

# **4.1.7** variant $\mathcal{O}$ emplace

variant は emplace をサポートしている。variant の場合、構築すべき型を知らせる必要があるので、emplace<T> の T で構築すべき型を指定する。

```
struct X
{
      X( int, int, int ) { }
      X( X const & ) = delete;
      X( X && ) = delete;
};
int main()
{
    std::variant<std::monostate, X, std::string> v;

      // X を構築
      v.emplace<X>( 1, 2, 3 );
      // std::string を構築
      v.emplace< std::string >( "hello" );
}
```

4.1 variant: 型安全な union

# **4.1.8 variant** に値が入っているかどうかの確認 valueless\_by\_exception メンバー関数

constexpr bool valueless\_by\_exception() const noexcept;

valueless\_by\_exceptionメンバー関数は、variantが値を保持している場合、falseを返す。

variant はどの値も保持しない状態になることがある。たとえば、std::string はコピーにあたって動的なメモリー確保を行うかもしれない。variant が std::string をコピーする際に、動的メモリー確保に失敗した場合、コピーは失敗する。なぜならば、variant は別の型の値を構築する前に、以前の値を破棄しなければならないからだ。variant は値を持たない状態になりうる。

```
int main()
{
    std::variant< int, std::string > v;
    try {
        std::string s("hello");
        v = s; // 動的メモリー確保が発生するかもしれない
    } catch( std::bad_alloc e )
    {
            // 動的メモリー確保が失敗するかもしれない
    }
    // 動的メモリー確保の失敗により
    // true になるかもしれない
```

```
第 4 章 C++17 の型安全な値を格納するライブラリ
      bool b = v.valueless_by_exception() ;
   }
index メンバー関数
   constexpr size_t index() const noexcept;
 index メンバー関数は、variant に指定したテンプレート実引数のうち、現在
variant が保持している値の型を0ベースのインデックスで返す。
   int main()
   {
      std::variant< int, double, std::string > v ;
      auto v0 = v.index(); // 0
      v = 0.0;
      auto v1 = v.index(); // 1
      v = "hello";
      auto v2 = v.index(); // 2
 もし variant が値を保持しない場合、つまり valueless_by_exception() が true
を返す場合は、std::variant_nposを返す。
   // variant が値を持っているかどうか確認する関数
   {\tt template} \; < \; {\tt typename} \; \ldots \; {\tt Types} \; \; > \;
   void has_value( std::variant< Types ... > && v )
      return v.index() != std::variant_npos ;
      // これでもいい
      // return v.valueless_by_exception() == false ;
   }
 std::variant_npos の値は -1 だ。
4.1.9 swap
 variant は swap に対応している。
   int main()
      std::variant<int> a, b ;
```

4.1 variant: 型安全な union

```
a.swap(b);
std::swap(a, b);
}
.10 variant_size<T>: v
```

#### 4.1.10 variant\_size<T>: variant が保持できる型の数を取得

std::variant\_size<T>は、Tに variant 型を渡すと、variant が保持できる型の数を返してくれる。

```
using t1 = std::variant<char> ;
  using t2 = std::variant<char, short> ;
  using t3 = std::variant<char, short, int> ;
  // 1
  constexpr std::size_t t1_size = std::variant_size<t1>::size ;
  constexpr std::size_t t2_size = std::variant_size<t2>::size ;
  // 3
  constexpr std::size_t t2_size = std::variant_size<t3>::size ;
 variant_size は integral_constant を基本クラスに持つクラスなので、デフォル
ト構築した結果をユーザー定義変換することでも値を取り出せる。
  using type = std::variant<char, short, int> ;
  constexpr std::size_t size = std::variant_size<type>{} ;
 variant_size を以下のようにラップした変数テンプレートも用意されている。
  template <class T>
      inline constexpr size_t variant_size_v = variant_size<T>::value;
 これを使えば、以下のようにも書ける。
  using type = std::variant<char, short, int> ;
  constexpr std::size_t size = std::variant_size_v<type> ;
```

#### **4.1.11** variant\_alternative<I, T>: インデックスから型を返す

std::variant\_alternative<I, T> は T 型の variant の保持できる型のうち、I 番目の型をネストされた型名 type で返す。

```
using type = std::variant< char, short, int > ;
   // char
   using t0 = std::variant_alternative< 0, type >::type ;
   // short
   using t1 = std::variant_alternative< 1, type >::type ;
   // int
   using t2 = std::variant_alternative< 2, type >::type ;
 variant_alternative_t というテンプレートエイリアスが以下のように定義されて
いる。
   template <size_t I, class T>
      using variant_alternative_t
          = typename variant_alternative<I, T>::type ;
  これを使えば、以下のようにも書ける。
   using type = std::variant< char, short, int > ;
   // char
   using t0 = std::variant_alternative_t< 0, type > ;
   // short
   using t1 = std::variant_alternative_t< 1, type > ;
   // int
   using t2 = std::variant_alternative_t< 2, type > ;
```

# **4.1.12 holds\_alternative: variant** が指定した型の値を保持しているかどうかの確認

holds\_alternative<T>(v) は、variant v が T 型の値を保持しているかどうかを確認する。保持しているのであれば true を、そうでなければ false を返す。

```
int main()
{
    // int 型の値を構築
    std::variant< int, double > v ;
```

#### 4.1 variant: 型安全な union

```
// true
bool has_int = std::holds_alternative<int>(v);
// false
bool has_double = std::holds_alternative<double>(v);
}
型Tは実引数に与えられた variant が保持できる型でなければならない。以下のようなコードはエラーとなる。
int main()
{
    std::variant< int > v;
// エラー
    std::holds_alternative<double>(v);
}
```

# **4.1.13** get<l>(v): インデックスから値の取得

get<I>(v) は、variant v の型のインデックスから I 番目の型の値を返す。インデックスは 0 ベースだ。

```
int main()
{
    // 0: int
    // 1: double
    // 2: std::string
    std::variant< int, double, std::string > v(42) ;

    // int, 42
    auto a = std::get<0>(v) ;

    v = 3.14 ;
    // double, 3.14
    auto b = std::get<1>(v) ;

    v = "hello" ;
    // std::string, "hello"
    auto c = std::get<2>(v) ;
}
```

```
Iがインデックスの範囲を超えているとエラーとなる。
  int main()
      // インデックスは 0, 1, 2まで
      std::variant< int, double, std::string > v ;
      // エラー、範囲外
      std::get<3>(v) ;
  }
 もし、variant が値を保持していない場合、つまり v.index()!= I の場合は、
std::bad_variant_access が throw される。
   int main()
      // int 型の値を保持
      std::variant< int, double > v( 42 ) ;
      try {
         // double 型の値を要求
         auto d = std::get<1>(v) ;
      } catch ( std::bad_variant_access & e )
          // double は保持していなかった
   }
 get の実引数に渡す variant が lvalue の場合は、戻り値は lvalue リファレンス、
rvalue の場合は戻り値は rvalue リファレンスになる。
   int main()
      std::variant< int > v ;
      // int &
      decltype(auto) a = std::get<0>(v) ;
      decltype(auto) b = std::get<0>( std::move(v) ) ;
  }
```

4.1 variant: 型安全な union

get の実引数に渡す variant が CV 修飾されている場合、戻り値の型も実引数と同じく CV 修飾される。

```
int main()
{
    std::variant< int > const cv ;
    std::variant< int > volatile vv ;
    std::variant< int > const volatile cvv ;

    // int const &
    decltype(auto) a = std::get<0>( cv ) ;
    // int volatile &
    decltype(auto) b = std::get<0>( vv ) ;
    // int const volatile &
    decltype(auto) c = std::get<0>( cvv ) ;
}
```

# **4.1.14** get<T>(v):型から値の取得

get<T>(v) は、variant v の保有する型 T の値を返す。型 T の値を保持していない場合、std::bad\_variant\_access が throw される。

```
int main()
{
    std::variant< int, double, std::string > v( 42 );

    // int
    auto a = std::get<int>( v );

    v = 3.14;
    // double
    auto b = std::get<double>( v );

    v = "hello";
    // std::string
    auto c = std::get<std::string>( v );
}

その他はすべて get<I>と同じ。
```

#### **4.1.15** get\_if: 値を保持している場合に取得

 $get_if<I>(vp)$  と  $get_if<T>(vp)$  は、variant へのポインター vp を実引数に取り、\*vp がインデックス I, もしくは型 T の値を保持している場合、その値へのポインターを返す。

```
int main()
   {
      std::variant< int, double, std::string > v( 42 );
      // int *
      auto a = std::get_if<int>( &v ) ;
      v = 3.14;
      // double *
      auto b = std::get_if<1>( &v ) ;
      v = "hello";
      // std::string
      auto c = std::get_if<2>( &v ) ;
  }
 もし、vpが nullptrの場合、もしくは *vp が指定された値を保持していない場合
は、nullptr を返す。
   int main()
   {
      // int 型の値を保持
```

std::variant< int, double > v( 42 ) ;

auto a = std::get\_if<int>( nullptr ) ;

auto a = std::get\_if<double>( &v ) ;

// nullptr

// nullptr

4.1 variant: 型安全な union

#### 4.1.16 variant の比較

variant は比較演算子がオーバーロードされているため比較できる。variant 同士の比較は、一般のプログラマーは自然だと思う結果になるように実装されている。

#### 同一性の比較

variant の同一性の比較のためには、variant のテンプレート実引数に与える型は自分自身と比較可能でなければならない。

つまり、variant v, w に対して、式 get<i>(v) == get<i>(w) がすべての i に対して妥当でなければならない。

variant v, w の同一性の比較は、v == w の場合、以下のように行われる。

- 1. v.index() != w.index() ならば、false
- 2. それ以外の場合、v.value\_less\_by\_exception() ならば、true
- 3. それ以外の場合、get<i>(v) == get<i>(w)。ただしiはv.index()

2つの variant が別の型を保持している場合は等しくない。ともに値なしの状態であれば等しい。それ以外は保持している値同士が比較される。

```
int main()
{
    std::variant< int, double > a(0), b(0);

    // true
    // 同じ型の同じ値を保持している
    a == b;

    a = 1.0;

    // false
    // 型が違う
    a == b;
}

たとえば operator == は以下のような実装になる。

template <class... Types>
constexpr bool
operator == (const variant<Types...>& v, const variant<Types...>& w)
{
    if ( v.index() != w.index() )
```

```
return false;
else if (v.valueless_by_exception())
return true;
else
return std::visit(
[](auto && a, auto && b){ return a == b;},
v,w);
}
operator != はこの逆だと考えてよい。
```

#### 大小比較

variant の大小の比較のためには、variant のテンプレート実引数に与える型は自分自身と比較可能でなければならない。

つまり、operator < の場合、variant v, w に対して、式 get<i>(v) < get<i>(w) がすべての i に対して妥当でなければならない。

variant v, w の大小比較は、v < w の場合、以下のように行われる。

- 1. w.valueless\_by\_exception() ならば、false
- 2. それ以外の場合、v.valueless\_by\_exception() ならば、true
- 3. それ以外の場合、v.index() < w.index() ならば、true
- 4. それ以外の場合、v.index() > w.index() ならば、false
- 5. それ以外の場合、get<i>(v) < get<i>(w)。ただしiはv.index()

値なしの variant は最も小さいとみなされる。インデックスの小さいほうが小さいとみなされる。どちらも同じ型の値があるのであれば、値同士の比較となる。

```
int main()
{
    std::variant< int, double > a(0), b(0);

    // false
    // 同じ型の同じ値を比較
    a < b;
    a = 1.0;

    // false
    // インデックスによる比較
    a < b;
    // true</pre>
```

#### 4.1 variant: 型安全な union

```
// インデックスによる比較
     b < a ;
 }
operator < は以下のような実装になる。
 template <class... Types>
 constexpr bool
 operator<(const variant<Types...>& v, const variant<Types...>& w)
     if ( w.valueless_by_exception() )
         return false ;
     else if ( v.valueless_by_exception() )
        return true ;
     else if ( v.index() < w.index() )</pre>
         return true ;
     else if ( v.index() > w.index() )
        return false ;
         return std::visit(
             []( auto && a, auto && b){ return a < b; },
             v, w);
 }
```

残りの大小比較も同じ方法で比較される。

#### **4.1.17** visit: variant が保持している値を受け取る

std::visit は、variant の保持している型を実引数に関数オブジェクトを呼んでくれるライブラリだ。

```
// visitor(3.14,42) が呼ばれる
      std::visit( visitor, w, v );
  }
 このように、variant にどの型の値が保持されていても扱うことができる。
 std::visit は以下のように宣言されている。
  template < class Visitor, class... Variants >
  constexpr auto visit( Visitor\&\& vis, Variants\&\&... vars );
 第一引数に関数オブジェクトを渡し、第二引数以降に variant を渡す。すると、
vis(get<i>(vars)...)のように呼ばれる。
  int main()
  {
      std::variant<int> a(1), b(2), c(3);
      // (1)
      std::visit([](auto x) {}, a);
      // ( 1, 2, 3 )
      std::visit( []( auto x, auto y, auto z ) {}, a, b, c );
```

# 4.2 any: どんな型の値でも保持できるクラス

### 4.2.1 使い方

ヘッダーファイル **<any>** で定義されている **std::any** は、ほとんどどんな型の値でも保持できるクラスだ。

```
#include <any>
int main()
{
    std::any a ;
    a = 0 ; // int
    a = 1.0 ; // double
    a = "hello" ; // char const *
```

#### 4.2 any: どんな型の値でも保持できるクラス

```
std::vector<int> v;
a = v; // std::vector<int>

// 保持している std::vector<int>のコピー
auto value = std::any_cast< std::vector<int> >( a );
}

any が保持できない型は、コピー構築できない型だ。
```

# 4.2.2 any の構築と破棄

クラス any はテンプレートではない。そのため宣言は単純だ。

```
int main()
{
    // 値を保持しない
    std::any a;
    // int 型の値を保持する
    std::any b(0);
    // double 型の値を保持する
    std::any c(0.0);
}
```

any が保持する型を事前に指定する必要はない。

クラス any を破棄すると、そのとき保持していた値が適切に破棄される。

# **4.2.3** in\_place\_type コンストラクター

any のコンストラクターで emplace をするために  $in_place_type$  が使える。

```
struct X
{
      X( int, int ) { }
};
int main()
{
      // 型 X を X(1, 2) で構築した結果の値を保持する
      std::any a( std::in_place_type<X>, 1, 2 );
}
```

# 4.2.4 any への代入

```
any への代入も普通のプログラマーの期待どおりの動きをする。
```

```
int main()
{
    std::any a;
    std::any b;

    // a は int 型の値 42 を保持する
    a = 42;
    // b は int 型の値 42 を保持する
    b = a;
}
```

#### **4.2.5** any のメンバー関数

#### emplace

```
template <class T, class... Args>
decay_t<T>& emplace(Args&&... args);

any は emplace メンバー関数をサポートしている。

struct X
{
    X( int, int ) { }
};

int main()
{
    std::any a;

    // 型 X を X(1, 2) で構築した結果の値を保持する
    a.emplace<X>(1, 2);
}
```

#### reset: 値の破棄

```
void reset() noexcept ;
```

#### 4.2 any: どんな型の値でも保持できるクラス

any の reset メンバー関数は、any の保持してある値を破棄する。reset を呼び出した後の any は値を保持しない。

```
int main()
      // aは値を保持しない
      std::any a ;
      // a は int 型の値を保持する
      a = 0;
      // a は値を保持しない
      a.reset();
swap: スワップ
 any は swap メンバー関数をサポートしている。
  int main()
  {
      std::any a(0) ;
      std::any b(0.0);
      // a は int 型の値を保持
      // b は double 型の値を保持
      a.swap(b);
      // a は double 型の値を保持
      // bは int 型の値を保持
  }
```

# has\_value: 値を保持しているかどうか調べる

bool has\_value() const noexcept;

any の has\_value メンバー関数は any が値を保持しているかどうかを調べる。値を保持しているならば true を、保持していないならば false を返す。

```
int main()
{
    std::any a ;
```

```
// false
      bool b1 = a.has_value() ;
      a = 0;
      // true
      bool b2 = a.has_value() ;
      a.reset();
      // false
      bool b3 = a.has_value() ;
  }
type: 保持している型の type_info を得る
   const type_info& type() const noexcept;
 type メンバー関数は、保持している型 T の typeid(T) を返す。値を保持していな
い場合、typeid(void)を返す。
   int main()
   {
      std::any a ;
      // typeid(void)
      auto & t1 = a.type() ;
      a = 0;
      // typeid(int)
      auto & t2 = a.type() ;
      a = 0.0;
      // typeid(double)
      auto & t3 = a.type();
4.2.6 any のフリー関数
make_any<T>: T 型の any を作る
   template <class T, class... Args>
```

#### 4.2 any: どんな型の値でも保持できるクラス

```
any make_any(Args&& ...args);
  template <class T, class U, class... Args>
  any make_any(initializer_list<U> il, Args&& ...args);
 make_any<T>( args... ) は T 型をコンストラクター実引数 args... で構築した値
を保持する any を返す。
  struct X
      X( int, int ) { }
  } ;
  int main()
  {
      // int 型の値を保持する any
      auto a = std::make_any<int>( 0 ) ;
      // double 型の値を保持する any
      auto b = std::make_any<double>( 0.0 ) ;
      // X型の値を保持する any
      auto c = std::make_any<X>(1, 2);
  }
any_cast: 保持している値の取り出し
   template<class T> T any_cast(const any& operand);
   template<class T> T any_cast(any& operand);
  template<class T> T any_cast(any&& operand);
 any_cast<T>(operand) は operand が保持している値を返す。
  int main()
  {
      std::any a(0);
      int value = std::any_cast<int>(a) ;
  }
 any_cast<T> で指定した T型が、any が保持している型ではない場合、
std::bad_any_cast が throw される。
  int main()
```

```
{
    try {
        std::any a ;
        std::any_cast<int>(a) ;
    } catch( std::bad_any_cast e )
    {
            // 型を保持していなかった
    }
}

template<class T>
const T* any_cast(const any* operand) noexcept;
template<class T>
T* any_cast(any* operand) noexcept;
```

any\_cast<T> に any へのポインターを渡すと、T へのポインター型が返される。any が T 型を保持している場合は T 型を参照するポインターが返る。保持していない場合は、nullptr が返る。

```
int main()
{
    std::any a(42) ;

    // int 型の値を参照するポインター
    int * p1 = std::any_cast<int>( &a ) ;

    // nullptr
    double * p2 = std::any_cast<double>( &a ) ;
}
```

# 4.3 optional: 値を保有しているか、していないクラス

#### 4.3.1 使い方

ヘッダーファイル **<optional>** で定義されている optional**<T>** は、T 型の値を保有しているか、保有していないライブラリだ。

条件次第で値が用意できない場合が存在する。たとえば割り算の結果の値を返す関数を考える。

#### 4.3 optional: 値を保有しているか、していないクラス

```
int divide( int a, int b )
{
    if ( b == 0 )
    {
        // エラー処理
    }
    else
        return a / b;
}
```

ゼロで除算はできないので、bの値が0の場合、この関数は値を用意することができない。問題は、int型のすべての値は通常の除算結果として使われるので、エラーであることを示す特別な値を返すこともできない。

このような場合にエラーや値を通知する方法として、過去にさまざまな方法が考案 された。たとえば、ポインターやリファレンスを実引数として受け取る方法、グロー バル変数を使う方法、例外だ。

optional はこのような値が用意できない場合に使える共通の方法を提供する。

```
std::optional<int> divide( int a, int b )
   if ( b == 0 )
       return {};
    else
       return { a / b } ;
}
int main()
    auto result = divide( 10, 2 );
    // 値の取得
    auto value = result.value() ;
    // ゼロ除算
    auto fail = divide( 10, 0 );
    // false、値を保持していない
    bool has_value = fail.has_value() ;
    // throw bad_optional_access
    auto get_value_anyway = fail.value() ;
}
```

#### 4.3.2 optional のテンプレート実引数

```
optional<T> はT型の値を保持するか、もしくは保持しない状態を取る。
```

```
int main()
{
    // int 型の値を保持するかしない optional
    using a = std::optional<int> ;
    // double 型の値を保持するかしない optional
    using b = std::optional<double> ;
}
```

#### 4.3.3 optional の構築

optional をデフォルト構築すると、値を保持しない optional になる。

```
int main()
{
    // 値を保持しない
    std::optional<int> a;
}
```

コンストラクターの実引数に std::nullopt を渡すと、値を保持しない optional になる。

```
int main()
{
    // 値を保持しない
    std::optional<int> a( std::nullopt );
}
```

optional<T> のコンストラクターの実引数に T 型に変換できる型を渡すと、T 型の値に型変換して保持する。

```
int main()
{
    // int 型の値 42 を保持する
    std::optional<int> a(42) ;

    // double 型の値 1.0 を保持する
    std::optional<double> b(1.0);
```

#### 4.3 optional: 値を保有しているか、していないクラス

```
// int から double への型変換が行われる
// int 型の値 1 を保持する
std::optional<int> c ( 1.0 );
}
```

T型からU型に型変換できるとき、optional<T>のコンストラクターに optional<U>を渡すとUからTに型変換されてT型の値を保持する optional になる。

optional のコンストラクターの第一引数に std::in\_place\_type<T> を渡すと、後続の引数を使って T 型のオブジェクトが emplace 構築される。

```
struct X
{
      X( int, int ) { }
};
int main()
{
      // X(1, 2)
      std::optional<X> o( std::in_place_type<X>, 1, 2 ) ;
}
```

#### 4.3.4 optional の代入

通常のプログラマーの期待どおりの挙動をする。std::nullopt を代入すると値を保持しない optional になる。

#### 4.3.5 optional の破棄

optional が破棄されるとき、保持している値があれば、適切に破棄される。

struct X

```
第 4 章 C++17 の型安全な値を格納するライブラリ
```

```
{
   ~X() { }
} ;
int main()
{
   {
      // 値を保持する
      std::optional<X> o ( X{} ) ;
      // Xのデストラクターが呼ばれる
   }
   {
      // 値を保持しない
      std::optional<X> o ;
      // Xのデストラクターは呼ばれない
   }
}
```

#### 4.3.6 swap

```
optional は swap に対応している。
int main()
{
    std::optional<int> a(1), b(2);
    a.swap(b);
}
```

#### **4.3.7** has\_value: 値を保持しているかどうか確認する

```
constexpr bool has_value() const noexcept;
has_value メンバー関数は optional が値を保持している場合、true を返す。
int main()
{
    std::optional<int> a;
    // false
    bool b1 = a.has_value();
```

#### 4.3 optional: 値を保有しているか、していないクラス

```
std::optional<int> b(42) ;
// true
bool b2 = b.has_value() ;
}
```

# **4.3.8 operator bool**: 値を保持しているかどうか確認する

```
constexpr explicit operator bool() const noexcept;
```

optional を文脈上 bool に変換すると、値を保持している場合にのみ true として評価される。

```
int main()
{
    std::optional<bool> a = some_function();
    // OK、文脈上bool に変換
    if ( a )
    {
        // 値を保持
    }
    else
    {
        // 値を不保持
    }

    // エラー、暗黙の型変換は行われない
    bool b1 = a ;
    // OK、明示的な型変換
    bool b2 = static_cast<bool>(a) ;
}
```

# **4.3.9 value**: 保持している値を取得

```
constexpr const T& value() const&;
constexpr T& value() &;
constexpr T&& value() &&;
constexpr const T&& value() const&&;
```

value メンバー関数は optional が値を保持している場合、値へのリファレンスを返す。値を保持していない場合、std::bad\_optional\_access が throw される。

```
int main()
{
    std::optional<int> a(42);

    // OK
    int x = a.value ();

    try {
        std::optional<int> b;
        int y = b.value();
    } catch( std::bad_optional_access e )
    {
        // 値を保持していなかった
    }
}
```

# **4.3.10 value\_or**: 値もしくはデフォルト値を返す

```
template <class U> constexpr T value_or(U&& v) const&;
template <class U> constexpr T value_or(U&& v) &&;
```

value\_or(v) メンバー関数は、optional が値を保持している場合はその値を、保持していない場合は v を返す。

```
int main()
{
    std::optional<int> a( 42 ) ;

    // 42
    int x = a.value_or(0) ;

    std::optional<int> b ;

    // 0
    int x = b.value_or(0) ;
}
```

#### 4.3 optional: 値を保有しているか、していないクラス

#### **4.3.11** reset: 保持している値を破棄する

reset メンバー関数を呼び出すと、保持している値がある場合破棄する。reset メンバー関数を呼び出した後の optional は値を保持しない状態になる。

```
int main()
{
    std::optional<int> a( 42 ) ;

    // true
    bool b1 = a.has_value() ;

    a.reset() ;

    // false
    bool b2 = a.has_value() ;
}
```

#### 4.3.12 optional 同士の比較

optional<T> を比較するためには、T 型のオブジェクト同士が比較できる必要がある。

#### 同一性の比較

値を保持しない2つの optional は等しい。片方のみが値を保持している optional は等しくない。両方とも値を保持している optional は値による比較になる。

```
int main()
{
    std::optional<int> a, b;

    // true
    // どちらも値を保持しない optional
    bool b1 = a == b;

    a = 0;

    // false
    // a のみ値を保持
    bool b2 = a == b;
```

```
b = 1 ;

// false
// どちらも値を保持。値による比較
bool b3 = a == b ;
}
```

#### 大小比較

optional 同士の大小比較は、a < b の場合

- 1. b が値を保持していなければ false
- 2. それ以外の場合で、a が値を保持していなければ true
- 3. それ以外の場合、a と b の保持している値同士の比較

となる。

```
int main()
{
    std::optional<int> a, b;

    // false
    // bが値なし
    bool b1 = a < b;

    b = 0;

    // true
    // bは値ありで a が値なし
    bool b2 = a < b;

    a = 1;

    // false
    // どちらとも値があるので値同士の比較
    // 1 < 0 は false
    bool b3 = a < b;
}</pre>
```

#### 4.3 optional: 値を保有しているか、していないクラス

#### 4.3.13 optional と std::nullopt との比較

optional と std::nullopt との比較は、std::nullopt が値を持っていない optional として扱われる。

#### **4.3.14 optional<T>と T** の比較

optional<T> と T 型の比較では、optional<t> が値を保持していない場合 false が返る。それ以外の場合、optional の保持している値と T が比較される。

```
int main()
{
    std::optional<int> o(1);

    // true
    bool b1 = ( o == 1 );
    // false
    bool b2 = ( o == 0 );

    // oは値を保持しない
    o.reset();

    // T の値にかかわらず false
    // false
    bool b3 = ( o == 1 );
    // false
    bool b4 = ( o == 0 );
}
```

#### 4.3.15 make\_optional<T>: optional<T>を返す

```
template <class T>
constexpr optional<decay_t<T>> make_optional(T&& v);
make_optional<T>(T t) は optional<T>(t) を返す。
int main()
{
    // std::optional<int>、値は 0
    auto o1 = std::make_optional(0);
```

```
// std::optional<double>、値は 0.0 auto o2 = std::make_optional( 0.0 ) ; }
```

# 4.3.16 make\_optional<T, Args ... >: optional<T>を in\_place\_type 構築して源す

 $make\_optional$  の第一引数が T 型ではない場合、 $in\_place\_type$  構築するオーバーロード関数が選ばれる。

```
struct X
{
      X( int, int ) { }
};
int main()
{
      // std::optional<X>( std::in_place_type<X>, 1, 2 )
      auto o = std::make_optional<X>( 1, 2 );
}
```

# 第5章

string\_view: 文字列ラッパー

string\_view は、文字型 (char, wchar\_t, char16\_t, char32\_t) の連続した配列で表現された文字列に対する共通の文字列ビューを提供する。文字列は所有しない。

#### 5.1 使い方

連続した文字型の配列を使った文字列の表現方法にはさまざまある。C++ では最も基本的な文字列の表現方法として、null 終端された文字型の配列がある。

```
char str[6] = { 'h', 'e', 'l', 'l', 'o', '\0' };

あるいは、文字型の配列と文字数で表現することもある。

// size は文字数
  std::size_t size
  char * ptr;

このような表現をいちいち管理するのは面倒なので、クラスで包むこともある。

class string_type
  {
    std::size_t size;
    char *ptr
  };

このように文字列を表現する方法はさまざまある。これらのすべてに対応している
```

このように文字列を表現する方法はさまざまある。これらのすべてに対応していると、表現の数だけ関数のオーバーロードが追加されていくことになる。

```
// null 終端文字列用
void process_string( char * ptr ) ;
// 配列へのポインターと文字数
```

```
第5章 string_view:文字列ラッパー
```

```
void process_string( char * ptr, std::size_t size ) ;
  // std::string クラス
  void process_string( std::string s ) ;
  // 自作の string_type クラス
  void process_string( string_type s ) ;
  // 自作の my_string_type クラス
  void process_string( my_string_type s ) ;
 string_view はさまざまな表現の文字列に対して共通の view を提供することで、
この問題を解決できる。もう関数のオーバーロードを大量に追加する必要はない。
  // 自作の string_type
  struct string_type
  {
      std::size_t size ;
      char * ptr ;
      // string_view に対応する変換関数
      operator std::string_view() const noexcept
          return std::string_view( ptr, size ) ;
      }
  }
  // これ1つだけでよい
  void process_string( std::string_view s ) ;
  int main()
      // OK
      process_string( "hello" ) ;
      // OK
      process_string( { "hello", 5 } );
      std::string str( "hello" ) ;
      process_string( str ) ;
      string_type st{5, "hello"} ;
      process_string( st ) ;
  }
```

#### 5.2 basic\_string\_view

std::string が std::basic\_string< CharT, Traits > に対する std::basic\_string<char> であるように、std::string\_view も、その実態は std::basic\_string\_viewの特殊化への typedef 名だ。

# // 本体 template<class charT, class traits = char\_traits<charT>> class basic\_string\_view; // それぞれの文字型のtypedef 名 using string\_view = basic\_string\_view<char>; using u16string\_view = basic\_string\_view<char16\_t>; using u32string\_view = basic\_string\_view<char32\_t>; using wstring\_view = basic\_string\_view<wchar\_t>;

なので、通常は basic\_string\_view ではなく、string\_view とか u16string\_view などの typedef 名を使うことになる。本書では string\_view だけを解説するが、その他の typedef 名も文字型が違うだけで同じだ。

#### 5.3 文字列の所有、非所有

string\_view は文字列を所有しない。所有というのは、文字列を表現するストレージの確保と破棄に責任を持つということだ。所有しないことの意味を説明するために、まず文字列を所有するライブラリについて説明する。

std::string は文字列を所有する。std::string 風のクラスの実装は、たとえば以下のようになる。

```
class string
{
    std::size_t size;
    char * ptr;

public:
    // 文字列を表現するストレージの動的確保
    string ( char const * str )
    {
        size = std::strlen( str );
    }
}
```

第5章 string\_view:文字列ラッパー

```
ptr = new char[size+1] ;
       std::strcpy( ptr, str ) ;
   }
   // コピー
   // 別のストレージを動的確保
   string ( string const & r ) \,
       : size( r.size ), ptr ( new char[size+1] )
       std::strcpy( ptr, r.ptr ) ;
   }
   // ムーブ
   // 所有権の移動
   string ( string && r ) \,
       : size( r.size ), ptr( r.ptr )
       r.size = 0;
       r.ptr = nullptr ;
    // 動的確保したストレージを解放
    ~string()
   {
       delete[] ptr ;
   }
} ;
```

std::string は文字列を表現するストレージを動的に確保し、所有する。コピーは別のストレージを確保する。ムーブするときはストレージの所有権を移す。デストラクターは所有しているストレージを破棄する。

std::string\_view は文字列を所有しない。std::string\_view 風のクラスの実装は、たとえば以下のようになる。

```
class string_view
{
    std::size_t size ;
    char const * ptr ;
```

```
public :
     // 所有しない
     // str の参照先の寿命は呼び出し側が責任を持つ
     string_view( char const * str ) noexcept
        : size( std::strlen(str) ), ptr( str )
     { }
     // コピー
     // メンバーごとのコピーだけでよいので default 化するだけでよい
     string_view( string_view const & r ) noexcept = default ;
     // ムーブはコピーと同じ
     // 所有しないので所有権の移動もない
     // 破棄
     // 何も解放するストレージはない
     // デストラクターもトリビアルでよい
  } ;
 string_viewに渡した連続した文字型の配列へのポインターの寿命は、渡した側が
責任を持つ。つまり、以下のようなコードは間違っている。
  std::string_view get_string()
     char str[] = "hello" ;
     // エラー
     // str の寿命は関数の呼び出し元に戻った時点で尽きている
     return str ;
  }
```

# 5.4 string\_view の構築

string\_viewの構築には4種類ある。

- デフォルト構築
- null 終端された文字型の配列へのポインター
- 文字型の配列へのポインターと文字数
- 文字列クラスからの変換関数

第5章 string\_view:文字列ラッパー

#### 5.4.1 デフォルト構築

```
constexpr basic_string_view() noexcept;
string_view のデフォルト構築は、空の string_view を作る。
int main()
{
    // 空の string_view
    std::string_view s;
}
```

# 5.4.2 null 終端された文字型の配列へのポインター

constexpr basic\_string\_view(const charT\* str);

この  $string_view$  のコンストラクターは、null 終端された文字型へのポインターを受け取る。

```
int main()
{
    std::string_view s( "hello" ) ;
}
```

#### 5.4.3 文字型へのポインターと文字数

constexpr basic\_string\_view(const charT\* str, size\_type len);

この string\_view のコンストラクターは、文字型の配列へのポインターと文字数を受け取る。ポインターは null 終端されていなくてもよい。

```
int main()
{
    char str[] = {'h', 'e', 'l', 'l', 'o'};
    std::string_view s( str, 5 );
}
```

#### 5.4.4 文字列クラスからの変換関数

他の文字列クラスから string\_view を作るには、変換関数を使う。string\_view のコンストラクターは使わない。

std::string は string\_view への変換関数をサポートしている。独自の文字列クラスを string\_view に対応させるにも変換関数を使う。たとえば以下のように実装する。

```
class string
{
    std::size_t size;
    char * ptr;

public:
    operator std::string_view() const noexcept
    {
        return std::string_view( ptr, size );
    }
};

これにより、std::string から string_view への変換が可能になる。
int main()
{
    std::string s = "hello";
    std::string_view sv = s;
}
```

コレと同じ方法を使えば、独自の文字列クラスも string\_view に対応させることができる

std::string は string\_view を受け取るコンストラクターを持っているので、string\_view から string への変換もできる。

```
int main()
{
    std::string_view sv = "hello";

// コピーされる
    std::string s = sv;
}
```

第5章 string\_view:文字列ラッパー

# 5.5 string\_view の操作

string\_view は既存の標準ライブラリの string とほぼ同じ操作性を提供している。たとえばイテレーターを取ることができるし、operator [] で要素にアクセスできるし、size() で要素数が返るし、find() で検索もできる。

```
template < typename T >
  void f( T t )
      for ( auto c : t )
          std::cout << c ;
      }
      if (t.size() > 3)
          auto c = t[3];
      auto pos = t.find( "fox" ) ;
  }
   int main()
      std::string s("quick brown fox jumps over the lazy dog.") ;
      f(s);
      std::string_view sv = s ;
      f( sv );
 string_view は文字列を所有しないので、文字列を書き換える方法を提供してい
ない。
   int main()
      std::string s = "hello" ;
```

```
s[0] = 'H';
     s += ",world" ;
     std::string_view sv = s ;
     // エラー
     // string_view は書き換えられない
     sv[0] = 'h';
     s += ".\n";
 }
string_view は文字列を所有せず、ただ参照しているだけだからだ。
 int main()
 {
     std::string s = "hello";
     std::string_view sv = s ;
     // "hello"
     std::cout << sv ;
     s = "world" ;
     // "world"
     // string_view は参照しているだけ
     std::cout << sv ;
 }
```

string\_view は string とほぼ互換性のあるメンバーを持っているが、一部の文字 列を変更するメンバーは削除されている。

# 5.5.1 remove\_prefix/remove\_suffix: 先頭、末尾の要素の削除

 $string\_view$  は先頭と末尾から n 個の要素を削除するメンバー関数を提供している。

```
constexpr void remove_prefix(size_type n);
constexpr void remove_suffix(size_type n);
```

string\_view にとって、先頭と末尾からn個の要素を削除するのは、ポインターをn個ずらすだけなので、これは文字列を所有しないstring\_viewでも行える操作だ。

```
int main()
```

```
第5章 string_view:文字列ラッパー

{
    std::string s = "hello";
    std::string_view s1 = s;

    // "lo"
    s1.remove_prefix(3);

    std::string_view s2 = s;

    // "he"
    s2.remove_suffix(3);
}

このメンバー関数は既存の std::string にも追加されている。
```

# 5.6 ユーザー定義リテラル

```
std::string と std::string_view にはユーザー定義リテラルが追加されている。
 string operator""s(const char* str, size_t len);
 u16string operator""s(const char16_t* str, size_t len);
 u32string operator""s(const char32_t* str, size_t len);
 wstring operator""s(const wchar_t* str, size_t len);
 constexpr string_view
 operator""sv(const char* str, size_t len) noexcept;
 constexpr u16string_view
 operator""sv(const char16_t* str, size_t len) noexcept;
 constexpr u32string_view
 operator""sv(const char32_t* str, size_t len) noexcept;
 constexpr wstring_view
 operator""sv(const wchar_t* str, size_t len) noexcept;
以下のように使う。
 int main()
     using namespace std::literals;
```

5.6 ユーザー定義リテラル

```
// std::string
auto s = "hello"s;

// std::string_view
auto sv = "hello"sv;
}
```

# 第6章

# メモリーリソース: 動的ストレージ確保ライブラリ

ヘッダーファイル <memory\_resource> で定義されているメモリーリソースは、動的ストレージを確保するための C++17 で追加されたライブラリだ。その特徴は以下のとおり。

- アロケーターに変わる新しいインターフェースとしてのメモリーリソース
- ポリモーフィックな振る舞いを可能にするアロケーター
- 標準で提供されるさまざまな特性を持ったメモリーリソースの実装

# 6.1 メモリーリソース

メモリーリソースはアロケーターに変わる新しいメモリー確保と解放のためのインターフェースとしての抽象クラスだ。コンパイル時に挙動を変える静的ポリモーフィズム設計のアロケーターと違い、メモリーリソースは実行時に挙動を変える動的ポリモーフィズム設計となっている。

```
void f( memory_resource * mem )
{
    // 10 バイトのストレージを確保
    auto ptr = mem->allocate( 10 );
    // 確保したストレージを解放
    mem->deallocate( ptr );
}

クラス std::pmr::memory_resourceの宣言は以下のとおり。
namespace std::pmr {
```

```
class memory_resource {
 public:
     virtual ~ memory_resource();
     void* allocate(size_t bytes, size_t alignment = max_align);
     void deallocate(void* p, size_t bytes,
                     size_t alignment = max_align);
     bool is_equal(const memory_resource& other) const noexcept;
 private:
     virtual void* do_allocate(size_t bytes, size_t alignment) = 0;
     virtual void do_deallocate( void* p, size_t bytes,
                                size_t alignment) = 0;
     virtual bool do_is_equal(const memory_resource& other)
         const noexcept = 0;
 };
 }
クラス memory_resource は std::pmr 名前空間スコープの中にある。
```

## 6.1.1 メモリーリソースの使い方

memory\_resource を使うのは簡単だ。memory\_resource のオブジェクトを確保し たら、メンバー関数 allocate(bytes, alignment) でストレージを確保する。メン バー関数 deallocate(p, bytes, alignment) でストレージを解放する。

```
void f( std::pmr::memory_resource * mem )
{
   // 100 バイトのストレージを確保
   void * ptr = mem->allocate( 100 ) ;
   // ストレージを解放
   mem->deallocate( ptr, 100 ) ;
```

2つの memory\_resource のオブジェクト a, b があるとき、一方のオブジェクトで確 保したストレージをもう一方のオブジェクトで解放できるとき、a.is\_equal(b)は true を返す。

```
void f( std::pmr::memory_resource * a, std::pmr::memory_resource * b )
   void * ptr = a->allocate( 1 ) ;
```

```
// aで確保したストレージは b で解放できるか?
if (a->is_equal(*b))
{// できる
    b->deallocate(ptr, 1);
}
else
{// できない
    a->deallocate(ptr, 1);
}

is_equal を呼び出す operator == と operator != も提供されている。

void f(std::pmr::memory_resource * a, std::pmr::memory_resource * b)
{
    bool b1 = (*a == *b);
    bool b2 = (*a != *b);
}
```

## 6.1.2 メモリーリソースの作り方

独自のメモリーアロケーターを memory\_resource のインターフェースに合わせて作るには、memory\_resource から派生した上で、do\_allocate, do\_deallocate, do\_is\_equal の 3 つの private 純粋 virtual メンバー関数をオーバーライドする。必要に応じてデストラクターもオーバーライドする。

do\_allocate(bytes, alignment) は少なくとも alignment バイトでアライメント された bytes バイトのストレージへのポインターを返す。ストレージが確保できな かった場合は、適切な例外を throw する。

do\_deallocate(p, bytes, alignment) は事前に同じ \*this から呼び出された allocate(bytes, alignment) で返されたポインター p を解放する。すでに解放 されたポインター p を渡してはならない。例外は投げない。

do\_is\_equal(other) は、\*this と other が互いに一方で確保したストレージをもう一方で解放できる場合に true を返す。

たとえば、malloc/free を使った memory\_resource の実装は以下のとおり。

```
// malloc/free を使ったメモリーリソース
class malloc_resource : public std::pmr::memory_resource
public :
   //
    ~malloc_resource() { }
private :
   // ストレージの確保
    // 失敗した場合 std::bad_alloc を throw する
   virtual void *
   do_allocate( std::size_t bytes, std::size_t alignment ) override
       void * ptr = std::malloc( bytes ) ;
       if ( ptr == nullptr )
       { throw std::bad_alloc{} ; }
       return ptr ;
   }
   // ストレージの解放
   virtual void
   do_deallocate( void * p, std::size_t bytes,
                   std::size_t alignment ) override
    {
       std::free( p ) ;
   }
   virtual bool
   do_is_equal( const memory_resource & other )
       const noexcept override
```

# 6.2 polymorphic\_allocator:動的ポリモーフィズムを実現するアロケーター

do\_allocate は malloc でストレージを確保し、do\_deallocate は free でストレージを解放する。メモリーリソースで0 バイトのストレージを確保しようとしたときの規定はないので、malloc の挙動に任せる。malloc は0 バイトのメモリーを確保しようとしたとき、C11 では規定がない。POSIX では null ポインターを返すか、freeで解放可能な何らかのアドレスを返すものとしている。

do\_is\_equal は、malloc\_resource でさえあればどのオブジェクトから確保されたストレージであっても解放できるので、\*this が malloc\_resource であるかどうかを dynamic\_cast で確認している。

# **6.2 polymorphic\_allocator**: 動的ポリモーフィズムを実現するアロケーター

std::pmr::polymorphic\_allocator はメモリーリソースを動的ポリモーフィズムとして振る舞うアロケーターにするためのライブラリだ。

従来のアロケーターは、静的ポリモーフィズムを実現するために設計されていた。 たとえば独自の custom\_int\_allocator 型を使いたい場合は以下のように書く。

```
std::vector< int, custom_int_allocator > v ;
```

コンパイル時に使うべきアロケーターが決定できる場合はこれでいいのだが、実行時にアロケーターを選択したい場合、アロケーターをテンプレート引数に取る設計は問題になる。

そのため、C++17ではメモリーリソースをコンストラクター引数に取り、メモリーリソースからストレージを確保する実行時ポリモーフィックの振る舞いをする $std::pmr::polymorphic_allocator$ が追加された。

たとえば、標準入力から true か false が入力されたかによって、システムのデフォルトのメモリーリソースと、monotonic\_buffer\_resource を実行時に切り替えるには、以下のように書ける。

```
int main()
{
```

```
bool b;
     std::cin >> b ;
    std::pmr::memory_resource * mem ;
    std::unique_ptr< memory_resource > mono ;
    if ( b )
     { // デフォルトのメモリーリソースを使う
        mem = std::pmr::get_default_resource() ;
    }
    else
     { // モノトニックバッファーを使う
        mono = std::make_unique< std::pmr::monotonic_buffer_resource >
                ( std::pmr::get_default_resource() );
        mem = mono.get() ;
    }
    std::vector< int, std::pmr::polymorphic_allocator<int> >
        v( std::pmr::polymorphic_allocator<int>( mem ) );
 }
std::pmr::polymorphic_allocator は以下のように宣言されている。
 namespace std::pmr {
 template <class T>
 class polymorphic_allocator ;
テンプレート実引数には std::allocator<T> と同じく、確保する型を与える。
```

# **6.2.1** コンストラクター

```
polymorphic_allocator() noexcept;
polymorphic_allocator(memory_resource* r);
```

std::pmr::polymorphic\_allocatorのデフォルトコンストラクターは、メモリーリソースを std::pmr::get\_default\_resource() で取得する。

memory\_resource \* を引数に取るコンストラクターは、渡されたメモリーリソースをストレージ確保に使う。polymorphic\_allocatorの生存期間中、メモリーリソース

## 6.3 プログラム全体で使われるメモリーリソースの取得

へのポインターは妥当なものでなければならない。

```
int main()
{
    // p1( std::pmr::get_default_resource () ) と同じ
    std::pmr::polymorphic_allocator<int> p1 ;

    std::pmr::polymorphic_allocator<int> p2(
        std::pmr::get_default_resource() ) ;
}
```

後は通常のアロケーターと同じように振る舞う。

# 6.3 プログラム全体で使われるメモリーリソースの取得

C++17 では、プログラム全体で使われるメモリーリソースへのポインターを取得することができる。

## 6.3.1 new\_delete\_resource()

```
memory_resource* new_delete_resource() noexcept ;
```

関数 new\_delete\_resource はメモリーリソースへのポインターを返す。参照されるメモリーリソースは、ストレージの確保に ::operator new を使い、ストレージの解放に ::operator delete を使う。

```
int main()
{
    auto mem = std::pmr::new_delete_resource() ;
}
```

# 6.3.2 null\_memory\_resource()

```
memory_resource* null_memory_resource() noexcept ;
```

関数 null\_memory\_resource はメモリーリソースへのポインターを返す。参照されるメモリーリソースの allocate は必ず失敗し、std::bad\_alloc を throw する。deallocate は何もしない。

このメモリーリソースは、ストレージの確保に失敗した場合のコードをテストする 目的で使える。

# 6.3.3 デフォルトリソース

```
memory_resource* set_default_resource(memory_resource* r) noexcept ;
memory_resource* get_default_resource() noexcept ;
```

デフォルト・メモリーリソース・ポインターとは、メモリーリソースを明示的に指定することができない場合に、システムがデフォルトで利用するメモリーリソースへのポインターのことだ。初期値は new\_delete\_resource() の戻り値となっている。

現在のデフォルト・メモリーリソース・ポインターと取得するためには、関数 get\_default\_resource を使う。デフォルト・メモリーリソース・ポインターを独自のメモリーリソースに差し替えるには、関数 set\_default\_resource を使う。

```
int main()
{
    // 現在のデフォルトのメモリーリソースへのポインター
    auto init_mem = std::pmr::get_default_resource();

    std::pmr::synchronized_pool_resource pool_mem;

    // デフォルトのメモリーリソースを変更する
    std::pmr::set_default_resource(&pool_mem);

    auto current_mem = std::pmr::get_default_resource();

    // true
    bool b = current_mem == pool_mem;
}
```

# 6.4 標準ライブラリのメモリーリソース

標準ライブラリはメモリーリソースの実装として、プールリソースとモノトニックリソースを提供している。このメモリーリソースの詳細は後に解説するが、ここではそのための事前知識として、汎用的なメモリーアロケーター一般の解説をする。

プログラマーはメモリーを気軽に確保している。たとえば 47 バイトとか 151 バイトのような中途半端なサイズのメモリーを以下のように気軽に確保している。

```
int main()
{
```

## 6.4 標準ライブラリのメモリーリソース

```
auto mem = std::get_default_resource() ;
auto p1 = mem->allocate( 47 ) ;
auto p2 = mem->allocate( 151 ) ;
mem->deallocate( p1 ) ;
mem->deallocate( p2 ) ;
}
```

しかし、残念ながら現実のハードウェアや OS のメモリー管理は、このように柔軟にはできていない。たとえば、あるアーキテクチャーと OS では、メモリーはページサイズと呼ばれる単位でしか確保できない。そして最小のページサイズですら 4K バイトであったりする。もしシステムの低級なメモリー管理を使って上のコードを実装しようとすると、47 バイト程度のメモリーを使うのに 3K バイト超の無駄が生じることになる。

他にもアライメントの問題がある。アーキテクチャーによってはメモリーアドレスが適切なアライメントに配置されていないとメモリーアクセスができないか、著しくパフォーマンスが落ちることがある。

malloc や operator new などのメモリーアロケーターは、低級なメモリー管理を隠匿し、小さなサイズのメモリー確保を効率的に行うための実装をしている。

一般的には、大きな連続したアドレス空間のメモリーを確保し、その中に管理用の データ構造を作り、メモリーを必要なサイズに切り出す。

#### // 実装イメージ

```
// ストレージを分割して管理するためのリンクリストデータ構造
struct alignas(std::max_align_t) chunk
{
    chunk * next ;
    chunk * prev ;
    std::size_t size ;
};

class memory_allocator : public std::pmr::memory_resource
{
    chunk * ptr ; // ストレージの先頭へのポインター
    std::size_t size ; // ストレージのサイズ
    std::mutex m ; // 同期用
```

```
public :
   memory_allocator()
       // 大きな連続したストレージを確保
   }
   virtual void *
   do_allocate( std::size_t bytes, std::size_t alignment ) override
       std::scoped_lock lock( m ) ;
       // リンクリストをたどり、十分な大きさの未使用領域を探し、リンクリスト構造体を
       // 構築して返す
       // アライメント要求に注意
   }
   virtual void *
   do_allocate( std::size_t bytes, std::size_t alignment ) override
       std::scoped_lock lock( m ) ;
       // リンクリストから該当する部分を削除
   virtual bool
   do_is_equal( const memory_resource & other )
       const noexcept override
   // *thisと other で相互にストレージを解放できるかどうか返す
   }
} ;
```

# 6.5 プールリソース

プールリソースは  $C_{++17}$  の標準ライブラリが提供しているメモリーリソースの 実装だ。synchronized\_pool\_resource と unsynchronized\_pool\_resource の 2 つが ある。

# **6.5.1** アルゴリズム

プールリソースは以下のような特徴を持つ。

• プールリソースのオブジェクトが破棄されるとき、そのオブジェクトから allocate で確保したストレージは、明示的に deallocate を呼ばずとも解放される。

```
void f()
{
    std::pmr::synchronized_pool_resource mem;
    mem.allocate(10);

// 確保したストレージは破棄される
}
```

• プールリソースの構築時に、上流メモリーリソースを与えることができる。プールリソースは上流メモリーリソースからチャンクのためのストレージを確保する。

```
int main()
{
    // get_default_resource() が使われる
    std::pmr::synchronized_pool_resource m1;

    // 独自の上流メモリーリソースを指定
    custom_memory_resource mem;
    std::pmr::synchronized_pool_resource m2( &mem );
}
```

プールリソースはストレージを確保する上流メモリーリソースから、プールと呼ばれる複数のストレージを確保する。プールは複数のチャンクを保持している。チャンクは複数の同一サイズのブロックを保持している。プールリソースに対する do\_allocate(size, alignment) は、少なくとも size バイトのブロックサイズのプールのいずれかのチャンクのブロックが割り当てられる。
 もし、最大のブロックサイズを超えるサイズのストレージを確保しようとした場合、上流メモリーリソースから確保される。

```
// 実装イメージ
```

```
namespace std::pmr {
```

// チャンクの実装

```
template < size_t block_size >
class chunk
   blocks<block_size> b ;
// プールの実装
template < size_t block_size >
class pool : public memory_resource
   chunks<block_size> c ;
} ;
class pool_resource : public memory_resource
   // それぞれのブロックサイズのプール
   pool<8> pool_8bytes ;
   pool<16> pool_16bytes ;
   pool<32> pool_32bytes ;
   // 上流メモリーリソース
   memory_resource * mem ;
   virtual void * do_allocate( size_t bytes, size_t alignment ) override
   {
       // 対応するブロックサイズのプールにディスパッチ
       if ( bytes <= 8 )
           return pool_8bytes.allocate( bytes, alignment ) ;
       else if ( bytes <= 16 )</pre>
           return pool_16bytes.allocate( bytes, alignment );
       else if ( bytes < 32 )
           return pool_32bytes.allocate( bytes, alignment );
       else
       // 最大ブロックサイズを超えたので上流メモリーリソースにディスパッチ
          return mem->allocate( bytes, alignment ) ;
   }
};
}
```

- プールリソースは構築時に pool\_options を渡すことにより、最大ブロックサイズ と最大チャンクサイズを設定できる。
- マルチスレッドから呼び出しても安全な同期を取る synchronized\_pool\_resource と、同期を取らない unsynchronized\_pool\_resource がある。

# 6.5.2 synchronized/unsynchronized\_pool\_resource

プールリソースには、synchronized\_pool\_resource と unsynchronized\_pool\_resourceがある。どちらもクラス名以外は同じように使える。ただし、synchronized\_pool\_resource は複数のスレッドから同時に実行しても使えるように内部で同期が取られているのに対し、unsynchronized\_pool\_resource は同期を行わない。unsynchronized\_pool\_resource は複数のスレッドから同時に呼び出すことはできない。

## // 実装イメージ

```
namespace std::pmr {
class synchronized_pool_resource : public memory_resource
    std::mutex m ;
    virtual void *
    do_allocate( size_t size, size_t alignment ) override
        // 同期する
       std::scoped_lock l(m) ;
        return do_allocate_impl( size, alignment ) ;
    }
};
class unsynchronized_pool_resource : public memory_resource
    virtual void *
    do_allocate( size_t size, size_t alignment ) override
        // 同期しない
        return do_allocate_impl( size, alignment ) ;
};
```

}

## 6.5.3 pool\_options

pool\_options はプールリソースの挙動を指定するためのクラスで、以下のように 定義されている。

```
namespace std::pmr {
struct pool_options {
    size_t max_blocks_per_chunk = 0;
    size_t largest_required_pool_block = 0;
};
```

このクラスのオブジェクトをプールリソースのコンストラクターに与えることで、 プールリソースの挙動を指定できる。ただし、pool\_options による指定はあくまで も目安で、実装には従う義務はない。

max\_blocks\_per\_chunk は、上流メモリーリソースからプールのチャンクを補充する際に一度に確保する最大のブロック数だ。この値がゼロか、実装の上限より大きい場合、実装の上限が使われる。実装は指定よりも小さい値を使うことができるし、またプールごとに別の値を使うこともできる。

largest\_required\_pool\_block はプール機構によって確保される最大のストレージのサイズだ。この値より大きなサイズのストレージを確保しようとすると、上流メモリーストレージから直接確保される。この値がゼロか、実装の上限よりも大きい場合、実装の上限が使われる。実装は指定よりも大きい値を使うこともできる。

# 6.5.4 プールリソースのコンストラクター

プールリソースの根本的なコンストラクターは以下のとおり。synchronized と unsynchronized どちらも同じだ。

```
pool_resource(const pool_options& opts, memory_resource* upstream);
pool_resource()
: pool_resource(pool_options(), get_default_resource()) {}
explicit pool_resource(memory_resource* upstream)
: pool_resource(pool_options(), upstream) {}
```

```
explicit pool_resource(const pool_options& opts)
: pool_resource(opts, get_default_resource()) {}
```

pool\_options と memory\_resource \* を指定する。指定しない場合はデフォルト値が使われる。

# 6.5.5 プールリソースのメンバー関数

# release()

void release();

確保したストレージすべてを解放する。たとえ明示的に deallocate を呼び出されていないストレージも解放する。

```
int main()
{
    synchronized_pool_resource mem;
    void * ptr = mem.allocate(10);

    // ptr は解放される
    mem.release();
}
```

# upstream\_resource()

```
memory_resource* upstream_resource() const;
```

構築時に渡した上流メモリーリソースへのポインターを返す。

# options()

```
pool_options options() const;
```

構築時に渡した pool\_options オブジェクトと同じ値を返す。

# 6.6 モノトニックバッファーリソース

モノトニックバッファーリソースは C++17 で標準ライブラリに追加されたメモリーリソースの実装だ。クラス名は monotonic\_buffer\_resource。

モノトニックバッファーリソースは高速にメモリーを確保し、一気に解放するとい

う用途に特化した特殊な設計をしている。モノトニックバッファーリソースはメモリー解放をせず、メモリー使用量がモノトニックに増え続けるので、この名前が付いている。

たとえばゲームで1フレームを描画する際に大量に小さなオブジェクトのためのストレージを確保し、その後確保したストレージをすべて解放したい場合を考える。通常のメモリーアロケーターでは、メモリー片を解放するためにメモリー全体に構築されたデータ構造をたどり、データ構造を書き換えなければならない。この処理は高くつく。すべてのメモリー片を一斉に解放してよいのであれば、データ構造をいちいちたどったり書き換えたりする必要はない。メモリーの管理は、単にポインターだけでよい。

#### // 実装イメージ

```
namespace std::pmr {
class monotonic_buffer_resource : public memory_resource
   // 連続した長大なストレージの先頭へのポインター
   void * ptr ;
   // 現在の未使用ストレージの先頭へのポインター
   std::byte * current ;
   virtual void *
   do_allocate( size_t bytes, size_t alignment ) override
       void * result = static_cast<void *>(current) ;
       current += bytes ; // 必要であればアライメント調整
       return result ;
   }
   virtual void
   do_deallocate( void * ptr, size_t bytes, size_t alignment ) override
       // 何もしない
   }
public :
   ~monotonic_buffer_resource()
       // ptr の解放
```

```
}
};
```

このように、基本的な実装としては、do\_allocate はポインターを加算して管理するだけだ。なぜならば解放処理がいらないため、個々のストレージ片を管理するためのデータ構造を構築する必要がない。do\_deallocate は何もしない。デストラクターはストレージ全体を解放する。

# 6.6.1 アルゴリズム

モノトニックバッファーリソースは以下のような特徴を持つ。

• deallocate 呼び出しは何もしない。メモリー使用量はリソースが破棄されるまで モノトニックに増え続ける。

```
int main()
{
    std::pmr::monotonic_buffer_resource mem ;

    void * ptr = mem.allocate(10);
    // 何もしない
    // ストレージは解放されない
    mem.deallocate(ptr);

    // mem が破棄される際に確保したストレージはすべて破棄される
}
```

• メモリー確保に使う初期バッファーを与えることができる。ストレージ確保の際に、初期バッファーに空きがある場合はそこから確保する。空きがない場合は上流メモリーリソースからバッファーを確保して、バッファーから確保する。

```
int main()
{
   std::byte initial_buffer[10];
   std::pmr::monotonic_buffer_resource
        mem( initial_buffer, 10, std::pmr::get_default_resource() );

// 初期バッファーから確保
```

```
mem.allocate(1);

// 上流メモリーリソースからストレージを確保して切り出して確保
mem.allocate(100);

// 前回のストレージ確保で空きがあればそこから
// なければ新たに上流から確保して切り出す
mem.allocate(100);

}
```

- 1つのスレッドから使うことを前提に設計されている。allocate と deallocate は 同期しない。
- メモリーリソースが破棄されると確保されたすべてのストレージも解放される。 明示的に deallocate を呼ばなくてもよい。

## 6.6.2 コンストラクター

モノトニックバッファーリソースには以下のコンストラクターがある。

```
explicit monotonic_buffer_resource(memory_resource *upstream);
 monotonic_buffer_resource( size_t initial_size,
                            memory_resource *upstream);
 monotonic_buffer_resource( void *buffer, size_t buffer_size,
                            memory_resource *upstream);
 monotonic_buffer_resource()
     : monotonic_buffer_resource(get_default_resource()) {}
 explicit monotonic_buffer_resource(size_t initial_size)
     : monotonic_buffer_resource(initial_size,
                                get_default_resource()) {}
 monotonic_buffer_resource(void *buffer, size_t buffer_size)
     : monotonic_buffer_resource(buffer, buffer_size,
                                get_default_resource()) {}
初期バッファーを取らないコンストラクターは以下のとおり。
 explicit monotonic_buffer_resource(memory_resource *upstream);
 monotonic_buffer_resource( size_t initial_size,
                            memory_resource *upstream);
 monotonic_buffer_resource()
     : monotonic_buffer_resource(get_default_resource()) {}
```

initial\_size は、上流メモリーリソースから最初に確保するバッファーのサイズ (初期サイズ) のヒントとなる。実装はこのサイズか、あるいは実装依存のサイズを バッファーとして確保する。

デフォルトコンストラクターは上流メモリーリソースに std::pmr\_get\_default\_resource()を与えたのと同じ挙動になる。

size\_t1 つだけを取るコンストラクターは、初期サイズだけを与えて後はデフォルトの扱いになる。

初期バッファーを取るコンストラクターは以下のとおり。

初期バッファーは先頭アドレスを void \* 型で渡し、そのサイズを size\_t 型で渡す。

## 6.6.3 その他の操作

# release()

```
void release() ;
```

メンバー関数 release は、上流リソースから確保されたストレージをすべて解放する。明示的に deallocate を呼び出していないストレージも解放される。

```
int main()
{
    std::pmr::monotonic_buffer_resource mem ;
    mem.allocate(10);
    // ストレージはすべて解放される
    mem.release();
}
```

# upstream\_resource()

memory\_resource\* upstream\_resource() const;

メンバー関数  $upstream_resource$  は、構築時に与えられた上流メモリーリソースへのポインターを返す。

# 第7章

# 並列アルゴリズム

並列アルゴリズムは C++17 で追加された新しいライブラリだ。このライブラリは 既存の <algorithm> に、並列実行版を追加する。

# **7.1** 並列実行について

C++11 では、スレッドと同期処理が追加され、複数の実行媒体が同時に実行されるという概念が C++ 標準規格に入った。

C++17では、既存のアルゴリズムに、並列実行版が追加された。

たとえば、all\_of(first, last, pred) というアルゴリズムは、[first,last) の 区間が空であるか、すべてのイテレーター i に対して pred(\*i) が true を返すとき、 true を返す。それ以外の場合は false を返す。

すべての値が100未満であるかどうかを調べるには、以下のように書く。

第7章 並列アルゴリズム

```
\mathtt{std}{::}\mathtt{cout} \mathrel{<<} \mathtt{"result} : \mathtt{"} \mathrel{<<} \mathtt{result} \mathrel{<<} \mathtt{std}{::}\mathtt{endl} \ ; }
```

本書の執筆時点では、コンピューターはマルチコアが一般的になり、同時に複数の スレッドを実行できるようになった。さっそくこの処理を2つのスレッドで並列化し てみよう。

```
template < typename Container >
bool double_is_all_of_less_than_100( Container const & input )
{
    auto first = std::begin(input) ;
    auto last = first + (input.size()/2) ;
   auto r1 = std::async( [=]
        return std::all_of( first, last,
                            [](auto x) { return x < 100 ; } );
    });
    first = last ;
    last = std::end(input) ;
    auto r2 = std::async( [=]
        return std::all_of( first, last,
                            [](auto x) { return x < 100 ; } );
    });
    return r1.get() && r2.get() ;
}
```

なるほど、とてもわかりにくいコードだ。

筆者のコンピューターの CPU は 2 つの物理コア、4 つの論理コアを持っているので、4 スレッドまで同時に並列実行できる。読者の使っているコンピューターは、より高性能でさらに多くのスレッドを同時に実行可能だろう。実行時に最大の効率を出すようにできるだけ頑張ってみよう。

```
template < typename Container >
bool parallel_is_all_of_less_than_100( Container const & input )
{
    std::size_t cores = std::thread::hardware_concurrency() ;
```

```
cores = std::min( input.size(), cores ) ;
    std::vector< std::future<bool> > futures( cores ) ;
    auto step = input.size() / cores ;
    auto remainder = input.size() % cores ;
    auto first = std::begin(input) ;
    auto last = first + step + remainder ;
    for ( auto & f : futures )
       f = std::async( [=]
            return std::all_of( first, last,
                                [](auto x){ return x < 100; });
       });
       first = last ;
        last = first + step ;
    for ( auto & f : futures )
        if ( f.get() == false )
            return false ;
    }
    return true ;
}
```

このような並列化をそれぞれのアルゴリズムに対して自前で実装するのは面倒だ。そこで、C++17では標準で並列実行してくれる並列アルゴリズム(Parallelism)が追加された。

# 7.2 使い方

もうわけがわからない。

並列アルゴリズムは既存のアルゴリズムのオーバーロードとして追加されている。 以下は既存のアルゴリズムである all\_of の宣言だ。

#### 第7章 並列アルゴリズム

並列アルゴリズムには、テンプレート仮引数として ExecutionPolicy が追加されていて第一引数に取る。これを実行時ポリシーと呼ぶ。

実行時ポリシーは <execution> で定義されている関数ディスパッチ用のタグ型で、std::execution::seq, std::execution::par\_unseq がある。 複数のスレッドによる並列実行を行うには、std::execution::par を使う。

std::execution::seq を渡すと既存のアルゴリズムと同じシーケンシャル実行になる。std::execution::par を渡すとパラレル実行になる。std::execution::par\_unseq は並列実行かつベクトル実行になる。

C++17には実行ポリシーを受け取るアルゴリズムのオーバーロード関数が追加されている。

# 7.3 並列アルゴリズム詳細

# 7.3.1 並列アルゴリズム

並列アルゴリズム (parallel algorithm) とは、ExecutionPolicy (実行ポリシー) というテンプレートパラメーターのある関数テンプレートのことだ。既存の <algorithm> と C++14 で追加された一部の関数テンプレートが、並列アルゴリズムに対応している。

並列アルゴリズムはイテレーター、仕様上定められた操作、ユーザーの提供する関数オブジェクトによる操作、仕様上定められた関数オブジェクトに対する操作によっ

て、オブジェクトにアクセスする。そのような関数群を、要素アクセス関数 (element access functions) と呼ぶ。

たとえば、std::sort は以下のような要素アクセス関数を持つ。

- テンプレート実引数で与えられたランダムアクセスイテレーター
- 要素に対する swap 関数の適用
- ユーザー提供された Compare 関数オブジェクト

並列アルゴリズムが使う要素アクセス関数は、並列実行に伴うさまざまな制約を満たさなければならない。

## 7.3.2 ユーザー提供する関数オブジェクトの制約

並列アルゴリズムのうち、テンプレートパラメーター名が、Predicate, BinaryPredicate, Compare, UnaryOperation, BinaryOperation, BinaryOperation1, BinaryOperation2 となっているものは、関数オブジェクトとしてユーザーがアルゴリズムに提供するものである。このようなユーザー提供の関数オブジェクトには、並列アルゴリズムに渡す際の制約がある。

- 実引数で与えられたオブジェクトを直接、間接に変更してはならない
- 実引数で与えられたオブジェクトの一意性に依存してはならない
- データ競合と同期

一部の特殊なアルゴリズムには例外もあるが、ほとんどの並列アルゴリズムではこの制約を満たさなければならない。

# 実引数で与えられたオブジェクトを直接、間接に変更してはならない

ユーザー提供の関数オブジェクトは実引数で与えられたオブジェクトを直接、間接 に変更してはならない。

つまり、以下のようなコードは違法だ。

```
int main()
{
    std::vector<int> c = { 1,2,3,4,5 } ;
    std::all_of( std::execution::par, std::begin(c), std::end(c),
        [](auto & x){ ++x ; return true ; } );
    // エラー
}
```

これは、ユーザー提供の関数オブジェクトが実引数を 1value リファレンスで受け取って変更しているので、並列アルゴリズムの制約を満たさない。

第7章 並列アルゴリズム

std::for\_each はイテレーターが変更可能な要素を返す場合、ユーザー提供の関数 オブジェクトが実引数を変更することが可能だ。

```
int main()
{
    std::vector<int> c = { 1,2,3,4,5 } ;
    std::for_each( std::execution::par, std::begin(c), std::end(c),
        [](auto & x){ ++x ; } ) ;
    // OK
}
```

これは、for\_each は仕様上そのように定められているからだ。

# 実引数で与えられたオブジェクトの一意性に依存してはならない

ユーザー提供の関数オブジェクトは実引数で与えられたオブジェクトの一意性に依 存してはならない。

これはどういうことかというと、たとえば実引数で渡されたオブジェクトのアドレスを取得して、そのアドレスがアルゴリズムに渡したオブジェクトのアドレスと同じであることを期待するようなコードを書くことができない。

これはなぜかというと、並列アルゴリズムはその並列処理の一環として、要素のコピーを作成し、そのコピーをユーザー提供の関数オブジェクトに渡すかもしれないからだ。

## // 実装イメージ

```
template < typename ExecutionPolicy,
            typename ForwardIterator,
            typename Predicate >
bool all_of(
                ExecutionPolicy && exec,
                ForwardIterator first, ForwardIterator last,
                Predicate pred )
{
    if constexpr (
        std::is_same_v< ExecutionPolicy,</pre>
                        std::execution::parallel_policy >
    )
    {
        std::vector c( first, last ) ;
        do_all_of_par( std::begin(c), std::end(c), pred ) ;
    }
}
```

このため、オブジェクトの一意性に依存したコードを書くことはできない。

## データ競合と同期

std::execution::sequenced\_policy を渡した並列アルゴリズムによる要素アクセス関数の呼び出しは呼び出し側スレッドで実行される。パラレル実行ではない。

std::execution::parallel\_policy を渡した並列アルゴリズムによる要素アクセス 関数の呼び出しは、呼び出し側スレッドか、ライブラリ側で作られたスレッドのいず れかで実行される。それぞれの要素アクセス関数の呼び出しの同期は定められていない。そのため、要素アクセス関数はデータ競合やデッドロックを起こさないようにしなければならない。

以下のコードはデータ競合が発生するのでエラーとなる。

```
int main()
{
   int sum = 0;
   std::vector<int> c = { 1,2,3,4,5 };
   std::for_each( std::execution::par, std::begin(c), std::end(c),
       [&]( auto x ){ sum += x ; } );
   // エラー、データ競合
}
```

第7章 並列アルゴリズム

なぜならば、ユーザー提供の関数オブジェクトは複数のスレッドから同時に呼び出 されるかもしれないからだ。

std::execution::parallel\_unsequenced\_policy の実行は変わっている。未規定のスレッドから同期されない実行が許されている。これは、パラレルベクトル実行で想定している実行媒体がスレッドのような強い実行保証のある実行媒体ではなく、SIMD や GPGPU のような極めて軽い実行媒体であるからだ。

その結果、要素アクセス関数は通常のデータ競合やデッドロックを防ぐための手段 すら取れなくなる。なぜならば、スレッドは実行の途中に中断して別の処理をしたり するからだ。

たとえば、以下のコードは動かない。

```
int main()
{
    int sum = 0;
    std::mutex m;

    std::vector<int> c = { 1,2,3,4,5 };

    std::for_each(
        std::execution::par_unseq,
        std::begin(c), std::end(c),
        [&]( auto x ) {
            std::scoped_lock l(m);
            sum += x;
        } );
    // エラー
}
```

このコードは parallel\_policy ならば、非効率的ではあるが問題なく同期されて データ競合なく動くコードだ。しかし、parallel\_unsequenced\_policy では動かな い。なぜならば、mutex の lock という同期をする関数を呼び出すからだ。

C++では、ストレージの確保解放以外の同期する標準ライブラリの関数をすべて、ベクトル化非安全(vectorization-unsafe)に分類している。ベクトル化非安全な関数は std::execution::parallel\_unsequenced\_policy の要素アクセス関数内で呼び出すことはできない。

# 7.3.3 例外

並列アルゴリズムの実行中に、一時メモリーの確保が必要になったが確保できない場合、std::bad\_alloc が throw される。

## 7.3 並列アルゴリズム詳細

並列アルゴリズムの実行中に、要素アクセス関数の外に例外が投げられた場合、std::terminate が呼ばれる。

# 7.3.4 実行ポリシー

class sequenced\_policy ;

実行ポリシーはヘッダーファイル <execution> で定義されている。その定義は以下のようになっている。

```
namespace std {
   template<class T> struct is_execution_policy;
   template<class T> inline constexpr bool
       is_execution_policy_v = is_execution_policy<T>::value;
   namespace std::execution {
   class sequenced_policy;
   class parallel_policy;
   class parallel_unsequenced_policy;
   inline constexpr sequenced_policy seq{ };
   inline constexpr parallel_policy par{ };
   inline constexpr parallel_unsequenced_policy par_unseq{ };
   }
is_execution_policy traits
 std::is_execution_policy<T> は T が実行ポリシー型であるかどうかを返す
traits だ。
   // false
   constexpr bool b1 = std::is_execution_policy_v<int> ;
   // true
   constexpr bool b2 =
       std::is_execution_policy_v<std::execution::sequenced_policy> ;
シーケンス実行ポリシー
   namespace std::execution {
```

## 第7章 並列アルゴリズム

```
inline constexpr sequenced_policy seq { } ;
}
```

シーケンス実行ポリシーは、並列アルゴリズムにパラレル実行を行わせないためのポリシーだ。この実行ポリシーが渡された場合、処理は呼び出し元のスレッドだけで行われる。

# パラレル実行ポリシー

```
namespace std::execution {
class parallel_policy ;
inline constexpr parallel_policy par { } ;
}
```

パラレル実行ポリシーは、並列アルゴリズムにパラレル実行を行わせるためのポリシーだ。この実行ポリシーが渡された場合、処理は呼び出し元のスレッドと、ライブラリが作成したスレッドを用いる。

# パラレル非シーケンス実行ポリシー

```
namespace std::execution {
    class parallel_unsequenced_policy ;
    inline constexpr parallel_unsequenced_policy par_unseq { } ;
}
```

パラレル非シーケンス実行ポリシーは、並列アルゴリズムにパラレル実行かつベクトル実行を行わせるためのポリシーだ。この実行ポリシーが渡された場合、処理は複数のスレッドと、SIMD や GPGPU のようなベクトル実行による並列化を行う。

# 実行ポリシーオブジェクト

```
namespace std::execution {
inline constexpr sequenced_policy seq{ };
inline constexpr parallel_policy par{ };
inline constexpr parallel_unsequenced_policy par_unseq{ };
```

# 7.3 並列アルゴリズム詳細

}
実行ポリシーの型を直接書くのは面倒だ。
std::for\_each(std::execution::parallel\_policy{}, ...);
そのため、標準ライブラリは実行ポリシーのオブジェクトを用意している。seq と par と par\_unseq がある。
std::for\_each(std::execution::par, ...);
並列アルゴリズムを使うには、このオブジェクトを並列アルゴリズムの第一引数に 渡すことになる。

## 第8章

## 数学の特殊関数群

C++17 では数学の特殊関数群 (mathematical special functions) がヘッダーファイル <cmath> に追加された。

数学の特殊関数は、いずれも実引数を取って、規定の計算をし、結果を浮動小数点 数型の戻り値として返す。

数学の特殊関数は double, float, long double 型の 3 つのオーバーロードがある。それぞれ、関数名の最後に、何もなし、f, 1 というサフィックスで表現されている。

double function\_name(); // 何もなしfloat function\_namef(); // flong double function\_namel(); // l

数学の特殊関数の説明は、関数の宣言、効果、戻り値、注意がある。

もし、数学の特殊関数に渡した実引数が NaN (Not a Number) である場合、関数の戻り値も NaN になる。ただし定義域エラーは起こらない。

それ以外の場合で、関数が定義域エラーを返すべきときは、

- 関数の戻り値の記述で、定義域が示されていて実引数が示された定義域を超えるとき
- 実引数に対応する数学関数の結果の値が非ゼロの虚数部を含むとき
- 実引数に対応する数学関数の結果の値が数学的に定義されていないとき

別途示されていない場合、関数はすべての有限の値、負の無限大、正の無限大に対しても定義されている。

数学関数が与えられた実引数の値に対して定義されているというとき、それは以下 のいずれかである。

- 実引数の値の集合に対して明示的に定義されている
- 計算方法に依存しない極限値が存在する

第8章 数学の特殊関数群

ある関数の効果が実装定義(implementation-defined)である場合、その効果はC++標準規格で定義されず、C++ 実装はどのように実装してもよいという意味だ。

## 8.1 ラゲール多項式 (Laguerre polynomials)

double laguerre(unsigned n, double x);
float laguerref(unsigned n, float x);
long double laguerrel(unsigned n, long double x);

効果: 実引数 n, x に対するラゲール多項式(Laguerre polynomials)を計算する。 戻り値:

$$\mathsf{L}_n(x) = \frac{e^x}{n!} \frac{\mathsf{d}^n}{\mathsf{d}x^n} (x^n e^{-x}), \quad \text{for } x \ge 0$$

 $n \in n, x \in x \subset t \subset s$ .

注意: n>= 128 のときの関数の呼び出しの効果は実装定義である。

## 8.2 ラゲール陪多項式 (Associated Laguerre polynomials)

```
double assoc_laguerre(unsigned n, unsigned m, double x);
float assoc_laguerref(unsigned n, unsigned m, float x);
long double assoc_laguerrel(unsigned n, unsigned m, long double x);
```

効果: 実引数 n, m, x に対するラゲール陪多項式 (Associated Laguerre polynomials) を計算する。

戻り値:

$$\mathsf{L}_n^m(x) = (-1)^m \frac{\mathsf{d}^m}{\mathsf{d} x^m} \, \mathsf{L}_{n+m}(x), \quad \text{for } x \ge 0$$

 $n \in n, m \in m, x \in x \subset t \subset s$ 

注意: n >= 128 もしくは m >= 128 のときの関数呼び出しの効果は実装定義である。

## 8.3 ルジャンドル多項式 (Legendre polynomials)

```
double legendre(unsigned 1, double x);
float legendref(unsigned 1, float x);
long double legendrel(unsigned 1, long double x);
```

効果: 実引数 1, x に対するルジャンドル多項式 (Legendre polynomials) を計算する。

#### 8.4 ルジャンドル陪関数 (Associated Legendre functions)

戻り値:

$$P_{\ell}(x) = \frac{1}{2^{\ell} \ell!} \frac{d^{\ell}}{dx^{\ell}} (x^2 - 1)^{\ell}, \text{ for } |x| \le 1$$

 $l \in 1, x \in x \subset t \subset s$ 

注意: 1>= 128 のときの関数の呼び出しの効果は実装定義である。

## 8.4 ルジャンドル陪関数 (Associated Legendre functions)

```
double assoc_legendre(unsigned 1, unsigned m, double x);
float assoc_legendref(unsigned 1, unsigned m, float x);
long double assoc_legendrel(unsigned 1, unsigned m, long double x);
```

効果: 実引数 1, m, x に対するルジャンドル陪関数 (Associated Legendre functions) を計算する。

戻り値:

$$\mathsf{P}_{\ell}^{m}(x) = (1 - x^{2})^{m/2} \frac{\mathsf{d}^{m}}{\mathsf{d}x^{m}} \mathsf{P}_{\ell}(x), \quad \text{for } |x| \le 1$$

 $l \in 1, m \in m, x \in x \in S$ 

注意: 1>= 128 のときの関数呼び出しの効果は実装定義である。

# **8.5** 球面ルジャンドル陪関数(Spherical associated Legendre functions)

効果:実引数 1, m, theta (theta の単位はラジアン) に対する球面ルジャンドル陪関数 (Spherical associated Legendre functions) を計算する。

戻り値:

$$\mathsf{Y}^m_\ell(\theta,0)$$

このとき、

$$\mathsf{Y}_{\ell}^{m}(\theta,\phi) = (-1)^{m} \left[ \frac{(2\ell+1)}{4\pi} \frac{(\ell-m)!}{(\ell+m)!} \right]^{1/2} \mathsf{P}_{\ell}^{m}(\cos\theta) e^{im\phi}, \quad \text{for } |m| \le \ell$$

 $l \geq 1, m \geq m, \theta \geq theta \geq t \geq s$ .

注意: 1>= 128 のときの関数の呼び出しの効果は実装定義である。

#### 第8章 数学の特殊関数群

球面調和関数(Spherical harmonics)  $\mathbf{Y}_{\ell}^m(\theta,\phi)$  は、以下のような関数を定義することによって計算できる。

```
#include <cmath>
#include <complex>

std::complex<double>
spherical_harmonics(unsigned 1, unsigned m, double theta, double phi)
{
    return std::sph_legendre(1, m, theta) * std::polar(1.0, m * phi) ;
}
```

ルジャンドル陪関数も参照。

## 8.6 エルミート多項式 (Hermite polynomials)

```
double hermite(unsigned n, double x);
float hermitef(unsigned n, float x);
long double hermitel(unsigned n, long double x);
```

効果:実引数 n, x に対するエルミート多項式(Hermite polynomials)を計算する。 戻り値:

$$H_n(x) = (-1)^n e^{x^2} \frac{d^n}{dx^n} e^{-x^2}$$

 $n \in n, x \in x \in S$ 

注意: n>=128 のときの関数の呼び出しの効果は実装定義である。

#### 8.7 ベータ関数 (Beta function)

```
double beta(double x, double y);
float betaf(float x, float y);
long double betal(long double x, long double y);
```

効果:実引数 x,y に対するベータ関数(Beta function)を計算する。

戻り値:

$$\mathsf{B}(x,y) = \frac{\Gamma(x)\,\Gamma(y)}{\Gamma(x+y)}, \quad \text{for } x > 0, \ y > 0$$

 $x \in \mathbf{x}, y \in \mathbf{y} \ge \mathbf{z}$   $\mathbf{z}$ 

8.8 第1種完全楕円積分 (Complete elliptic integral of the first kind)

# 8.8 第 1 種完全楕円積分(Complete elliptic integral of the first kind)

```
double comp_ellint_1(double k);
float comp_ellint_1f(float k);
long double comp_ellint_11(long double k);
```

効果: 実引数 k に対する第 1 種完全楕円積分 (Complete elliptic integral of the first kind) を計算する。

戻り値:

$$K(k) = F(k, \pi/2), \text{ for } |k| \le 1$$

kをkとする。

第1種不完全楕円積分も参照。

# **8.9** 第 2 種完全楕円積分(Complete elliptic integral of the second kind)

```
double comp_ellint_2(double k);
float comp_ellint_2f(float k);
long double comp_ellint_2l(long double k);
```

効果: 実引数 k に対する第 2 種完全楕円積分 (Complete elliptic integral of the second kind) を計算する。

戻り値:

$$E(k) = E(k, \pi/2), \text{ for } |k| \le 1$$

 $k \in k$ とする。

第2種不完全楕円積分も参照。

# 8.10 第 3 種完全楕円積分(Complete elliptic integral of the third kind)

```
double comp_ellint_3(double k, double nu);
float comp_ellint_3f(float k, float nu);
long double comp_ellint_3l(long double k, long double nu);
```

第8章 数学の特殊関数群

効果: 実引数 k, nu に対する第3種完全楕円積分 (Complete elliptic integral of the third kind) を計算する。

戻り値:

$$\Pi(\nu, k) = \Pi(\nu, k, \pi/2), \text{ for } |k| \le 1$$

 $k \in \mathbf{k}, \nu \in \mathbf{nu} \ \mathsf{Ltd}$ 

第3種不完全楕円積分も参照。

# 8.11 第 1 種不完全楕円積分(Incomplete elliptic integral of the first kind)

double ellint\_1(double k, double phi);
float ellint\_1f(float k, float phi);
long double ellint\_1l(long double k, long double phi);

効果: 実引数 k, phi (phi の単位はラジアン) に対する第 1 種不完全楕円積分 (Incomplete elliptic integral of the first kind) を計算する。

戻り値:

$$\mathsf{F}(k,\phi) = \int_0^\phi \frac{\mathsf{d}\theta}{\sqrt{1 - k^2 \sin^2 \theta}}, \quad \text{for } |k| \le 1$$

# 8.12 第 2 種不完全楕円積分(Incomplete elliptic integroal of the second kind)

double ellint\_2(double k, double phi);
float ellint\_2f(float k, float phi);
long double ellint\_2l(long double k, long double phi);

効果: 実引数 k, phi (phi の単位はラジアン) に対する第2種不完全楕円積分 (Incomplete elliptic integral of the second kind) を計算する。

戻り値:

$$\mathsf{E}(k,\phi) = \int_0^\phi \sqrt{1 - k^2 \sin^2 \theta} \, \mathsf{d}\theta, \quad \text{for } |k| \le 1$$

8.13 第3種不完全楕円積分(Incomplete elliptic integral of the third kind)

# 8.13 第 3 種不完全楕円積分(Incomplete elliptic integral of the third kind)

効果: 実引数 k, nu, phi (phi の単位はラジアン) に対する第3種不完全楕円積分 (Incomplete elliptic integral of the third kind) を計算する。

戻り値:

$$\Pi(\nu, k, \phi) = \int_0^{\phi} \frac{\mathrm{d}\theta}{(1 - \nu \sin^2 \theta) \sqrt{1 - k^2 \sin^2 \theta}}, \quad \text{for } |k| \le 1$$

 $\nu$   $\epsilon$  nu, k  $\epsilon$  k,  $\phi$   $\epsilon$  phi  $\epsilon$  phi  $\epsilon$ 

# 8.14 第1種ベッセル関数 (Cylindrical Bessel functions of the first kind)

double cyl\_bessel\_j(double nu, double x);
float cyl\_bessel\_jf(float nu, float x);
long double cyl\_bessel\_jl(long double nu, long double x);

効果:実引数 nu, k に対する第 1 種ベッセル関数 (Cylindrical Bessel functions of the first kind, Bessel functions of the first kind) を計算する。

戻り値:

$$\mathsf{J}_{\nu}(x) = \sum_{k=0}^{\infty} \frac{(-1)^k (x/2)^{\nu+2k}}{k! \Gamma(\nu+k+1)}, \quad \text{for } x \ge 0$$

 $\nu$   $\varepsilon$  nu, x  $\varepsilon$  x  $\varepsilon$   $\varepsilon$   $\varepsilon$   $\varepsilon$ 

注意: nu >= 128 のときの関数の呼び出しの効果は実装定義である。

## 8.15 ノイマン関数 (Cylindrical Neumann functions)

double cyl\_neumann(double nu, double x);
float cyl\_neumannf(float nu, float x);
long double cyl\_neumannl(long double nu, long double x);

第8章 数学の特殊関数群

効果:実引数 nu, x に対するノイマン関数 (Cylindrical Neumann functions, Neumann functions)、またの名を第2種ベッセル関数 (Cylindrical Bessel functions of the second kind, Bessel functions of the second kind) を計算する。 戻り値:

$$\mathsf{N}_{\nu}(x) = \left\{ \begin{array}{ll} \frac{\mathsf{J}_{\nu}(x)\cos\nu\pi - \mathsf{J}_{-\nu}(x)}{\sin\nu\pi}, & \text{for } x \geq 0 \text{ and non-integral } \nu \\ \\ \lim_{\mu \to \nu} \frac{\mathsf{J}_{\mu}(x)\cos\mu\pi - \mathsf{J}_{-\mu}(x)}{\sin\mu\pi}, & \text{for } x \geq 0 \text{ and integral } \nu \end{array} \right.$$

 $\nu$  e nu. x e x と する。

注意: nu>=128 のときの関数の呼び出しの効果は実装定義である。 第1種ベッセル関数も参照。

# 8.16 第1種変形ベッセル関数(Regular modified cylindrical Bessel functions)

double cyl\_bessel\_i(double nu, double x);
float cyl\_bessel\_if(float nu, float x);
long double cyl\_bessel\_il(long double nu, long double x);

効果:実引数 nu, x に対する第 1 種変形ベッセル関数 (Regular modified cylindrical Bessel functions, Modified Bessel functions of the first kind) を計算する。 戻り値:

$$\mathsf{I}_{\nu}(x) = \mathrm{i}^{-\nu} \mathsf{J}_{\nu}(\mathrm{i} x) = \sum_{k=0}^{\infty} \frac{(x/2)^{\nu+2k}}{k! \, \Gamma(\nu+k+1)}, \quad \text{for } x \ge 0$$

 $\nu$   $\varepsilon$  nu, x  $\varepsilon$  x  $\varepsilon$   $\varepsilon$   $\varepsilon$   $\varepsilon$ 

注意: nu >= 128 のときの関数の呼び出しの効果は実装定義である。 第1種ベッセル関数も参照。

# 8.17 第 2 種変形ベッセル関数(Irregular modified cylindrical Bessel functions)

double cyl\_bessel\_k(double nu, double x);
float cyl\_bessel\_kf(float nu, float x);
long double cyl\_bessel\_kl(long double nu, long double x);

効果: 実引数 nu, x に対する第 2 種変形ベッセル関数 (Irregular modified cylindrical Bessel functions, Modified Bessel functions of the second kind) を計算する。

#### 8.18 第1種球ベッセル関数 (Spherical Bessel functions of the first kind)

#### 戻り値:

$$\begin{split} \mathsf{K}_{\nu}(x) &= (\pi/2)\mathrm{i}^{\nu+1}(\mathsf{J}_{\nu}(\mathrm{i}x) + \mathrm{i}\mathsf{N}_{\nu}(\mathrm{i}x)) \\ &= \left\{ \begin{array}{c} \frac{\pi}{2}\frac{\mathsf{I}_{-\nu}(x) - \mathsf{I}_{\nu}(x)}{\sin\nu\pi}, & \text{for } x \geq 0 \text{ and non-integral } \nu \\ \frac{\pi}{2}\lim_{\mu \to \nu}\frac{\mathsf{I}_{-\mu}(x) - \mathsf{I}_{\mu}(x)}{\sin\mu\pi}, & \text{for } x \geq 0 \text{ and integral } \nu \end{array} \right. \end{split}$$

 $\nu$   $\varepsilon$  nu, x  $\varepsilon$  x  $\varepsilon$   $\varepsilon$   $\varepsilon$   $\varepsilon$ 

注意: nu >= 128 のときの関数の呼び出しの効果は実装定義である。 第1種変形ベッセル関数、第1種ベッセル関数、ノイマン関数も参照。

# 8.18 第1種球ベッセル関数 (Spherical Bessel functions of the first kind)

double sph\_bessel(unsigned n, double x);
float sph\_besself(unsigned n, float x);
long double sph\_bessell(unsigned n, long double x);

効果: 実引数 n, x に対する第 1 種球ベッセル関数 (Spherical Bessel functions of the first kind) を計算する。

#### 戻り値:

$$j_n(x) = (\pi/2x)^{1/2} J_{n+1/2}(x), \text{ for } x \ge 0$$

注意: n >= 128 のときの関数の呼び出しの効果は実装定義である。 第1 種ベッセル関数も参照。

## 8.19 球ノイマン関数 (Spherical Neumann functions)

double sph\_neumann(unsigned n, double x);
float sph\_neumannf(unsigned n, float x);
long double sph\_neumannl(unsigned n, long double x);

効果:実引数 n, x に対する球ノイマン関数 (Spherical Neumann functions)、またの名を第2種球ベッセル関数 (Spherical Bessel functions of the second kind) を計算する。

#### 戻り値:

$$\mathsf{n}_n(x) = (\pi/2x)^{1/2} \mathsf{N}_{n+1/2}(x), \quad \text{for } x \ge 0$$

 $n \in n, x \in x \subset t \subset s$ .

第8章 数学の特殊関数群

注意: n >= 128 のときの関数の呼び出しの効果は実装定義である。 ノイマン関数も参照。

## 8.20 指数積分 (Exponential integral)

double expint(double x);
float expintf(float x);
long double expintl(long double x);

効果:実引数 x に対する指数積分(Exponential integral)を計算する。

戻り値:

$$\mathsf{Ei}(x) = -\int_{-x}^{\infty} \frac{e^{-t}}{t} \, \mathsf{d}t$$

xをxとする。

## 8.21 リーマンゼータ関数 (Riemann zeta function)

double riemann\_zeta(double x);
float riemann\_zetaf(float x);
long double riemann\_zetal(long double x);

効果: 実引数 x に対するリーマンゼータ関数 (Riemann zeta function) を計算する。 戻り値:

$$\zeta(x) = \begin{cases} \sum_{k=1}^{\infty} k^{-x}, & \text{for } x > 1 \\ \frac{1}{1 - 2^{1-x}} \sum_{k=1}^{\infty} (-1)^{k-1} k^{-x}, & \text{for } 0 \le x \le 1 \\ 2^x \pi^{x-1} \sin(\frac{\pi x}{2}) \Gamma(1-x) \zeta(1-x), & \text{for } x < 0 \end{cases}$$

 $x \in \mathbf{x} \ \mathsf{E} \ \mathsf{T} \mathsf{S}$ 

## 第9章

## その他の標準ライブラリ

この章では C++17 で追加された細かいライブラリをまとめて解説する。

#### 9.1 ハードウェア干渉サイズ (キャッシュライン)

C++17 にはハードウェアの干渉サイズを取得するライブラリが入った。ハードウェアの干渉サイズとは、俗にキャッシュライン(cache line)とも呼ばれている概念だ。

残念ながら、この 2017 年では、メモリーは極めて遅い。そのため、プロセッサーはより高速にアクセスできるキャッシュメモリーを用意している。メモリーに対するキャッシュはある程度のまとまったバイト数単位で行われる。この単位が何バイトであるのかは実装依存だ。C++17 にはこのサイズを取得できるライブラリが入った。

ハードウェア干渉サイズを知りたい理由は2つある。2つのオブジェクトを同一の 局所性を持つキャッシュに載せたくない場合と載せたい場合だ。

2つのオブジェクトのうち、一方は頻繁に変更し、もう一方はめったに変更しない場合で、2つのオブジェクトが同じ局所性を持つキャッシュに載っている場合、よく変更するオブジェクトを変更しただけで、めったに変更しないオブジェクトも、メモリーとの同期が発生する。

```
struct Data
{
    int counter;
    int status;
};
```

ここで、counter は頻繁に変更するが、status はめったに変更しない場合、counter と status の間に適切なパディングを挿入することで、2 つのオブジェクトが同じ局所性を持たないようにしたい。

```
この場合には、std::hardware_destructive_interference_size が使える。
  struct Data
      int counter ;
      std::byte padding[
          std::hardware_destructive_interference_size - sizeof(int)
      ];
      int status ;
  } ;
 反対に、2つのオブジェクトを同一の局所性を持つキャッシュに載せたい場合、
\mathtt{std}::hardware_constructive_interference_size が使える。
 ハードウェア干渉サイズは <new> ヘッダーで以下のように定義されている。
  {\tt namespace std}\ \{
      \verb|inline| constexpr size_t|\\
          hardware_destructive_interference_size = 実装依存 ;
      inline constexpr size_t
          hardware_constructive_interference_size = 実装依存 ;
  }
```

## 9.2 std::uncaught\_exceptions

C++14 までは、まだ catch されていない例外がある場合は、bool std:: uncaught\_exception()で判定することができた。

bool std::uncaught\_exception() は、C++17 では非推奨扱いになった。いずれ廃止される見込みだ。

廃止の理由としては、単に以下のような例で役に立たないからだ。

このため、int std::uncaught\_exceptions()が新たに追加された。この関数は現在 catch されていない例外の個数を返す。

```
第9章 その他の標準ライブラリ
```

```
} catch( ... )
}
```

## 9.3 apply: tuple の要素を実引数に関数を呼び出す

```
template <class F, class Tuple>
constexpr decltype(auto) apply(F&& f, Tuple&& t);
```

std::apply は tuple のそれぞれの要素を順番に実引数に渡して関数を呼び出すヘルパー関数だ。

ある要素数 N の tuple t と関数オブジェクト f に対して、apply( f, t ) は、f( get<0>(t), get<1>(t), ... , get<N-1>(t) ) のように f を関数呼び出しする。

例:

```
template < typename ... Types >
void f( Types ... args ) { }

int main()
{
    // int, int, int
    std::tuple t1( 1,2,3 ) ;

    // f( 1, 2, 3 ) の関数呼び出し
    std::apply( f, t1 ) ;

    // int, double, const char *
    std::tuple t2( 123, 4.56, "hello" ) ;

    // f( 123, 4.56, "hello" ) の関数呼び出し
    std::apply( f, t2 ) ;
}
```

9.4 Searcher:検索

## 9.4 Searcher: 検索

C++17 では <functional> に searcher というライブラリが追加された。これは順序のあるオブジェクトの集合に、ある部分集合(パターン)が含まれているかどうかを検索するためのライブラリだ。その最も一般的な応用例は文字列検索となる。

searcher の基本的な設計としては、クラスのオブジェクトを構築して、コンストラクターで検索したい部分集合 (パターン)を与え、operator ()で部分集合が含まれているかを検索したい集合を与える。

この設計のライブラリが追加された理由は、パターンの検索のために何らかの事前 の準備を状態として保持しておきたい検索アルゴリズムを実装するためだ。

#### 9.4.1 default searcher

クラス std::default\_searcher は以下のように宣言されている。

コンストラクターで部分集合を受け取る。operator ()で集合を受け取り、部分集合 (パターン)と一致した場所をイテレーターのペアで返す。見つからない場合、イテレーターのペアは [last, last) になっている。

以下のように使う。

```
int main()
{
    std::string pattern("fox") ;
    std::default_searcher
```

default\_searcher の検索は、内部的に std::search が使われる。

#### 9.4.2 boyer\_moore\_searcher

std::boyer\_moore\_searcher は Boyer-Moore 文字列検索アルゴリズムを使って部分集合の検索を行う。

Boyer-Moore 文字列検索アルゴリズムは極めて効率的な文字列検索のアルゴリズムだ。Boyer-Moore アルゴリズムは Bob Boyer と Strother Moore によって発明され、1977 年の Communications of the ACM で発表された。その内容は以下の URL で読むことができる。

#### http://www.cs.utexas.edu/~moore/publications/fstrpos.pdf

愚直に実装した文字列検索アルゴリズムは検索すべき部分文字列 (パターン)を検索対象の文字列 (コーパス) から探す際、パターンの先頭の文字をコーパスの先頭から順に探していき、見つかれば 2 文字目以降も一致するかどうかを調べる。

Boyer-Moore アルゴリズムはパターンの末尾の文字から調べる。文字が一致しなければ、パターンから絶対に不一致であるとわかっている長さだけの文字を比較せずに読み飛ばす。これによって効率的な文字列検索を実現している。

Boyer-Moore アルゴリズムは事前にパターンのどの文字が不一致ならば何文字比較せずに読み飛ばせるかという情報を計算した2つのテーブルを生成する必要がある。このため、Boyer-Moore アルゴリズムはメモリー使用量と検索前の準備時間というコストがかかる。そのコストは、より効率的な検索により相殺できる。特に、パターンが長い場合は効果的だ。

C++17 に入る Boyer-Moore アルゴリズムに基づく検索は、テンプレートを使った汎用的な char 型のような状態数の少ない型に対しての実装だけではなく、ハッシュを使ったハッシュマップのようなデータ構造を使うことにより、任意の型に対応できる汎用的な設計になっている。

クラス boyer\_moore\_searcher は以下のように宣言されている。

template <

}

#### 9.4 Searcher:検索

```
class RandomAccessIterator1,
       class Hash = hash<</pre>
           typename iterator_traits<RandomAccessIterator1>::value_type>,
       class BinaryPredicate = equal_to<> >
   class boyer_moore_searcher {
   public:
       // コンストラクター
       boyer_moore_searcher(
           RandomAccessIterator1 pat_first,
           RandomAccessIterator1 pat_last,
           Hash hf = Hash(),
           BinaryPredicate pred = BinaryPredicate() ) ;
       // operator ()
       template <class RandomAccessIterator2>
       pair<RandomAccessIterator2, RandomAccessIterator2>
       operator()( RandomAccessIterator2 first,
                   RandomAccessIterator2 last) const;
   } ;
 boyer_moore_searcher は、文字列以外にも適用できる汎用的な設計のため、ハッ
シュ関数を取る。char 型のような取りうる状態数の少ない型以外が渡された場合
は、std::unordered_map のようなメモリー使用量を削減できる何らかのデータ構造
を使ってテーブルを構築する。
 使い方は default_searcher とほとんど変わらない。
   int main()
   {
       std::string pattern("fox") ;
       std::boyer_moore_searcher
           fox_searcher( std::begin(pattern), std::end(pattern) ) ;
       \mathtt{std}::\mathtt{string}\ \mathtt{corpus}\ \mathtt{=}\ \mathtt{"The}\ \mathtt{quick}\ \mathtt{brown}\ \mathtt{fox}\ \mathtt{jumps}\ \mathtt{over}\ \mathtt{the}\ \mathtt{lazy}\ \mathtt{dog}\mathtt{"} ;
       auto[first, last] = fox_searcher( std::begin(corpus),
           std::end(corpus) );
       std::string fox( first, last ) ;
```

#### 9.4.3 boyer\_moore\_horspool\_searcher

std::boyer\_moore\_horspool\_searcher は Boyer-Moore-Horspool 検索アルゴリズムを使って部分集合の検索を行う。Boyer-Moore-Horspool アルゴリズムは Nigel Horspool によって 1980 年に発表された。

参考: "Practical fast searching in strings" 1980

Boyer-Moore-Horspool アルゴリズムは内部テーブルに使うメモリー使用量を削減しているが、最悪計算量の点でオリジナルの Boyer-Moore アルゴリズムには劣っている。つまり、実行時間の増大を犠牲にしてメモリー使用量を削減したトレードオフなアルゴリズムと言える。

クラス boyer\_moore\_horspool\_searcher の宣言は以下のとおり。

```
template <
     class RandomAccessIterator1,
     class Hash = hash<</pre>
         typename iterator_traits<RandomAccessIterator1>::value_type>,
     class BinaryPredicate = equal_to<> >
 class boyer_moore_horspool_searcher {
 public:
     // コンストラクター
     boyer_moore_horspool_searcher(
         RandomAccessIterator1 pat_first,
         RandomAccessIterator1 pat_last,
         Hash hf = Hash(),
         BinaryPredicate pred = BinaryPredicate() );
     // operator ()
     template <class RandomAccessIterator2>
     pair<RandomAccessIterator2, RandomAccessIterator2>
     operator()( RandomAccessIterator2 first,
                 RandomAccessIterator2 last) const;
 } ;
使い方は boyer_moore_horspool_searcher と変わらない。
 int main()
 {
     std::string pattern("fox") ;
     std::boyer_moore_horspool_searcher
         fox_searcher( std::begin(pattern), std::end(pattern) );
```

#### **9.5** sample: 乱択アルゴリズム

C++17 で <algorithm> に追加された std::sample は、標本を確率的に選択するための乱択アルゴリズムだ。

[first, last] は標本を選択する先の集合を指すイテレーター。out は標本を出力する先のイテレーター。n は選択する標本の個数。g は標本を選択するのに使う乱数生成器。戻り値は out。

ある要素の集合から、n個の要素を確率的に公平に選択したい場合に使うことができる。

#### 9.5.1 乱択アルゴリズム

std::sample を使う前に、まず正しい乱択アルゴリズムについて学ぶ必要がある。 乱択アルゴリズムについて詳しくは、Donald E. Knuth の *The Art of Computer Programming* (以下 TAOCP、邦訳はアスキードワンゴから同名の書名で出版されている)を参照。

ユーザーからの入力、計測した気象情報のデータ、サーバーへのアクセスログなど、世の中には膨大な量のデータが存在する。これらの膨大なデータをすべて処理するのではなく、標本を採取することによって、統計的にそれなりに信頼できる確率で正しい全体のデータを推定することができる。そのためにはn 個の標本をバイアスがかからない方法で選択する必要がある。バイアスのかからない方法でn 個の標本を取り出すには、集合の先頭からn 個とか、1 つおきにn 個といった方法で選択して

はならない。それはバイアスがかかっている。

ある値の集合から、バイアスのかかっていない n 個の標本を得るには、集合のすべての値が等しい確率で選ばれた上で n 個を選択しなければならない。いったいどうすればいいのだろうか。

std::sample を使えば、100 個の値から 10 個の標本を得るのは、以下のように書くことが可能だ。

```
int main()
    // 100 個の値の集合
   std::vector<int> pop(100) ;
   std::iota( std::begin(pop), std::end(pop), 0 );
    // 標本を格納するコンテナー
    std::vector<int> out(10) ;
    // 乱数生成器
    std::array<std::uint32_t, sizeof(std::knuth_b)/4> a ;
   std::random_device r ;
    std::generate( std::begin(a), std::end(a), [&]{ return r() ; } );
    std::seed_seq seed( std::begin(a), std::end(a) ) ;
    std::knuth_b g( seed ) ;
    // 10 個の標本を得る
   sample( std::begin(pop), std::end(pop), std::begin(out), 10, g );
    // 標本を出力
    std::copy( std::begin(out), std::end(out),
               std::ostream_iterator<int>(std::cout, ", ") );
}
```

集合に含まれる値の数が N 個だとわかっているならば、それぞれの値について n/m の確率で選ぶというのはどうだろうか。 100 個中 10 個を選ぶのであれば、1/10 の確率でそれぞれの値を標本として選択することになる。

この考えに基づく乱択アルゴリズムは以下のようになる。

- 1. 集合の要素数を N、選択すべき標本の数を n, i を 0 とする。
- 2. 0 ベースインデックスで i 番目の値を n/m の確率で標本として選択する。
- $3. i & \text{ELYD} \\ \text{ELYD}$
- 4. i! = N  $\text{$\sharp$ coto $2$.}$

9.5 sample: 乱択アルゴリズム

このアルゴリズムをコードで書くと以下のようになる。

```
template < class PopulationIterator, class SampleIterator,</pre>
           class Distance, class UniformRandomBitGenerator >
SampleIterator sample(
    PopulationIterator first, PopulationIterator last,
    SampleIterator out,
    Distance n, UniformRandomBitGenerator&& g)
    auto N = std::distance( first, last ) ;
    // 確率 n/N で true を返すベルヌーイ分布
    double probability = double(n)/double(N);
    std::bernoulli_distribution d( probability ) ;
    // それぞれの値に対して
    std::for_each( first, last,
        [&] ( auto && value )
           if ( d(g) )
            {// n/N の確率で標本として選択する
               *out = value ;
               ++out ;
       });
    return out ;
}
```

残念ながらこのアルゴリズムは正しく動かない。この例では、100 個の値の集合から 10 個の標本を選択したい。しかし、選ばれる標本の数はプログラムの実行ごとに異なる。このアルゴリズムは、標本の数が平均的に 10 個選ばれることが期待できるが、運が悪いと 0 個や 100 個の標本が選ばれてしまう可能性がある。

ちなみに、TAOCP Vol. 2 によれば、このとき選ばれる標本数の標準偏差は  $\sqrt{n(1-n/N)}$  になる。

正しいアルゴリズムは、要素の集合のうちの (t+1) 番目の要素は、すでに m 個の要素が標本として選ばれたとき、(n-m)(N-t) の確率で選ぶものだ。

#### 9.5.2 アルゴリズム S: 選択標本、要素数がわかっている集合からの標本の選択

Knuth の TAOCP Vol. 2 では、アルゴリズム S と称して、要素数のわかっている 集合から標本を選択する方法を解説している。

アルゴリズムSは以下のとおり。

 $0 < n \le N$  のとき、N 個の集合から n 個の標本をランダムに選択する。

- 1. t, m を 0 とする。t はこれまでに処理した要素数、m は標本として選択した要素数とする。
- 2.  $0 \le U \le N t$  の範囲の乱数 U を生成する。
- 3.  $U \ge n m$  であれば goto 5.
- 4. 次の要素を標本として選択する。m と t をインクリメントする。m < n であれば、goto 2。 そうでなければ標本は完了したのでアルゴリズムは終了する。
- 5. 次の要素を標本として選択しない。tをインクリメントする。goto 2。

実装は以下のようになる。

```
template < class PopulationIterator, class SampleIterator,</pre>
            class Distance, class UniformRandomBitGenerator >
{\tt SampleIterator}
sample_s(
   PopulationIterator first, PopulationIterator last,
   SampleIterator out,
   Distance n, UniformRandomBitGenerator&& g)
   // 1.
   Distance t = 0;
   Distance m = 0;
   const auto N = std::distance( first, last ) ;
   auto r = [\&]{
        std::uniform_int_distribution<> d(0, N-t) ;
        return d(g);
   while ( m < n && first != last )
        // 2. 3.
        if (r() >= n - m)
        {// 5.
```

9.5 sample: 乱択アルゴリズム

#### 9.5.3 アルゴリズム R: 保管標本、要素数がわからない集合からの標本の選択

アルゴリズム S は集合の要素数が N 個であるとわかっている場合に、n 個の標本を選択するアルゴリズムだ。では、もし N がわからない場合はどうすればいいのだろうか。

現実にはNがわからない状況がよくある。

- ユーザーからの入力
- シーケンシャルアクセスしか提供しておらず全部読み込まなければ要素数のわからないテープデバイスからの入力
- ガイガーカウンターからの入力

このような要素数のわからない入力にアルゴリズムSを適用するには、まず一度全部入力を得て、全体の要素数を確定させた上で、全要素に対してアルゴリズムSを適用させるという2段階の方法を使うことができる。

しかし、1 段階の要素の巡回だけで済ませたい。要素数のわからない入力を処理して、その時点で公平に選択された標本を得たい。

アルゴリズム R はそのような状況で使えるアルゴリズムだ。

アルゴリズム R では、要素数のわからない要素の集合からn 個の標本を選択する。そのために標本として選択した要素を保管しておき、新しい入力が与えられるたびに、標本として選択するかどうかの判断をし、選択をするのであれば、保管しておいた既存の標本と置き換える。

アルゴリズム R. は以下のとおり(このアルゴリズムは Knuth 本とは違う)。

n>0 のとき、 $size\geq n$  である未確定の size 個の要素数を持つ入力から、n 個の標本をランダムに選択する。標本の候補は n 個まで保管される。 $1\leq j\leq n$  のとき I[j] は保管された標本を指す。

- 1. 入力から最初の n 個を標本として選択し、保管する。 $1 \leq j \leq n$  の範囲で I[j] に j 番目の標本を保管する。t の値を n とする。 $I[1],\ldots,I[n]$  は現在の標本を指す。t は現在処理した入力の個数を指す。
- 2. 入力の終わりであればアルゴリズムを終了する。
- 3. t をインクリメントする。 $1 \leq M \leq t$  の範囲の乱数 M を生成する。M > n ならば goto 5。
- 4. 次の入力を I[M] に保管する。goto 2。
- 5. 次の入力を保管しない。goto 2。

実装は以下のようになる。

```
template < class PopulationIterator, class SampleIterator,</pre>
            class Distance, class UniformRandomBitGenerator >
SampleIterator sample_r(
   PopulationIterator first, PopulationIterator last,
   SampleIterator out,
   Distance n, UniformRandomBitGenerator&& g)
   Distance t = 0;
   auto result = out ;
   for ( ; (first != last) && (t != n) ; ++first, ++t, ++result )
       out[t] = *first ;
   if ( t != n )
       return result ;
   auto I = [&](Distance j) -> decltype(auto) { return out[j-1] ; } ;
   while ( first != last )
       ++t ;
       std::uniform_int_distribution<Distance> d( 1, t ) ;
       auto M = d(g);
```

9.5 sample: 乱択アルゴリズム

```
if ( M > n )
{
          ++first;
}
else {
          I(M) = *first;
          ++first;
}
return result;
}
```

#### 9.5.4 C++ ∅ sample

ここまで説明したように、乱択アルゴリズムには 2 種類ある。入力の要素数がわかっている場合のアルゴリズム S (選択標本) と、入力の要素数がわからない場合のアルゴリズム R (保管標本) だ。

しかし、C++ に追加された乱択アルゴリズムの関数テンプレートの宣言は、はじめに説明したように以下の1つしかない。並列アルゴリズムには対応していない。

#### template<

```
class PopulationIterator, class SampleIterator,
    class Distance, class UniformRandomBitGenerator >
SampleIterator
sample(
    PopulationIterator first, PopulationIterator last,
    SampleIterator out,
    Distance n, UniformRandomBitGenerator&& g);
```

[first, last] は標本を選択する先の集合を指すイテレーター。out は標本を出力する先のイテレーター。n は選択する標本の個数。g は標本を選択するのに使う乱数生成器。戻り値は out。

sample は PopulationIterator と SampleIterator のイテレーターカテゴリーによって、どちらのアルゴリズムを使うべきか判断している。

アルゴリズム S (選択標本) を使う場合、PopulationIterator は前方イテレーター、SampleIterator は出力イテレーターを満たさなければならない。

アルゴリズム R (保管標本) を使う場合、PopulationIterator は入力イテレーター、SampleIterator はランダムアクセスイテレーターを満たさなければならない。

これはどういうことかというと、要素数の取得のためには、入力元の

PopulationIterator [first, last) から要素数を得る必要があり、そのためには PopulationIterator は前方イテレーターを満たしていなければならない。その場合、選択した標本はそのままイテレーターに出力すればいいので、出力先のSampleIterator は出力イテレーターを満たすだけでよい。

もし入力元の PopulationIterator が入力イテレーターしか満たさない場合、この場合は PopulationIterator の [first, last) から要素数を得ることができないので、要素数がわからないときに使えるアルゴリズム R (保管標本)を選択せざるを得ない。その場合、入力を処理するに連れて、新たに選択した標本が既存の標本を上書きするので、出力先の SampleIterator はランダムアクセスイテレーターである必要がある。

```
int main()
   std::vector<int> input ;
   std::knuth_b g ;
   // PopulationIterator は前方イテレーターを満たす
   // SampleIterator は出力イテレーターでよい
   std::sample(
                  std::begin(input), std::end(input),
                  std::ostream_iterator<int>(std::cout), 100
                  g ) ;
   std::vector<int> sample(100) ;
   // PopulationIterator は入力イテレーターしか満たさない
   // SampleIterator にはランダムアクセスイテレーターが必要
   std::sample(
       std::istream_iterator<int>(std::cin),
       std::istream_iterator<int>{},
       std::begin(sample), 100, g );
}
```

注意が必要なこととして、C++ の sample は入力元の PopulationIterator が前方 イテレーター以上を満たす場合は、必ずアルゴリズム S (選択標本)を使うということだ。これはつまり、要素数を得るために std::distance(first, last) が行われるということを意味する。もしこの処理が非効率的なイテレーターを渡した場合、必要以上に非効率的なコードになってしまう。

たとえば以下のコードは、

9.5 sample: 乱択アルゴリズム

```
int main()
      std::list<int> input(10000) ;
      std::list<int> sample(100) ;
      std::knuth_b g ;
      std::sample(
                     std::begin(input), std::end(input),
                     std::begin(sample), 100, g );
   }
以下のような意味を持つ。
   int main()
      std::list<int> input(10000) ;
      std::list<int> sample(100) ;
      std::knuth_b g ;
      std::size_t count = 0 ;
      // 要素数の得るためにイテレーターを回す
      // 非効率的
      for( auto && e : input )
      { ++count ; }
      // 標本の選択のためにイテレーターを回す
      for ( auto && e : input )
      {/* 標本の選択 */}
   }
```

std::list のメンバー関数 size は定数時間であることが保証されているため、このコードにおけるイテレーターを回すループは1回に抑えられる。しかし、std::sampleは要素数を渡す実引数がないために要素数がイテレーターを全走査しなくてもわかっている場合でも、非効率的な処理を行わなければならない。

もしランダムアクセスイテレーター未満、前方イテレーター以上のイテレーターカテゴリーのイテレーターの範囲から標本を選択したい場合で、イテレーターの範囲の指す要素数があらかじめわかっている場合は、自前でアルゴリズム S を実装したほうが効率がよい。

```
SampleIterator
sample_s(
   PopulationIterator first, PopulationIterator last,
   Distance size,
   SampleIterator out,
   Distance n, UniformRandomBitGenerator&& g)
    // 1.
   Distance t = 0;
    Distance m = 0;
    const auto N = size ;
    auto r = [&]{
        std::uniform_int_distribution<> d(0, N-t) ;
        return d(g);
   } ;
    while ( m < n && first != last )
        // 2. 3.
        if (r() >= n - m)
        {// 5.
            ++t ;
            ++first ;
        else { // 4.
           *out = *first ;
           ++first ; ++out ;
            ++m ; ++t ;
        }
   }
   return out ;
}
```

## 9.6 shared\_ptr<T[]>: 配列に対する shared\_ptr

```
C++17 では、shared_ptr が配列に対応した。
int main()
```

9.7 as\_const: const 性の付与

```
{
    // 配列対応の shared_ptr
    std::shared_ptr< int [] > ptr( new int[5] );

    // operator [] で配列に添字アクセスできる
    ptr[0] = 42;

    // shared_ptr のデストラクターが delete[] を呼び出す
}
```

## 9.7 as\_const: const 性の付与

as\_const はヘッダーファイル <utility> で定義されている。

```
template <class T> constexpr add_const_t<T>& as_const(T& t) noexcept
{
    return t;
}
```

as\_const は引数として渡した lvalue リファレンスを const な lvalue リファレンスにキャストする関数だ。const 性を付与する手軽なヘルパー関数として使うことができる。

```
// 1
template < typename T >
void f(T & ) {}
// 2、こちらを呼び出したい
template < typename T >
void f(T const & ) { }
int main()
{
   int x{};
   f(x); // 1
   // const を付与する冗長な方法
   int const & ref = x;
   f(ref); // 2
```

```
// 簡潔
f(std::as_const(x)); // 2
}
```

# **9.8** make\_from\_tuple: tuple の要素を実引数にコンストラクターを呼び出す

make\_from\_tuple はヘッダーファイル <tuple> で定義されている。

```
template <class T, class Tuple>
constexpr T make_from_tuple(Tuple&& t);
```

apply は tuple の要素を実引数に関数を呼び出すライブラリだが、make\_from\_tuple は tuple の要素を実引数にコンストラクターを呼び出すライブラリだ。

ある型 T と要素数 N の tuple t に対して、make\_from\_tuple<T>(t) は、T 型を T(get<0>(t), get<1>(t), ..., get<N-1>(t)) のように構築して、構築した T 型 のオブジェクトを返す。

```
class X
{
    template < typename ... Types >
    T( Types ... ) { }
};
int main()
{
    // int, int, int
    std::tuple t1(1,2,3);

    // X(1,2,3)
    X x1 = std::make_from_tuple<X>( t1 )

    // int, double, const char *
    std::tuple t2( 123, 4.56, "hello" );

    // X(123, 4.56, "hello")
    X x2 = std::make_from_tuple<X>( t2 );
}
```

9.9 invoke: 指定した関数を指定した実引数で呼び出す

## 9.9 invoke: 指定した関数を指定した実引数で呼び出す

invoke はヘッダーファイル <functional> で定義されている。

```
template <class F, class... Args>
invoke_result_t<F, Args...> invoke(F&& f, Args&&... args)
noexcept(is_nothrow_invocable_v<F, Args...>);
```

invoke(f, t1, t2, ..., tN) は、関数 f を f(a1,a2,...,aN) のように呼び出す。

より正確には、C++ 標準規格の INVOKE(f, t1, t2, ..., tN) と同じ規則で呼び出す。これにはさまざまな規則があり、たとえばメンバー関数へのポインターやデータメンバーへのポインター、またその場合に与えるクラスへのオブジェクトがリファレンスかポインターか reference\_wrapper かによっても異なる。その詳細はここでは解説しない。

INVOKE は std::function や std::bind でも使われている規則なので、標準ライブラリと同じ挙動ができるようになると覚えておけばよい。

#### 例:

```
void f( int ) { }

struct S
{
    void f( int );
    int data;
};

int main()
{
    // f( 1 )
    std::invoke( f, 1 );

S s;

    // (s.*&S::f)(1)
    std::invoke( &S::f, s, 1 );
    // ((*&s).*&S::f)(1)
    std::invoke( &S::f, &s, 1 );
```

```
// s.*&S::data
    std::invoke( &S::data, s ) ;
}
```

## **9.10** not\_fn: 戻り値の否定ラッパー

not\_fn はヘッダーファイル <functional> で定義されている。

template <class F> unspecified not\_fn(F&& f);

関数オブジェクト f に対して  $not_fn(f)$  を呼び出すと、戻り値として何らかの関数 オブジェクトが返ってくる。その関数オブジェクトを呼び出すと、実引数を f に渡して f を関数呼び出しして、戻り値を operator ! で否定して返す。

```
int main()
{
    auto r1 = std::not_fn( []{ return true ; } ) ;
    r1() ; // false
    auto r2 = std::not_fn( []( bool b ) { return b ; } ) ;
    r2(true) ; // false
}
```

すでに廃止予定になった not1, not2 の代替品。

## 9.11 メモリー管理アルゴリズム

C++17 ではヘッダーファイル <memory> にメモリー管理用のアルゴリズムが追加された。

#### 9.11.1 addressof

template <class T> constexpr T\* addressof(T& r) noexcept;

addressof は C++17 以前からもある。addressof(r) は r のポインターを取得する。たとえ、r の型が operator &をオーバーロードしていても正しいポインターを取

#### 9.11 メモリー管理アルゴリズム

#### 9.11.2 uninitialized\_default\_construct

```
template <class ForwardIterator>
void uninitialized_default_construct(
    ForwardIterator first, ForwardIterator last);

template <class ForwardIterator, class Size>
ForwardIterator uninitialized_default_construct_n(
    ForwardIterator first, Size n);
```

[first, last] の範囲、もしくは first から n 個の範囲の未初期化のメモリーを typename iterator\_traits<ForwardIterator>::value\_type でデフォルト初期化する。2 つ目のアルゴリズムは first から n 個をデフォルト初期化する。

```
int main()
{
    std::shared_ptr<void> raw_ptr
    ( ::operator new( sizeof(std::string) * 10 ),
        [](void * ptr){ ::operator delete(ptr) ; } );

std::string * ptr = static_cast<std::string *>( raw_ptr.get() );
```

```
第9章 その他の標準ライブラリ
```

```
std::uninitialized_default_construct_n( ptr, 10 );
std::destroy_n( ptr, 10 );
}
```

#### 9.11.3 uninitialized\_value\_construct

```
template <class ForwardIterator>
void uninitialized_value_construct(
    ForwardIterator first, ForwardIterator last);

template <class ForwardIterator, class Size>
ForwardIterator uninitialized_value_construct_n(
    ForwardIterator first, Size n);
```

使い方は uninitialized\_default\_construct と同じ。ただし、こちらはデフォルト初期化ではなく値初期化する。

#### 9.11.4 uninitialized\_copy

```
template <class InputIterator, class ForwardIterator>
   ForwardIterator
   uninitialized_copy( InputIterator first, InputIterator last,
                      ForwardIterator result);
   template <class InputIterator, class Size, class ForwardIterator>
   ForwardIterator
   uninitialized_copy_n( InputIterator first, Size n,
                         ForwardIterator result);
  [first, last] の範囲、もしくは first から n 個の範囲の値を、result の指す未
初期化のメモリーにコピー構築する。
   int main()
   {
      std::vector<std::string> input(10, "hello") ;
       std::shared_ptr<void> raw_ptr
          ::operator new( sizeof(std::string) * 10 ),
           [](void * ptr){ ::operator delete(ptr) ; } );
       std::string * ptr = static_cast<std::string *>( raw_ptr.get() ) ;
```

```
std::uninitialized_copy_n( std::begin(input), 10, ptr );
std::destroy_n( ptr, 10 );
}
```

#### 9.11.5 uninitialized\_move

使い方はuninitialized\_copyと同じ。ただしこちらはコピーではなくムーブする。

#### 9.11.6 uninitialized\_fill

```
template <class ForwardIterator, class T>
void uninitialized_fill(
    ForwardIterator first, ForwardIterator last,
    const T& x);

template <class ForwardIterator, class Size, class T>
ForwardIterator uninitialized_fill_n(
    ForwardIterator first, Size n,
    const T& x);
```

[first, last] の範囲、もしくは first から n 個の範囲の未初期化のメモリーを、コンストラクターに実引数 x を与えて構築する。

## **9.11.7 destroy**

```
template <class T>
void destroy_at(T* location);
location->-T() を呼び出す。
```

```
template <class ForwardIterator>
void destroy(ForwardIterator first, ForwardIterator last);

template <class ForwardIterator, class Size>
ForwardIterator destroy_n(ForwardIterator first, Size n);

[first, last) の範囲、もしくは first から n 個の範囲に destroy_at を呼び出す。
```

## 9.12 shared\_ptr::weak\_type

C++17 では shared\_ptr に weak\_type というネストされた型名が追加された。これは shared\_ptr に対する weak\_ptr の typedef 名となっている。

### 9.13 **void\_t**

ヘッダーファイル <type\_traits> で定義されている void\_t は以下のように定義されている。

```
namespace std {
template < class ... >
using void_t = void;
}
```

void\_t は任意個の型をテンプレート実引数として受け取る void 型だ。この性質はテンプレートメタプログラミングにおいてとても便利なので、標準ライブラリに追加された。

### 9.14 bool\_constant

ヘッダーファイル <type\_traits> に bool\_constant が追加された。

```
template <bool B>
using bool_constant = integral_constant<bool, B>;
using true_type = bool_constant<true>;
using false_type = bool_constant<false>;
```

今まで integral\_constant を使っていた場面で特に bool だけが必要な場面では、 C++17 以降は単に std::true\_type か std::false\_type と書くだけでよくなる。

### 9.15 type\_traits

C++17 では <type\_traits> に機能追加が行われた。

#### **9.15.1** 変数テンプレート版 traits

C++17 では、既存の traits に変数テンプレートを利用した \_v 版が追加された。 たとえば、is\_integral<T>::value と書く代わりに is\_integral\_v<T> と書くことができる。

```
template < typename T >
void f(Tx)
{
    constexpr bool b1 = std::is_integral<T>::value ; // データメンバー
    constexpr bool b2 = std::is_integral_v<T> ; // 変数テンプレート
    constexpr bool b3 = std::is_integral<T>{} ; // operator bool()
}
```

### 9.15.2 論理演算 traits

C++17 ではクラステンプレート conjunction, disjunction, negation が追加された。これはテンプレートメタプログラミングで論理積、論理和、否定を手軽に扱うための traits だ。

#### conjunction: 論理積

template<class... B> struct conjunction;

クラステンプレート conjunction<B1, B2, ..., BN> はテンプレート実引数 B1, B2, ..., BN に論理積を適用する。conjunction はそれぞれのテンプレート実引数 Bi に対して、bool(Bi::value) が false となる最初の型を基本クラスに持つか、あるいは最後の BN を基本クラスに持つ。

```
int main()
{
    using namespace std;

    // is_void<void>を基本クラスに持つ
    using t1 =
        conjunction<
            is_same<int, int>, is_integral<int>,
            is_void<void> >;

    // is_integral<double>を基本クラスに持つ
    using t2 =
        conjunction<
            is_same<int, int>, is_integral<double>,
            is_same<int, int>, is_integral<double>,
            is_void<void> >;
}
```

### disjunction: 論理和

template<class... B> struct disjunction;

クラステンプレート disjunction<B1, B2, ..., BN>はテンプレート実引数 B1, B2, ..., BN に論理和を適用する。disjunction はそれぞれのテンプレート実引数 Bi に対して、bool(Bi::value) が true となる最初の型を基本クラスに持つか、あるいは最後の BN を基本クラスに持つ。

```
int main()
{
    using namespace std;

// is_same<int,int>を基本クラスに持つ
    using t1 =
        disjunction<
            is_same<int, int>, is_integral<int>,
            is_void<void> >;

// is_void<int>を基本クラスに持つ
    using t2 =
        disjunction<
            is_same<int, double>, is_integral<double>,
            is_void<int> >;
}
```

### negation: 否定

template<class B> struct negation;

クラステンプレート negation<B> は B に否定を適用する。negation は基本クラスとして bool\_constant<!bool(B::value)> を持つ。

```
int main()
{
    using namespace std ;

    // false
    constexpr bool b1 = negation< true_type >::value ;
    // true
    constexpr bool b2 = negation< false_type >::value ;
}
```

#### 9.15.3 is\_invocable: 呼び出し可能か確認する traits

```
template <class Fn, class... ArgTypes>
struct is_invocable;

template <class R, class Fn, class... ArgTypes>
struct is_invocable_r;

template <class Fn, class... ArgTypes>
struct is_nothrow_invocable;

template <class R, class Fn, class... ArgTypes>
struct is_nothrow_invocable_r;
```

is\_invocable はテンプレート実引数で与えられた型 Fn がパラメーターパック ArgTypes をパック展開した結果を実引数に関数呼び出しできるかどうか、そしてその戻り値は R へ暗黙変換できるかどうかを確認する traits だ。呼び出せるのであれば true\_type、そうでなければ false\_type を基本クラスに持つ。

is\_invocable は関数呼び出しした結果の戻り値の型については問わない。

is\_invocable\_r は呼び出し可能性に加えて、関数呼び出しした結果の戻り値の型が R へ暗黙変換できることが確認される。

is\_nothrow\_invocable と is\_nothrow\_invocable\_r は、関数呼び出し(および戻り 値型 R への暗黙変換)が無例外保証されていることも確認する。

```
int f( int, double ) ;
int main()
{
    // true
    constexpr bool b1 =
        std::is_invocable< decltype(&f), int, double >{} ;
    // true
    constexpr bool b2 =
        std::is_invocable< decltype(&f), int, int >{} ;

    // false
    constexpr bool b3 =
        std::is_invocable< decltype(&f), int >{} ;

    // false
    constexpr bool b4 =
```

```
std::is_invocable< decltype(&f), int, std::string >{};

// true
constexpr bool b5 =
    std::is_invocable_r< int, decltype(&f), int, double >{};

// false
constexpr bool b6 =
    std::is_invocable_r< double, decltype(&f), int, double >{};
}
```

# **9.15.4** has\_unique\_object\_representations: 同値の内部表現が同一か確認する traits

```
template <class T>
struct has_unique_object_representations ;
```

has\_unique\_object\_representations<T> は、T 型がトリビアルにコピー可能で、かつ T 型の同値である 2 つのオブジェクトの内部表現が同じ場合に、true を返す。

false を返す例としては、オブジェクトがパディング(padding)と呼ばれるアライメント調整などのための値の表現に影響しないストレージ領域を持つ場合だ。パディングビットの値は同値に影響しないので、false を返す。

たとえば以下のようなクラスXは、

```
struct X
{
    std::uint8_t a ;
    std::uint32_t b ;
} ;
```

ある実装においては、4 バイトにアライメントする必要があり、そのオブジェクトの本当のレイアウトは以下のようになっているかもしれない。

```
struct X
{
    std::uint8_t a ;
    std::byte unused_padding[3] ;
    std::uint32_t b ;
} ;
```

この場合、unused\_padding の値には意味がなく、クラス X の同値比較には用いられない。この場合、std::has\_unique\_representations\_v<X> は false になる。

#### 9.15.5 is\_nothrow\_swappable: 無例外 swap 可能か確認する traits

```
template <class T>
struct is_nothrow_swappable;

template <class T, class U>
struct is_nothrow_swappable_with;
```

is\_nothrow\_swappable<T> は T 型が swap で例外を投げないときに true を返す。 is\_nothrow\_swappable\_with<T, U> は、T 型と U 型を相互に swap するときに例外を投げないときに true を返す。

### 9.16 コンテナーで不完全型のサポート

注意:この説明は上級者向けだ。

C++17 では以下のコードが合法になった。このコードの挙動は C++14 までは実装依存であった。

```
struct X
{
    std::vector<X> v ;
    std::list<X> l ;
    std::forward_list<X> f ;
} ;
```

クラスはクラス定義の終了である } を持って完全型となる。クラススコープに注入されたクラス名は、クラス定義の中ではまだ完全型ではない。不完全型をコンテナーの要素型に指定した場合の挙動は、C++14までは規定されていなかった。

C++17 では、vector, list, forward\_list に限り、要素型に一時的に不完全型を許すようになった。実際にコンテナーを使う際には完全型になっていなければならない。

#### 9.17 emplace の戻り値

C++17 ではシーケンスコンテナーの emplace\_front/emplace\_back, queue と stack の emplace が構築した要素へのリファレンスを返すように変更された。

```
そのため、C++14では以下のように書いていたコードが、
int main()
{
    std::vector<int> v;
    v.emplace_back(0); // void
    int value = v.back();
}
以下のように書けるようになった。
int main()
{
    std::vector<int> v;
    int value = v.emplace_back(0);
}
```

### 9.18 map と unordered\_map の変更

map と unordered\_map に、try\_emplace と insert\_or\_assign という 2 つのメンバー 関数が入った。このメンバー関数は multi\_map と unordered\_multi\_map には追加されていない。

### 9.18.1 try\_emplace

```
template <class... Args>
pair<iterator, bool>
try_emplace(const key_type& k, Args&&... args);

template <class... Args>
iterator
try_emplace(
    const_iterator hint,
    const key_type& k, Args&&... args);
```

従来の emplace は、キーに対応する要素が存在しない場合、要素が args から emplace 構築されて追加される。もし、キーに対応する要素が存在する場合、要素は 追加されない。要素が追加されないとき、args がムーブされるかどうかは実装定義

```
第9章 その他の標準ライブラリ
である。
  int main()
      std::map< int, std::unique_ptr<int> > m ;
      // すでに要素が存在する
     m[0] = nullptr ;
      auto ptr = std::make_unique<int>(0) ;
      // emplace は失敗する
      auto [iter, is_emplaced] = m.emplace( 0, std::move(ptr) ) ;
      // 結果は実装により異なる
      // ptr はムーブされているかもしれない
     bool b = ( ptr != nullptr ) ;
  }
 この場合、実際に map に要素は追加されていないのに、ptr はムーブされてしまう
かもしれない。
 このため、C++17では、要素が追加されなかった場合 args はムーブされないこ
とが保証される try_emplace が追加された。
  int main()
  {
      std::map< int, std::unique_ptr<int> > m ;
      // すでに要素が存在する
      m[0] = nullptr ;
      auto ptr = std::make_unique<int>(0) ;
      // emplace は失敗する
      auto [iter, is_emplaced] = m.emplace( 0, std::move(ptr) ) ;
      // true であることが保証される
      // ptr はムーブされていない
      bool b = ( ptr != nullptr ) ;
```

### 9.18.2 insert\_or\_assign

}

```
template <class M>
pair<iterator, bool>
insert_or_assign(const key_type& k, M&& obj);

template <class M>
iterator
insert_or_assign(
    const_iterator hint,
    const key_type& k, M&& obj);
```

insert\_or\_assign は key に連想された要素が存在する場合は要素を代入し、存在しない場合は要素を追加する。operator [] との違いは、要素が代入されたか追加されたかが、戻り値の pair の bool でわかるということだ。

```
int main()
{
    std::map< int, int > m;
    m[0] = 0;

{
        // 代入
        // is_inserted は false
        auto [iter, is_inserted] = m.insert_or_assign(0, 1);
}

{
        // 追加
        // is_inserted は true
        auto [iter, is_inserted] = m.insert_or_assign(1, 1);
}
```

### **9.19** 連想コンテナーへの splice 操作

C++17 では、連想コンテナーと非順序連想コンテナーで splice 操作がサポート された。

対象のコンテナーは map, set, multimap, multiset, unordered\_map, unordered\_set, unordered\_multimap, unordered\_multiset だ。

splice 操作とは list で提供されている操作で、アロケーター互換の list のオブ

ジェクトの要素をストレージと所有権ごと別のオブジェクトに移動する機能だ。

```
int main()
{
    std::list<int> a = {1,2,3} ;
    std::list<int> b = {4,5,6} ;

    a.splice( std::end(a), b, std::begin(b) ) ;

    // a は{1,2,3,4}
    // b は{5,6}

    b.splice( std::end(b), a ) ;

    // a は{}
    // b は{5,6,1,2,3,4}
}
```

連想コンテナーでは、ノードハンドルという仕組みを用いて、コンテナーのオブジェクトから要素の所有権をコンテナーの外に出す仕組みで、splice 操作を行う。

### 9.19.1 merge

すべての連想コンテナーと非順序連想コンテナーは、メンバー関数 merge を持っている。コンテナー a, b がアロケーター互換のとき、a.merge(b) は、コンテナー b の要素の所有権をすべてコンテナー a に移す。

```
int main()
{
    std::set<int> a = {1,2,3};
    std::set<int> b = {4,5,6};

    // bの要素をすべてaに移す
    a.merge(b);

    // aは{1,2,3,4,5,6}
    // bは{}
}
```

もし、キーの重複を許さないコンテナーの場合で、値が重複した場合、重複した要素は移動しない。

### 9.19 連想コンテナーへの splice 操作

```
int main()
{
    std::set<int> a = {1,2,3} ;
    std::set<int> b = {1,2,3,4,5,6} ;

    a.merge(b) ;

    // a は{1,2,3,4,5,6}
    // b は{1,2,3}
}
```

merge によって移動された要素を指すポインターとイテレーターは、要素の移動後も妥当である。ただし、所属するコンテナーのオブジェクトが変わる。

```
int main()
{
    std::set<int> a = {1,2,3};
    std::set<int> b = {4,5,6};

    auto iterator = std::begin(b);
    auto pointer = &*iterator;
    a.merge(b);

    // iterator と pointer はまだ妥当
    // ただし要素は a に所属する
}
```

#### 9.19.2 ノードハンドル

ノードハンドルとは、コンテナーオブジェクトから要素を構築したストレージの所 有権を切り離す機能だ。

ノードハンドルの型は、各コンテナーのネストされた型名 node\_type となる。たとえば std::set<int> のノードハンドル型は、std::set<int>::node\_type となる。 ノードハンドルは以下のようなメンバーを持っている。

```
class node_handle
{
public :
```

```
// ネストされた型名
    using value_type = ... ;
                               // set 限定、要素型
    using key_type = ...;
                                // map 限定、キー型
    using mapped_type = ...;
                               // map 限定、マップ型
    using allocator_type = ...;
                               // アロケーターの型
    // デフォルトコンストラクター
    // ムーブコンストラクター
    // ムーブ代入演算子
    // 値へのアクセス
    value_type & value() const ; // set 限定
    key_type & key() const ;
                              // map 限定
    mapped_type & mapped() const ; // map 限定
    // アロケーターへのアクセス
    allocator_type get_allocator() const ;
    // 空かどうかの判定
    explicit operator bool() const noexcept ;
    bool empty() const noexcept ;
    void swap( node_handle & ) ;
 };
set のノードハンドルはメンバー関数 value で値を得る。
 int main()
    std::set<int> c = {1,2,3} ;
    auto n = c.extract(2) ;
    // n.value() == 2
    // cは{1,3}
 }
map のノードハンドルはメンバー関数 key と mapped でそれぞれの値を得る。
 int main()
 {
```

### 9.19 連想コンテナーへの splice 操作

ノードハンドルはノードをコンテナーから切り離し、所有権を得る。そのため、 ノードハンドルによって得たノードは、元のコンテナーから独立し、元のコンテナー オブジェクトの破棄の際にも破棄されない。ノードハンドルのオブジェクトの破棄時 に破棄される。このため、ノードハンドルはアロケーターのコピーも持つ。

```
int main()
{
    std::set<int>::node_type n;

    {
        std::set<int> c = { 1,2,3 };
        // 所有権の移動
        n = c.extract(std::begin(c));
        // c が破棄される
    }

    // OK
    // ノードハンドルによって所有権が移動しているint x = n.value();
    // n が破棄される
}
```

### **9.19.3 extract**: ノードハンドルの取得

```
node_type extract( const_iterator position ) ;
node_type extract( const key_type & x ) ;
```

連想コンテナーと非順序連想コンテナーのメンバー関数 extract は、ノードハンドルを取得するためのメンバー関数だ。

メンバー関数 extract(position) は、イテレーターの position が指す要素を、コンテナーから除去して、その要素を所有するノードハンドルを返す。

```
int main()
{
    std::set<int> c = {1,2,3} ;
    auto n1 = c.extract( std::begin(c) ) ;

// c は{2,3}
    auto n2 = c.extract( std::begin(c) ) ;

// c は{3}
}
```

メンバー関数 extract(x) は、キーx がコンテナーに存在する場合、その要素をコンテナーから除去して、その要素を所有するノードハンドルを返す。存在しない場合、空のノードハンドルを返す。

```
int main()
{
    std::set<int> c = {1,2,3} ;
    auto n1 = c.extract( 1 ) ;
    // cは{2,3}
    auto n2 = c.extract( 2 ) ;
    // cは{3}
    // キー4は存在しない
    auto n3 = c.extract( 4 ) ;
    // cは{3}
    // n3.empty() == true
}
```

キーの重複を許すコンテナーの場合、複数あるうちの1つの所有権が解放される。

int main()

### 9.19 連想コンテナーへの splice 操作

```
{
      std::multiset<int> c = \{1,1,1\};
      auto n = c.extract(1) ;
      // cは{1,1}
  }
9.19.4 insert: ノードハンドルから要素の追加
  // キーの重複を許さないコンテナーの場合
  insert_return_type insert(node_type&& nh);
  // キーの重複を許すmulti コンテナーの場合
  iterator insert(node_type&& nh);
  // ヒント付きの insert
  iterator
                   insert(const_iterator hint, node_type&& nh);
 ノードハンドルをコンテナーのメンバー関数 insert の実引数に渡すと、ノードハ
ンドルから所有権をコンテナーに移動する。
  int main()
      std::set<int> a = {1,2,3} ;
      std::set<int> b = {4,5,6} ;
      auto n = a.extract(1) ;
      b.insert( std::move(n) ) ;
      // n.empty() == true
 ノードハンドルが空の場合、何も起こらない。
  int main()
      std::set<int> c ;
      std::set<int>::node_type n ;
      // 何も起こらない
      c.insert( std::move(n) ) ;
  }
```

キーの重複を許さないコンテナーに、すでにコンテナーに存在するキーと等しい値を所有するノードハンドルを insert しようとすると、insert は失敗する。

```
int main()
{
    std::set<int> c = {1,2,3} ;
    auto n = c.extract(1) ;
    c.insert( 1 ) ;

    // 失敗する
    c.insert( std::move(n) ) ;
}
```

第一引数にイテレーター hint を受け取る insert の挙動は、従来の insert と同じだ。要素が hint の直前に追加されるのであれば償却定数時間で処理が終わる。

ノードハンドルを実引数に受け取る insert の戻り値の型は、キーの重複を許す multi コンテナーの場合 iterator。キーの重複を許さないコンテナーの場合、insert\_return\_type となる。

multi コンテナーの場合、戻り値は追加した要素を指すイテレーターとなる。

```
int main()
{
    std::multiset<int> c { 1,2,3 } ;
    auto n = c.extract( 1 ) ;
    auto iter = c.insert( n ) ;
    // cは{1,2,3}
    // iterは1を指す
}
```

キーの重複を許さないコンテナーの場合、コンテナーにネストされた型名 insert\_return\_type が戻り値の型となる。たとえば set<int>の場合、set<int>::insert\_return\_type となる。

insert\_return\_type の具体的な名前は規格上規定されていない。insert\_return\_typeは以下のようなデータメンバーを持つ型となっている。

```
struct insert_return_type
{
```

```
iterator position ;
bool inserted ;
node_type node ;
};
```

position は insert によってコンテナーに所有権を移動して追加された要素を指すイテレーター、inserted は要素の追加が行われた場合に true となる bool, node は要素の追加が失敗したときにノードハンドルの所有権が移動されるノードハンドルとなる。

insert に渡したノードハンドルが空のとき、inserted は false, position は end(), node は空になる。

```
int main()
{
    std::set<int> c = {1,2,3} ;
    std::set<int>::node_type n ; // 空

    auto [position, inserted, node] = c.insert( std::move(n) ) ;

    // inserted == false
    // position == c.end()
    // node.empty() == true
}
```

insert が成功したとき、inserted は true, position は追加された要素を指し、node は空になる。

```
int main()
{
    std::set<int> c = {1,2,3} ;
    auto n = c.extract(1) ;

    auto [position, inserted, node] = c.insert( std::move(n) ) ;

    // inserted == true
    // position == c.find(1)
    // node.empty() == true
}
```

insert が失敗したとき、つまりすでに同一のキーがコンテナーに存在したとき、inserted は false, node は insert を呼び出す前のノードハンドルの値、position は

コンテナーの中の追加しようとしたキーに等しい要素を指す。insert に渡したノードハンドルは未規定の値になる。

```
int main()
{
    std::set<int> c = {1,2,3} ;
    auto n = c.extract(1) ;
    c.insert(1) ;

auto [position, inserted, node] = c.insert( std::move(n) ) ;

// n は未規定の値
    // inserted == false
    // node は insert( std::move(n) ) を呼び出す前の n の値
    // position == c.find(1)
}
```

規格はこの場合の $\mathbf n$ の値について規定していないが、最もありうる実装としては、 $\mathbf n$  は  $\mathbf n$  de にムーブされるので、 $\mathbf n$  は空になり、ムーブ後の状態になる。

### 9.19.5 ノードハンドルの利用例

ノードハンドルの典型的な使い方は以下のとおり。

### ストレージの再確保なしに、コンテナーの一部の要素だけ別のコンテナーに移す

```
int main()
{
    std::set<int> a = {1,2,3} ;
    std::set<int> b = {4,5,6} ;

    auto n = a.extract(1) ;
    b.insert( std::move(n) ) ;
}
```

### コンテナーの寿命を超えて要素を存続させる

```
int main()
{
    std::set<int>::node_type n ;
```

```
{
    std::set<int> c = {1,2,3} ;
    n = c.extract(1) ;
    // c が破棄される
}

// コンテナーの破棄後も存続する
int value = n.value() ;
}
```

#### map のキーを変更する

map ではキーは変更できない。キーを変更したければ、元の要素は削除して、新しい要素を追加する必要がある。これには動的なストレージの解放と確保が必要になる。

ノードハンドルを使えば、既存の要素のストレージに対して、所有権を map から引き剥がした上で、キーを変更して、もう一度 map に差し戻すことができる。

### 9.20 コンテナーアクセス関数

ヘッダーファイル <iterator> に、コンテナーアクセス関数として、フリー関数版 の size, empty, data が追加された。それぞれ、メンバー関数の size, empty, data を

```
第9章 その他の標準ライブラリ
```

```
呼び出す。
int main()
{
    std::vector<int> v;
    std::size(v); // v.size()
    std::empty(v); // v.empty()
    std::data(v); // v.data()
}

このフリー関数は配列や std::initializer_list<T> にも使える。
int main()
{
    int a[10];
    std::size(a); // 10
    std::empty(a); // 常にfalse
    std::data(a); // a
}
```

### 9.21 clamp

```
template<class T>
constexpr const T&
clamp(const T& v, const T& lo, const T& hi);
template<class T, class Compare>
constexpr const T&
clamp(const T& v, const T& lo, const T& hi, Compare comp);

ヘッダーファイル <algorithm> に追加された clamp(v, lo, hi) は値 v が lo より
小さい場合は lo を、hi より高い場合は hi を、それ以外の場合は v を返す。

int main()
{
    std::clamp( 5, 0, 10 ) ; // 5
    std::clamp( -5, 0, 10 ) ; // 0
    std::clamp( 50, 0, 10 ) ; // 10
}
```

comp を実引数に取る clamp は comp を値の比較に使う clamp には浮動小数点数も使えるが、NaN は渡せない。

### 9.22 3 次元 hypot

```
float hypot(float x, float y, float z);
double hypot(double x, double y, double z);
long double hypot(long double x, long double y, long double z);
```

ヘッダーファイル <cmath> に3次元の hypot が追加された。

戻り値:

$$\sqrt{x^2 + y^2 + z^2}$$

### 9.23 atomic<T>::is\_always\_lock\_free

```
template < typename T >
struct atomic
{
    static constexpr bool is_always_lock_free = ...;
};
```

C++17 で <atomic> に追加された atomic<T>::is\_always\_lock\_free は、atomic<T> の実装がすべての実行においてロックフリーであるとコンパイル時に保証できる場合、true になる static constexpr な bool 型のデータメンバーだ。

atomic には、他にも bool を返すメンバー関数 is\_lock\_free があるが、これは実行時にロックフリーであるかどうかを判定できる。is\_always\_lock\_free はコンパイル時にロックフリーであるかどうかを判定できる。

### 9.24 scoped\_lock:可变長引数 lock\_guard

```
std::scoped_lock クラス <T ...> は可変長引数版の lock_guard だ。
int main()
{
   std::mutex a, b, c, d;
```

std::scoped\_lock のコンストラクターは複数のロックのオブジェクトのリファレンスを取り、それぞれにデッドロックを起こさない方法でメンバー関数 lock を呼び出す。デストラクターはメンバー関数 unlock を呼び出す。

### 9.25 std::byte

C++17 ではバイトを表現する型として std::byte がライブラリに追加された。これは、コア言語の一部であり、別項で詳しく解説を行っている。

### 9.26 最大公約数(gcd)と最小公倍数(Icm)

C++17 ではヘッダーファイル <numeric> に最大公約数 (gcd) と最小公倍数 (1cm) が追加された。

### 9.26.1 gcd: 最大公約数

```
template <class M, class N>
constexpr std::common_type_t<M,N> gcd(M m, N n)
{
```

### 9.26 最大公約数 (gcd) と最小公倍数 (lcm)

```
if ( n == 0 )
    return m ;
else
    return gcd( n, std::abs(m) % std::abs(n) ) ;
}
```

 $\gcd(m, n)$  は m と n がともにゼロの場合ゼロを返す。それ以外の場合、|m| と |n| の最大公約数(Greatest Common Divisor)を返す。

#### 9.26.2 lcm: 最小公倍数

```
template <class M, class N>
constexpr std::common_type_t<M,N> lcm(M m, N n)
{
   if ( m == 0 || n == 0 )
      return 0 ;
   else
      return std::abs(m) / gcd( m, n ) * std::abs(n) ;
}
```

lcm(m,n) は、m と n のどちらかがゼロの場合ゼロを返す。それ以外の場合、|m| と |n| の最小公倍数(Least Common Multiple)を返す。

### 第10章

## ファイルシステム

ヘッダーファイル <filesystem> で定義されている標準ライブラリのファイルシステムは、ファイルやディレクトリーとその属性を扱うためのライブラリだ。

一般に「ファイルシステム」といった場合、たとえば Linux の ext4, Microsoft Windows の FAT や NTFS, Apple Mac の HFS+ や APFS といったファイルとそ の属性を表現するためのストレージ上のデータ構造を意味する。 $C_{++}$  の標準ライブ ラリのファイルシステムとは、そのようなファイルシステムを実現するデータ構造を 操作するライブラリではない。ファイルシステムというデータ構造で抽象化された、ファイルやディレクトリーとその属性、それに付随する要素、たとえばパスやファイルやディレクトリーを操作するためのライブラリのことだ。

また、ファイルシステムライブラリでは、「ファイル」という用語は単に通常のファイルのみならず、ディレクトリー、シンボリックリンク、FIFO(名前付きパイプ)、ソケットなどの特殊なファイルも含む。

本書ではファイルシステムライブラリのすべてを詳細に解説していない。ファイルシステムライブラリは量が膨大なので、特定の関数の意味については、C++ コンパイラーに付属のリファレンスマニュアルなどを参照するとよい。

### 10.1 名前空間

ファイルシステムライブラリは std:filesystem 名前空間スコープの下に宣言されている。

```
int main()
{
    std::filesystem::path p("/bin") ;
}
```

第 10 章 ファイルシステム

この名前空間は長いので、ファイルシステムライブラリを使うときは、関数のブロックスコープ単位で using ディレクティブを使うか、名前空間エイリアスを使って短い別名を付けるとよい。

```
void using_directive()
{
    // using ディレクティブ
    using namespace std::filesystem;

path p("/etc");
}

void namespace_alias()
{
    // 名前空間エイリアス
    namespace fs = std::filesystem;

fs::path p("/usr");
}
```

#### 10.2 POSIX 準拠

C++ のファイルシステムのファイル操作の挙動は、POSIX 規格に従う。実装によっては POSIX に規定された挙動を提供できない場合もある。その場合は制限の範囲内で、できるだけ POSIX に近い挙動を行う。実装がどのような意味のある挙動も提供できない場合、エラーが通知される。

### 10.3 ファイルシステムの全体像

ファイルシステムライブラリの全体像を簡単に箇条書きすると以下のとおり。

- クラス path でファイルパス文字列を扱う
- 例外クラス filesystem\_error とクラス error\_code でエラー通知
- クラス file\_status でファイルの情報とパーミッションの取得、設定
- クラス directory\_entry でディレクトリーの情報の取得、設定
- クラス directory\_iterator でディレクトリー構造をイテレーターとしてた どる
- 多数のフリー関数でファイルとディレクトリーの操作

### 10.4 エラー処理

ファイルシステムライブラリでエラーが発生した場合、エラーの通知方法には2種類の方法がある。例外を使う方法と、ヘッダーファイル <system\_error> で定義されているエラー通知用のクラス std::error\_code へのリファレンスを実引数として渡してエラー内容を受け取る方法だ。

エラー処理の方法は、エラーの起こる期待度によって選択できる。一般に、エラーがめったに起こらない場合、エラーが起こるのは予期していない場合、エラー処理には例外を使ったほうがよい。エラーが頻繁に起こる場合、エラーが起こることが予期できる場合、エラー処理には例外を使わないほうがよい。

#### 10.4.1 例外

ファイルシステムライブラリの関数のうち、std::error\_code & 型を実引数に取らない関数は、以下のようにエラー通知を行う。

- OS によるファイルシステム操作においてエラーが発生した場合、std::filesystem::filesystem\_error 型の例外が throw される。1 つのpath を実引数に取る関数の場合、filesystem\_error のメンバー関数 path1で実引数の path が得られる。2 つの path を実引数に取る関数の場合、filesystem\_errorのメンバー関数 path1, path2で第一、第二引数がそれぞれ得られる。filesystem\_errorはエラー内容に応じた error\_codeを持つ
- ストレージの確保に失敗した場合、既存の例外による通知が行われる
- デストラクターは例外を投げない

例外を使ったエラー処理は以下のとおり。

```
int main()
{
    using namespace std::filesystem;

try {
        // ファイル名から同じファイル名へのコピーによるエラー
        path file("foobar.txt");
        std::ofstream{ file };
        copy_file( file, file );

} catch( filesystem_error & e )
{ // エラーの場合
```

#### 第 10 章 ファイルシステム

```
auto path1 = e.path1(); // 第一引数
         auto path2 = e.path2(); // 第二引数
         auto error_code = e.code() ; // error_code
         std::cout
            << "error number: " << error_code.value ()
            << "\nerror message: " << error_code.message()</pre>
            << "\npath1: " << path1
            << "\npath2: " << path2 << '\n' ;
     }
 }
filesystem_error は以下のようなクラスになっている。
 namespace std::filesystem {
     class filesystem_error : public system_error {
     public:
         // 第一引数
         const path& path1() const noexcept;
         // 第二引数
         const path& path2() const noexcept;
         // エラー内容を人間が読める null 終端文字列で返す
         const char* what() const noexcept override;
     };
 }
```

### 10.4.2 非例外

ファイルシステムライブラリの関数のうち、std::error\_code & 型を実引数に取る 関数は、以下のようにエラー通知を行う。

• OSによるファイルシステム操作においてエラーが発生した場合、error\_code &型の実引数がエラー内容に応じて設定される。エラーがない場合、error\_code &型の実引数に対してメンバー関数 clear() が呼ばれる。

```
int main()
{
    using namespace std::filesystem ;

// ファイル名から同じファイル名へのコピーによるエラー
path file("foobar.txt") ;
```

#### 10.5 path:ファイルパス文字列クラス

```
std::ofstream{ file };
std::error_code error_code;
copy_file( file, file, error_code );

if ( error_code )
{ // エラーの場合
    auto path1 = file ; // 第一引数
    auto path2 = file ; // 第二引数

std::cout
    << "error number: " << error_code.value ()
    << "\nerror message: " << error_code.message()
    << "\npath1: " << path1
    << "\npath2: " << path2 << '\n';
}
}
```

### **10.5** path: ファイルパス文字列クラス

std::filesystem::path はファイルパスを文字列で表現するためのクラスだ。文字列を表現するクラスとして C++ にはすでに std::string があるが、ファイルパスという文字列を表現するために、別の専用クラスが作られた。

クラス path は以下の機能を提供する。

- ファイルパス文字列の表現
- ファイルパス文字列の操作

path はファイルパス文字列の表現と操作だけを提供するクラスで、物理ファイルシステムへの変更のコミットはしない。

ファイルパス文字列がどのように表現されているかは実装により異なる。POSIX 環境では文字型を char 型として UTF-8 エンコードで表現する OS が多いが、Microsoft Windows では本書執筆現在、文字型を wchar\_t として UTF-16 エンコードで表現する慣習になっている。

また、OS によってはラテンアルファベットの大文字小文字を区別しなかったり、区別はするが無視されたりする実装もある。

クラス path はそのようなファイルパス文字列の差異を吸収してくれる。 クラス path には以下のようなネストされた型名がある。

namespace std::filesystem {

#### 第 10 章 ファイルシステム

```
class path {
  public:
    using value_type = see below;
    using string_type = basic_string<value_type>;
    static constexpr value_type preferred_separator = see below;
};
```

value\_type と string\_type は path が内部でファイルパス文字列を表現するのに使う文字と文字列の型だ。preferred\_separator は、推奨されるディレクトリー区切り文字だ。たとえば POSIX 互換環境では / が用いられるが、Microsoft Windows では \ が使われている。

#### 10.5.1 path: ファイルパスの文字列

ファイルパスは文字列で表現する。C++ の文字列のエンコードには以下のものがある。

- char: ネイティブナローエンコード
- wchar\_t: ネイティブワイドエンコード
- char: UTF-8 エンコード
- char16\_t: UTF-16 エンコード
- char32\_t: UTF-32 エンコード

path::value\_type がどの文字型を使い、どの文字列エンコードを使っているかは 実装依存だ。path はどの文字列エンコードが渡されても、path::value\_type の文字 型と文字エンコードになるように自動的に変換が行われる。

```
int main()
{
    using namespace std::filesystem;

    // ネイティブナローエンコード
    path p1( "/dev/null" );
    // ネイティブワイドエンコード
    path p2( L"/dev/null" );
    // UTF-16 エンコード
    path p3( u"/dev/null" );
    // UTF-32 エンコード
    path p4( U"/dev/null" );
}
```

#### 10.5 path: ファイルパス文字列クラス

なので、どの文字列エンコードで渡しても動く。

C++ では UTF-8 エンコードの文字型は char で、これはネイティブナローエンコードの文字型と同じなので、型システムによって区別できない。そのため、UTF-8 文字列リテラルを渡すと、ネイティブナローエンコードとして認識される。

```
int main()
{
    using namespace std::filesystem;

// ネイティブナローエンコードとして解釈される
    path p( u8"ファイル名" );
}
```

このコードは、ネイティブナローエンコードが UTF-8 ではない場合、動く保証のない移植性の低いコードだ。UTF-8 エンコードを移植性の高い方法でファイルパスとして使いたい場合、u8path を使うとよい。

```
int main()
{
    using namespace std::filesystem;

// UTF-8 エンコードとして解釈される
    // 実装の使う文字エンコードに変換される
    path = u8path( u8"ファイル名" );
}
```

u8path(Source) は Source を UTF-8 エンコードされた文字列として扱うので、通常の文字列リテラルを渡すと、ネイティブナローエンコードが UTF-8 ではない環境では問題になる。

```
int main()
{
    using namespace std::filesystem;

// UTF-8 エンコードとして解釈される
    // ネイティブナローエンコードが UTF-8 ではない場合、問題になる
    path = u8path( "ファイル名" );
}
```

u8path を使う場合は、文字列は必ず UTF-8 エンコードしなければならない。

#### 第 10 章 ファイルシステム

環境によっては、ファイルパスに使える文字に制限があり、また特定の文字列は特別な意味を持つ予約語になっていることもあるので、移植性の高いプログラムの作成に当たってはこの点でも注意が必要だ。たとえば、環境によっては大文字小文字の区別をしないかもしれない。また、CON や AUX のような文字列が特別な意味を持つかもしれない。

path に格納されているファイルパス文字列を取得する方法は、環境依存の文字列 エンコードとファイルパスの表現方法の差異により、さまざまな方法が用意されて いる。

ファイルパス文字列のフォーマットには以下の2つがある。

- ネイティブ: 実装依存のフォーマット
- ジェネリック:汎用的な標準のフォーマット

POSIX 準拠の環境においては、ネイティブとジェネリックはまったく同じだ。 POSIX 準拠ではない環境では、ネイティブとジェネリックは異なるフォーマットを 持つ可能性がある。

たとえば、Microsoft Windows では、ネイティブのファイルパス文字列はディレクトリーの区切り文字に POSIX 準拠の / ではなく \ を使っている。

まずメンバー関数 native と c\_str がある。

これはクラス path が内部で使っている実装依存のネイティブな文字列型をそのまま返すものだ。

```
int main()
{
    using namespace std::filesystem;

path p = current_path();

// 実装依存の basic_string の特殊化
path::string_type str = p.native();

// 実装依存の文字型
```

### 10.5 path:ファイルパス文字列クラス

```
path::value_type const * ptr = p.c_str() ;
  }
 このメンバー関数を使うコードは移植性に注意が必要だ。
 str の型は path::string_type で、ptr の型は実装依存の path::value_type const
* だ。path::value_type と path::string_type は、char や wchar_t, std::string
や std::wstring のような C++ が標準で定義する型ではない可能性がある。
 そして、path::string_type への変換関数 operator string_type() がある。
  int main()
      using namespace std::experimental::filesystem ;
      auto p = current_path() ;
      // 暗黙の型変換
      path::string_type str = p ;
  }
 path の operator string_type() は、ネイティブの文字列型を既存のファイルス
トリームライブラリでオープンできる形式に変換して返す。たとえば空白文字を含
むファイルパスのために、二重引用符で囲まれている文字列に変換されるかもしれ
ない。
   int main()
      using namespace std::filesystem;
      path name("foo bar.txt") ;
      std::basic_ofstream<path::value_type> file( name ) ;
      file << "hello" ;</pre>
 ネイティブのファイルパス文字列を string, wstring, u16string, u32string に変
換して取得するメンバー関数に以下のものがある。
  class path {
  public :
      std::string string() const;
      std::wstring wstring() const;
      std::string u8string() const;
```

#### 第 10 章 ファイルシステム

```
std::u16string u16string() const;
std::u32string u32string() const;
};

このうち、メンバー関数 string はネイティブナローエンコードされた std::string,
メンバー関数 u8string は UTF-8 エンコードされた std::string を返す。

int main()
{
    using namespace std::filesystem;

path name("hello.txt");
std::ofstream file( name.string() );
file << "hello";
}

ファイルパス文字列をジェネリックに変換して返す generic_string() 系のメンバー関数がある。
```

class path {
public :
 std::string generic\_string() const;
 std::wstring generic\_wstring() const;
 std::string generic\_u8string() const;
 std::u16string generic\_u16string() const;
 std::u32string generic\_u32string() const
} ;

使い方はネイティブな文字列を返す string()系のメンバー関数と同じだ。 ファイルパスの文字列の文字型と文字列エンコードは環境ごとに異なるので、移植

性の高いコードを書くときには注意が必要だ。

現実的には、モダンな POSIX 準拠の環境では、文字型は char, 文字列型は std::string, エンコードは UTF-8 になる。

Microsoft Windows の Win32 サブシステムと MSVC は POSIX 準拠ではなく、本書執筆時点では、歴史的経緯により、文字型は wchar\_t, 文字列型は std::wstring, エンコードは UTF-16 となっている。

#### 10.5.2 ファイルパスの操作

クラス path はファイルパス文字列の操作を提供している。std::string とは違い、find や substr のような操作は提供していないが、ファイルパス文字列に特化した操

### 10.5 path: ファイルパス文字列クラス

```
作を提供している。
 operator /, operator /= はセパレーターで区切ったファイルパス文字列の追加を
行う。
   int main()
  {
      using namespace std::filesystem ;
      path p("/") ;
      // "/usr"
      p /= "usr" ;
      // "/usr/local/include"
      p = p / "local" / "include" ;
 operator += は単なる文字列の結合を行う。
  int main()
      using namespace std::filesystem;
      path p("/") ;
      // "/usr"
      p += "usr" ;
      // "/usrlocal"
      p += "local" ;
      // "/usrlocalinclude"
      p += "include" ;
  }
 operator / と違い、operator + は存在しない。
 その他にも、path はさまざまなファイルパス文字列に対する操作を提供している。
以下はその一例だ。
  int main()
  {
      using namespace std::filesystem ;
      path p( "/home/cpp/src/main.cpp" ) ;
```

#### 第 10 章 ファイルシステム

```
// "main.cpp"
path filename = p.filename();
// "main"
path stem = p.stem();
// ".cpp"
path extension = p.extension();
// "/home/cpp/src/main.o"
p.replace_extension("o");
// "/home/cpp/src/"
p.remove_filename();
}
```

path はファイルパス文字列に対してよく行う文字列処理を提供している。たとえばファイル名だけ抜き出す処理、拡張子だけ抜き出す処理、拡張子を変える処理などだ。

### 10.6 file\_status

クラス file\_status はファイルのタイプとパーミッションを保持するクラスだ。 ファイルのタイプとパーミッションはファイルパス文字列を指定して取得する方 法が別途あるが、その方法では毎回物理ファイルシステムへのアクセスが発生する。 file\_status はファイルのタイプとパーミッション情報を保持するクラスとして、い わばキャッシュの役割を果たす。

file\_status は物理ファイルシステムへの変更のコミットはしない。

file\_status クラスは status(path) もしくは status(path, error\_code) で取得できる。あるいは、directory\_entry のメンバー関数 status() から取得できる。

タイプというのは、ファイルが種類を表す enum 型 file\_type で、通常のファイルやディレクトリーやシンボリックリンクといったファイルの種類を表す。

パーミッションというのは、ファイルの権限を表すビットマスクの enum 型 perms で、ファイルの所有者とグループと他人に対する読み込み、書き込み、実行のそれぞれの権限を表している。この値は POSIX の値と同じになっている。

ファイルのタイプとパーミッションを取得するメンバー関数は以下のとおり。

```
class file_type {
public :
    file_type type() const noexcept;
    perms permissions() const noexcept;
};
```

```
以下のように使う。
 int main()
 {
     using namespace std::filesystem;
     directory_iterator iter("."), end ;
     int regular_files = 0 ;
     int execs = 0;
     std::for_each( iter, end, [&]( auto entry )
         auto file_status = entry.status() ;
         // is_regular_file( file_status )でも可
         if ( file_status.type() == file_type::regular )
             ++regular_files;
         constexpr auto exec_bits =
             perms::owner_exec | perms::group_exec | perms::others_exec ;
         auto permissions = file_status.permissions() ;
         if ( ( permissions != perms::unknown) &&
                 (permissions & exec_bits) != perms::none )
             ++execs ;
     });
     std::cout
         << "Current directory has "
         << regular_files
         << " regular files.\n" ;
         << execs
         << " files are executable.\n" ;
```

このプログラムは、カレントディレクトリーにある通常のファイルの数と、実行可能なファイルの数を表示する。

ファイルパーミッションを表現する enum 型 perms は、パーミッションが不明な場合 perms::unknown になる。この値は 0xFFFF なのでビット演算をする場合には注意が必要だ。

それ以外の perms の値は POSIX に準拠しているが、perms は scoped enum 型なの

で、明示的なキャストが必要だ。

```
// エラー
std::filesystem::perms a = 0755;

// OK
std::filesystem::perms b = std::filesystem::perms(0755);

ファイルのタイプとパーミッションを書き換えるメンバー関数は以下のとおり。
void type(file_type ft) noexcept;
void permissions(perms prms) noexcept;
```

ただし、file\_status というのは単なるキャッシュ用のクラスなので、file\_status のタイプとパーミッションを「書き換える」というのは、単に file\_status のオブジェクトに保持されている値を書き換えるだけで、物理ファイルシステムに反映されるものではない。物理ファイルシステムを書き換えるには、フリー関数の permissions を使う。

## 10.7 directory\_entry

クラス directory\_entry はファイルパス文字列を保持し、ファイルパスの指し示すファイルの情報を取得できるクラスだ。

物理ファイルシステムからファイルの情報を毎回読むのは非効率的だ。directory\_entry はいわばファイル情報のキャッシュとしての用途を持つ。

directory\_entry は物理ファイルシステムから情報を読み込むだけで、変更のコミットはしない。

directory\_entry の構築は、コンストラクターに引数として path を与える他、directory\_iterator と recursive\_directory\_iterator からも得ることができる。

```
int main()
{
    using namespace std::filesystem;
    path p(".");

// ファイルパス文字列から得る
    directory_entry e1(p);

// イテレーターから得る
```

{

```
directory_iterator i1(p) ;
    directory_entry e2 = *i1 ;
    recursive_directory_iterator i2(p) ;
    directory_entry e3 = *i2 ;
}
```

directory\_entryにはさまざまなファイル情報を取得するメンバー関数があるが、 これは同じ機能のものがフリー関数でも用意されている。directory\_entry を使う と、ファイル情報をキャッシュできるため、同じファイルパスに対して、物理ファイ ルシステムの変更がないときに複数回のファイル情報取得を行うのが効率的になる。

```
int main()
   using namespace std::filesystem ;
   directory_entry entry("/home/cpp/foo") ;
   // 存在確認
   bool b = entry.exists() ;
   // "/home/cpp/foo"
   path p = entry.path() ;
   file_status s = entry.status() ;
   // ファイルサイズを取得
   std::uintmax_t size = entry.file_size() ;
       std::ofstream foo( entry.path() ) ;
       foo << "hello" ;</pre>
   }
   // 物理ファイルシステムから情報を更新
   entry.refresh() ;
   // もう一度ファイルサイズを取得
   size = entry.file_size() ;
   // 情報を取得するファイルパスを
   // "/home/cpp/bar"
   // に置き換えて refresh() を呼び出す
```

```
entry.replace_filename("bar") ;
}
```

directory\_entry はキャッシュ用のクラスで、自動的に物理ファイルシステムの変更に追随しないので、最新の情報を取得するには、明示的にメンバー関数 refresh を呼び出す必要がある。

# 10.8 directory\_iterator

directory\_iterator は、あるディレクトリー下に存在するファイルパスをイテレーターの形式で列挙するためのクラスだ。

たとえば、カレントディレクトリー下のファイルパスをすべて列挙するコードは以下のようになる。

directory\_iterator はコンストラクターとして path を渡すと、そのディレクトリー下の最初のファイルに相当する directory\_entry を返すイテレーターとなる。コンストラクターで指定されたディレクトリー下にファイルが存在しない場合、終端イテレーターになる。

directory\_iterator のデフォルトコンストラクターは終端イテレーターになる。 終端イテレーターはデリファレンスできない。

directory\_iterator::value\_type は directory\_entry で、イテレーターのカテゴリーは入力イテレーターとなる。

directory\_iterator はカレントディレクトリー (.) と親ディレクトリー (..) は列挙しない。

directory\_iterator がディレクトリー下のファイルをどのような順番で列挙するかは未規定だ。

directory\_iterator によって返されるファイルパスは存在しない可能性があるので、ファイルが存在することを当てにしてはいけない。たとえば、存在しないファイルへのシンボリックリンクかもしれない。

directory\_iterator のオブジェクトが作成された後に物理ファイルシステムにな

された変更は、反映されるかどうか未規定である。

directory\_iterator のコンストラクターは列挙時の動作を指定できる directory\_options を実引数に受け取ることができる。しかし、C++17 の標準規格の範囲では directory\_iterator の挙動を変更する directory\_options は規定 されていない。

## 10.8.1 エラー処理

directory\_iterator は構築時にエラーが発生することがある。このエラーを例外ではなく error\_code で受け取りたい場合、コンストラクターの実引数で error\_code へのリファレンスを渡す。

```
int main()
{
    using namespace std::filesystem;

std::error_code err;

directory_iterator iter("this-directory-does-not-exist", err);

if (err)
{
    // エラー処理
}
```

directory\_iterator はインクリメント時にエラーが発生することがある。このエラーを例外ではなく error\_code で受け取りたい場合、メンバー関数 increment を呼び出す。

```
int main()
{
    using namespace std::experimental::filesystem ;
    recursive_directory_iterator iter("."), end ;
    std::error_code err ;
    for ( ; iter != end && !err ; iter.increment( err ) )
    {
        std::cout << *iter << "\n" ;</pre>
```

```
}
if ( err )
{
    // エラー処理
}
```

# 10.9 recursive\_directory\_iterator

recursive\_directory\_iterator は指定されたディレクトリー下に存在するサブディレクトリーの下も含めて、すべてのファイルを列挙する。使い方はdirectory\_iteratorとほぼ同じだ。

メンバー関数 options, depth, recursion\_pending, pop, disable\_recursion\_pending をデリファレンスできないイテレーターに対して呼び出した際の挙動は未定義だ。

# 10.9.1 オプション

recursive\_directory\_iterator はコンストラクターの実引数に directory\_options 型の scoped enum 値を取ることによって、挙動を変更できる。directory\_options 型の enum 値はビットマスクになっていて、以下の 3 つのビットマスク値が規定されている。

名前	意味
none	デフォルト。ディレクトリーシンボリックリンクをスキッ
	プ。パーミッション違反はエラー
follow_directory_symlink	ディレクトリーシンボリックリンクの中も列挙
skip_permission_denied	パーミッション違反のディレクトリーはスキップ

このうち取りうる組み合わせは、none, follow\_directory\_symlink, skip\_permission\_denied, follow\_directory\_symlink | skip\_permission\_denied の 4 種類になる。

```
int main()
  {
      using namespace std::filesystem ;
      recursive_directory_iterator
         iter("/", directory_options::skip_permission_denied), end ;
      std::copy( iter, end,
               }
 follow_directory_symlink は、親ディレクトリーへのシンボリックリンクが存在
する場合、イテレーターが終端イテレーターに到達しない可能性があるので注意する
こと。
  int main()
  {
      using namespace std::filesystem;
      // 自分自身を含むディレクトリーに対するシンボリックリンク
      create_symlink(".", "foo") ;
      recursive_directory_iterator
         iter(".", directory_options::follow_directory_symlink), end ;
      // エラー、もしくは終了しない
      std::copy( iter, end, std::ostream_iterator<path>(std::cout) );
  }
 recursive_directory_iterator の現在の directory_options を得るには、メン
バー関数 options を呼ぶ。
  class recursive_directory_iterator {
  public :
      directory_options options() const ;
```

## 10.9.2 depth: 深さ取得

recursive\_directory\_iterator が現在列挙しているディレクトリーの深さを知るには、メンバー関数 depth を呼ぶ。

```
class recursive_directory_iterator {
public :
    int depth() const ;
} ;
```

最初のディレクトリーの深さは0で、次のサブディレクトリーの深さは1、それ以降のサブディレクトリーも同様に続く。

## 10.9.3 pop: 現在のディレクトリーの列挙中止

メンバー関数 pop を呼ぶと、現在列挙中のディレクトリーの列挙を取りやめ、親ディレクトリーに戻る。現在のディレクトリーが初期ディレクトリーの場合、つまり depth() == 0 の場合は、終端イテレーターになる。

```
class recursive_directory_iterator {
public :
    void pop();
    void pop(error_code& ec);
};
```

たとえば、カレントディレクトリーが以下のようなディレクトリーツリーで、イテレーターが以下に書かれた順番でファイルを列挙する環境の場合、

a
b
b/a
b/c
b/d
c
d

以下のようなプログラムを実行すると、

```
int main()
{
    std::filesystem ;
```

```
recursive_directory_iterator iter("."), end;
auto const p = canonical("b/a");
for (; iter != end; ++iter)
{
    std::cout << *iter << '\n';
    if ( canonical(iter->path()) == p )
        iter.pop();
}
```

標準出力が指すファイルとその順番は以下のようになる。

a
b
b/a
c
d

"b/a" に到達した時点で pop() が呼ばれるので、それ以上のディレクトリーb下の列挙が中止され、親ディレクトリーであるカレントディレクトリーに戻る。

## 10.9.4 recursion\_pending: 現在のディレクトリーの再帰をスキップ

disable\_recursion\_pending は現在のディレクトリーの下を再帰的に列挙することをスキップする機能だ。

```
class recursive_directory_iterator {
public :
    bool recursion_pending() const ;
    void disable_recursion_pending() ;
} ;
```

recursion\_pending() は、直前のイテレーターのインクリメント操作の後にdisable\_recursion\_pending()が呼ばれていない場合、trueを返す。そうでない場合はfalseを返す。

言い換えれば、disable\_recursion\_pending() を呼んだ直後で、まだイテレーターのインクリメント操作をしていない場合、recursion\_pending() は false を返す。

int main()

```
{
   using namespace std ;
   recursive_directory_iterator iter("."), end ;

// true
  bool b1 = iter.recursion_pending() ;

iter.disable_recursion_pending() ;

// false
  bool b2 = iter.recursion_pending() ;

++iter ;

// true
  bool b3 = iter.recursion_pending() ;

iter.disable_recursion_pending() ;

// false
  bool b4 = iter.recursion_pending() ;

// false
```

現在 recursive\_directory\_iterator が指しているファイルパスがディレクトリーである場合、そのイテレーターをインクリメントすると、そのディレクトリー下を再帰的に列挙することになる。しかし、recursion\_pending() が false を返す場合、ディレクトリーの最適的な列挙はスキップされる。インクリメント操作が行われた後は recursion\_pending() の結果は true に戻る。

つまり、disable\_recursion\_pending は、現在指しているディレクトリー下を再帰的に列挙することをスキップする機能を提供する。

たとえば、カレントディレクトリーが以下のようなディレクトリーツリーで、イテレーターが以下に書かれた順番でファイルを列挙する環境の場合、

a
b
b/a
b/c
b/d
c
d

以下のようなプログラムを実行すると、

# 10.9 recursive\_directory\_iterator

```
int main()
{
    std::filesystem ;

    recursive_directory_iterator iter("."), end ;

    auto const p = canonical("b/a") ;

    for ( ; iter != end ; ++iter )
    {
        std::cout << *iter << '\n' ;

        if ( iter->is_directory() )
            iter.disable_recursion_pending() ;
    }
}
```

標準出力が指すファイルとその順番は以下のようになる。

a b c

このプログラムはディレクトリーであれば必ず disable\_recursion\_pending() が呼ばれるので、サブディレクトリーの再帰的な列挙は行われず、結果的に動作は directory\_iterator と同じになる。

disable\_recursion\_pending を呼び出すことによって、選択的にディレクトリーの再帰的な列挙をスキップさせることができる。

# 10.10 ファイルシステム操作関数

## 10.10.1 ファイルパス取得

#### current\_path

```
path current_path();
path current_path(error_code& ec);
```

カレント・ワーキング・ディレクトリー(current working directory)への絶対パスを返す。

## temp\_directory\_path

```
path temp_directory_path();
path temp_directory_path(error_code& ec);
```

一時ファイルを作成するのに最適な一時ディレクトリー(temporary directory)へのファイルパスを返す。

## 10.10.2 ファイルパス操作

#### absolute

```
path absolute(const path& p);
path absolute(const path& p, error_code& ec);
```

pへの絶対パスを返す。pの指すファイルが存在しない場合の挙動は未規定。

#### canonical

```
path canonical(const path& p, const path& base = current_path());
path canonical(const path& p, error_code& ec);
path canonical(const path& p, const path& base, error_code& ec);
```

存在するファイルへのファイルパス p への、シンボリックリンク、カレントディレクトリー (.)、親ディレクトリー (..) の存在しない絶対パスを返す。

## weakly\_canonical

```
path weakly_canonical(const path& p);
path weakly_canonical(const path& p, error_code& ec);
```

ファイルパスpのシンボリックリンクが解決され、正規化されたパスを返す。ファイルパスの正規化についての定義は長くなるので省略。

#### relative

```
path relative(const path& p, error_code& ec);
path relative(const path& p, const path& base = current_path());
path relative(const path& p, const path& base, error_code& ec);
```

ファイルパス base からファイルパス p に対する相対パスを返す。

### proximate

```
path proximate(const path& p, error_code& ec);
path proximate(const path& p, const path& base = current_path());
path proximate(const path& p, const path& base, error_code& ec);
```

ファイルパス base からのファイルパス p に対する相対パスが空パスでなければ相対パスを返す。相対パスが空パスならば p が返る。

## 10.10.3 作成

## create\_directory

```
bool create_directory(const path& p);
bool create_directory(const path& p, error_code& ec) noexcept;
```

pの指すディレクトリーを1つ作成する。新しいディレクトリーが作成できた場合は true を、作成できなかった場合は false を返す。pが既存のディレクトリーを指していて新しいディレクトリーが作成できなかった場合はエラーにはならない。単に false が返る。

```
bool create_directory(
    const path& p, const path& existing_p);

bool create_directory(
    const path& p, const path& existing_p,
    error_code& ec) noexcept;
```

新しく作成するディレクトリー p のアトリビュートを既存のディレクトリー existing\_p と同じものにする。

## create\_directories

```
bool create_directories(const path& p);
bool create_directories(const path& p, error_code& ec) noexcept;
```

ファイルパス p の中のディレクトリーで存在しないものをすべて作成する。 以下のプログラムは、カレントディレクトリーの下のディレクトリー a の下のディレクトリー b の下にディレクトリー c を作成する。もし、途中のディレクトリーである a, b が存在しない場合、それも作成する。

```
int main()
{
    using namespace std::filesystem ;
    create_directories("./a/b/c") ;
}
```

戻り値は、ディレクトリーを作成した場合 true, そうでない場合 false。

## create\_directory\_symlink

```
void create_directory_symlink(
    const path& to, const path& new_symlink);
void create_directory_symlink(
    const path& to, const path& new_symlink,
    error_code& ec) noexcept;
```

ディレクトリー to に解決されるシンボリックリンク new\_symlink を作成する。

一部の OS では、ディレクトリーへのシンボリックリンクとファイルへのシンボリックリンクを作成時に明示的に区別する必要がある。ポータブルなコードはディレクトリーへのシンボリックリンクを作成するときには create\_symlink ではなく create\_directory\_symlink を使うべきである。

一部の OS はシンボリックリンクをサポートしていない。ポータブルなコードでは 注意すべきである。

## create\_symlink

```
void create_symlink(
    const path& to, const path& new_symlink);
void create_symlink(
    const path& to, const path& new_symlink,
    error_code& ec) noexcept;
```

ファイルパス to に解決されるシンボリックリンク new\_symlink を作成する。

## create\_hard\_link

```
void create_hard_link(
    const path& to, const path& new_hard_link);
void create_hard_link(
    const path& to, const path& new_hard_link,
    error_code& ec) noexcept;
```

ファイルパス to に解決されるハードリンク new\_hard\_link を作成する。

## 10.10.4 コピー

# copy\_file

ファイルパス from のファイルをファイルパス to にコピーする。

 $copy\_options$  はコピーの挙動を変えるビットマスクの enum 型で、以下の enum 値がサポートされている。

名前	意味
none	デフォルト、ファイルがすでに存在する場合はエラー
skip_existing	既存のファイルを上書きしない。スキップはエラーとして
	報告しない
overwrite_existing	既存のファイルを上書きする
update_existing	既存のファイルが上書きしようとするファイルより古けれ
	ば上書きする

# сору

ファイルパス from のファイルをファイルパス to にコピーする。

 $copy\_options$  はコピーの挙動を変えるビットマスク型の enum 型で、以下の enum 値がサポートされている。

• サブディレクトリーに関する指定

名前	意味
none recursive	デフォルト、サブディレクトリーはコピーしない サブディレクトリーとその中身もコピーする

## • シンボリックリンクに関する指定

名前	意味
none	デフォルト、シンボリックリンクをフォローする
copy_symlinks	シンボリックリンクをシンボリックリンクとしてコピーする。
	シンボリックリンクが指すファイルを直接コピーしない
skip_symlinks	シンボリックリンクを無視する

# • コピー方法に関する指定

名前	意味
none	デフォルト、ディレクトリー下の中身をコピーする
directories_only	ディレクトリー構造のみをコピーする。非ディレクトリーファ イルはコピーしない
create_symlinks	イルはコピーしない ファイルをコピーするのではなく、シンボリックリンクを作
010000_27212	成する。コピー先がカレントディレクトリーではない場合、コ
	ピー元のファイルパスは絶対パスでなければならない
create_hard_links	ファイルをコピーするのではなく、ハードリンクを作成する

# copy\_symlink

void copy\_symlink( const path& existing\_symlink,

existing\_symlink を new\_symlink にコピーする。

#### 10.10.5 削除

## remove

```
bool remove(const path& p);
bool remove(const path& p, error_code& ec) noexcept;
```

ファイルパスpの指すファイルが存在するのであれば削除する。ファイルがシンボリックリンクの場合、シンボリックリンクファイルが削除される。フォロー先は削除されない。

戻り値として、ファイルが存在しない場合 false を返す。それ以外の場合 true を返す。error\_code でエラー通知を受け取る関数オーバーロードでは、エラーならば false が返る。

## remove\_all

```
uintmax_t remove_all(const path& p);
uintmax_t remove_all(const path& p, error_code& ec) noexcept;
```

ファイルパスpの下の存在するファイルをすべて削除した後、pの指すファイルも削除する。

つまり、p がディレクトリーファイルを指していて、そのディレクトリー下にサブディレクトリーやファイルが存在する場合、それらがすべて削除され、ディレクトリーp も削除される。

p がディレクトリーではないファイルを指す場合、p が削除される。

戻り値として、削除したファイルの個数が返る。error\_code でエラー通知を受け取る関数オーバーロードの場合、エラーならば static\_cast<uintmax\_t>(-1) が返る。

## 10.10.6 変更

## permissions

ファイルパスpのパーミッションを変更する。

opts は perm\_options 型の enum 値、replace, add, remove のうちいずれか1つと、別途 nofollow を指定することができる。省略した場合は replace になる。

カレントディレクトリーに存在するファイル foo を、すべてのユーザーに対して実行権限を付加するには、以下のように書く。

```
int main()
{
    using namespace std::filesystem ;
    permissions( "./foo", perms(0111), perm_options::add ) ;
}
```

perm\_options は以下のような enum 値を持つ。

名前	意味
replace	ファイルのパーミッションを prms で置き換える
add	ファイルのパーミッションに prms で指定されたものを追加する
remove	ファイルのパーミッションから prms で指定されたものを取り除く
nofollow	ファイルがシンボリックリンクの場合、シンボリックリンクのフォロー
	先のファイルではなく、シンボリックリンクそのもののパーミッション
	を変更する

たとえば、パーミッションを置き換えつつ、シンボリックリンクそのもののパー ミッションを書き換えたい場合は、

```
perm_options opts = perm_options::replace | perm_options::nofollow ; と書く。
```

## rename

```
void rename(const path& old_p, const path& new_p);
  void rename(const path& old_p, const path& new_p,
             error_code& ec) noexcept;
 ファイル old_p をファイル new_p にリネームする。
 old_pと new_p が同じ存在するファイルを指す場合、何もしない。
  int main()
   {
      using namespace std:filesystem ;
      // 何もしない
      rename("foo", "foo") ;
  }
 それ以外の場合、リネームに伴って以下のような挙動も発生する。
 もし、リネーム前に new_p が既存のファイルを指していた場合、リネームに伴って
new_p は削除される。
  int main()
  {
      using namespace std::experimental::filesystem ;
      {
         std::ofstream old_p("old_p"), new_p("new_p") ;
         old_p << "old_p" ;
         new_p << "new_p" ;</pre>
      // ファイル old_p の内容は"old_p"
      // ファイル new_p の内容は"new_p"
      // ファイル old_p を new_p にリネーム
      // もともとの new_p は削除される
      rename("old_p", "new_p") ;
      std::ifstream new_p("new_p") ;
      std::string text ;
```

```
new_p >> text ;

// "old_p"
std::cout << text ;
}</pre>
```

もし、 $new_p$  が既存の空ディレクトリーを指していた場合、POSIX 準拠 OS であれば、リネームに伴って  $new_p$  は削除される。他の OS ではエラーになるかもしれない。

```
int main()
{
    using namespace std::experimental::filesystem;

    create_directory("old_p");
    create_directory("new_p");

    // POSIX 準拠環境であればエラーにならないことが保証される
    rename("old_p", "new_p");
}
```

 $old_p$  がシンボリックリンクの場合、フォロー先ではなくシンボリックリンクファイルがリネームされる。

## resize\_file

ファイルパス path の指すファイルのファイルサイズを new\_size にする。

リサイズは POSIX の truncate() で行われたかのように振る舞う。つまり、ファイルを小さくリサイズした場合、余計なデータは捨てられる。ファイルを大きくリサイズした場合、増えたデータは null バイト( $\setminus 0$ )でパディングされる。ファイルの最終アクセス日時も更新される。

## 10.10.7 情報取得

## ファイルタイプの判定

ファイルタイプを表現する file\_type 型の enum があり、その enum 値は以下のようになっている。

名前	意味
none	ファイルタイプが決定できないかエラー
not_found	ファイルが発見できなかったことを示す疑似ファイルタイプ
regular	通常のファイル
directory	ディレクトリーファイル
symlink	シンボリックリンクファイル
block	ブロックスペシャルファイル
fifo	FIFO もしくはパイプファイル
socket	ソケットファイル
unknown	ファイルは存在するがファイルタイプは決定できない

この他に、実装依存のファイルタイプが追加されている可能性がある。

ファイルタイプを調べるには、file\_status のメンバー関数 type の戻り値を調べればよい。

以下のプログラムは、カレントディレクトリーに存在するファイル foo がディレクトリーかどうかを調べるコードだ。

```
int main()
{
    using namespace std::filesystem ;

auto s = status("./foo") ;
    bool b = s.type() == file_type::directory ;
}
```

また、status もしくは path からファイルタイプがディレクトリーであるかどうか を判定できる is\_directory も用意されている。

```
int main()
{
    using namespace std::filesystem;

bool b1 = is_directory("./foo");

auto s = status("./foo");
bool b2 = is_directory(s);
}
```

file\_status はファイル情報をキャッシュするので、物理ファイルシステムに変更を加えない状態で、同じファイルに対して何度もファイル情報を取得する場合は、

file\_status を使ったほうがよい。

このような is\_x という形式のフリー関数は、いずれも以下の形式を取る。

bool is\_x(file\_status s) noexcept;

bool is\_x(const path& p);

bool is\_x(const path& p, error\_code& ec) noexcept;

以下はフリー関数の名前と、どのファイルタイプであるかを判定する表だ。

名前	意味
is_regular_file	通常のファイル
is_directory	ディレクトリーファイル
is_symlink	シンボリックリンクファイル
is_block	ブロックスペシャルファイル
is_fifo	FIFO もしくはパイプファイル
is_socket	ソケットファイル

また、単一のファイルタイプを調べるのではない以下のような名前のフリー関数が 存在する。

名前	意味
is_other	ファイルが存在し、通常のファイルでもディレクトリーでもシンボ
	リックリンクでもないタイプ
is_empty	ファイルがディレクトリーの場合、ディレクトリー下が空であれば
	true を返す。ファイルが非ディレクトリーの場合、ファイルサイ
	ズが $0$ であれば $ ext{true}$ を返す。

## status

```
file_status status(const path& p);
file_status status(const path& p, error_code& ec) noexcept;

ファイルパス p のファイルの情報を格納する file_status を返す。
p がシンボリックリンクの場合、フォロー先のファイルの file_status を返す。
```

#### status\_known

```
bool status_known(file_status s) noexcept;
s.type() != file_type::none を返す。
```

# symlink\_status

```
file_status symlink_status(const path& p);
file_status symlink_status(const path& p, error_code& ec) noexcept;
```

status と同じだが、p がシンボリックリンクの場合、そのシンボリックリンクファイルの status を返す。

## equivalent

p1 と p2 が物理ファイルシステム上、同一のファイルである場合、true を返す。そうでない場合 false を返す。

## exists

```
bool exists(file_status s) noexcept;
bool exists(const path& p);
bool exists(const path& p, error_code& ec) noexcept;
```

s,p が指すファイルが存在するのであれば true を返す。そうでない場合 false を返す。

#### file\_size

```
uintmax_t file_size(const path& p);
uintmax_t file_size(const path& p, error_code& ec) noexcept;
```

pの指すファイルのファイルサイズを返す。

ファイルが存在しない場合エラーとなる。ファイルが通常のファイルの場合、ファイルサイズを返す。それ以外の場合、挙動は実装依存となる。

エラー通知を error\_code で受け取る関数オーバーロードでエラーのとき、戻り値は static\_cast<uintmax\_t>(-1) となる。

## hard\_link\_count

```
uintmax_t hard_link_count(const path& p);
uintmax_t hard_link_count(const path& p, error_code& ec) noexcept;
```

p の指すファイルのハードリンク数を返す。

エラー通知を error\_code で受け取る関数オーバーロードでエラーのとき、戻り値は static\_cast<uintmax\_t>(-1) となる。

## last\_write\_time

pの指すファイルの最終更新日時を返す。

pの指すファイルの最終更新日時を new\_time にする。

last\_write\_time(p, new\_time) を呼び出した後に、last\_write\_time(p) == new\_timeである保証はない。なぜならば、物理ファイルシステムの実装に起因する時刻の分解能や品質の問題があるからだ。

file\_time\_type は、std::chrono\_time\_point の特殊化で以下のように定義されている。

```
namespace std::filesystem {
    using file_time_type = std::chrono::time_point< trivial-clock > ;
}
```

trivial-clock とは、クロック(より正確には TrivialClock)の要件を満たすクロックで、ファイルシステムのタイムスタンプの値を正確に表現できるものとされている。クロックの具体的な型は実装依存なので、完全にポータブルなコードではファ

イルシステムで時間を扱うのは極めて困難になる。せいぜい現在時刻を設定するとか、差分の時間を設定するぐらいしかできない。

```
int main()
      using namespace std::experimental::filesystem ;
      using namespace std::chrono;
      using namespace std::literals;
      // 最終更新日時を取得
      auto timestamp = last_write_time( "foo" ) ;
      // 時刻を1時間進める
      timestamp += 1h ;
      // 更新
      last_write_time( "foo", timestamp );
      // 現在時刻を取得
      auto now = file_time_type::clock::now() ;
      last_write_time( "foo", now ) ;
  }
 ただし、多くの実装では file_time_type として、time_point<std::chrono::
system_clock> が使われている。file_time_type::clock が system_clock であれ
ば、system_clock::to_time_t と system_clock::from_time_t によって time_t 型と
の相互変換ができるために、いくぶんマシになる。
   // file_time_type::clock が system_clock である場合
   int main()
      {\tt using \ namespace \ std::experimental::filesystem \ ;}
      using namespace std::chrono ;
      // 最終更新日時を文字列で得る
      auto time_point_value = last_write_time( "foo" ) ;
      time_t time_t_value =
          system_clock::to_time_t( time_point_value ) ;
      std::cout << ctime( &time_t_value ) << '\n';</pre>
```

```
// 最終更新日時を 2017-10-12 19:02:58 に設定
tm struct_tm{};
struct_tm.tm_year = 2017 - 1900;
struct_tm.tm_mon = 10;
struct_tm.tm_mday = 12;
struct_tm.tm_hour = 19;
struct_tm.tm_min = 2;
struct_tm.tm_sec = 58;

time_t timestamp = std::mktime( &struct_tm );
auto tp = system_clock::from_time_t( timestamp );
last_write_time( "foo", tp );
}
```

あまりマシになっていないように見えるのは、C++ では現在 <chrono> から利用できる C++ 風のモダンなカレンダーライブラリがないからだ。この問題は将来の規格改定で改善されるだろう。

## read\_symlink

```
path read_symlink(const path& p);
path read_symlink(const path& p, error_code& ec);

シンボリックリンク p の解決される先のファイルパスを返す。
p がシンボリックリンクではない場合はエラーになる。
```

## space

```
space_info space(const path& p);
space_info space(const path& p, error_code& ec) noexcept;
ファイルパス p が指す先の容量を取得する。
クラス space_info は以下のように定義されている。
struct space_info {
    uintmax_t capacity;
    uintmax_t free;
    uintmax_t available;
};
```

この関数は、POSIX の statvfs 関数を呼び出した結果の struct statvfs の  $f_blocks$ ,  $f_bfree$ ,  $f_bavail$  メンバーを、それぞれ  $f_frsize$  で乗じて、 $space_info$  のメンバー capacity, free, available として返す。値の決定できないメンバーには  $static_cast < uintmax_t > (-1)$  が代入される。

エラー通知を error\_code で返す関数オーバーロードがエラーの場合、space\_info のメンバーにはすべて static\_cast<uintmax\_t>(-1) が代入される。

space\_info のメンバーの意味をわかりやすく説明すると、以下の表のようになる。

名前	意味
capacity	総容量
free	空き容量
available	権限のないユーザーが使える空き容量

```
*this, 34
::value, 22
<algorithm>, 153, 156, 183, 220
<any>, 104
<atomic>, \frac{221}{}
<chrono>, 262
<cmath>, 165, 221
<cstddef>, 81
<execution>, 156, 161
filesystem>, 225
<functional>, 179, 195, 196
<iterator>, 220
'''
<memory_resource>, 133
                                                     0B, 5
<new>, 176
                                                     0b, 5
<numeric>, 222
                                                     0x. 27
<optional>, 110
<system_error>, 227
<tuple>, 194
\verb|<type_traits>|, 201|\\
\langle \mathtt{utility} \rangle, \, \frac{193}{}
<variant>, 85
[[deprecated]] 属性, 6
[[fallthrough]] 属性, 40
[[maybe_unused]] 属性, 43
[[nodiscard]] 属性, 41
\verb|_cpp_aggregate_nsdmi|, \frac{24}{}
\verb|_cpp_binary_literals|, 5
\verb|_cpp_capture_star_this|, 37
\_\mathtt{cpp\_constexpr},\ 23,\ 39
\_\mathtt{cpp\_decltype\_auto},\ 14
__cpp_deduction_guides, 61
__cpp_fold_expressions, 34
\verb|_cpp_generic_lambdas|, 15
\verb|_cpp_hex_float|, \ 28
\verb|_cpp_if_constexpr|, 56
__cpp_init_captures, 18
\verb|_cpp_inline_variables|, 79
\verb|_cpp_nested_namespace_definitions|, 40|
\verb|_cpp_noexcept_function_type|, 30
__cpp_return_type_deduction, 9
__cpp_rvalue_references, 2
                                                     basic_string_view, 123
```

```
\verb|_cpp_sized_deallocation|, 25
__cpp_static_assert, 39
\verb|_cpp_structured_bindings|, 75
__cpp_template_auto, 62
\verb|_cpp_variable_templates|, 23
__cpp_variadic_using, 81
\verb|__has_cpp_attribute(deprecated)|, 8
\verb|__has_cpp_attribute(fallthrough)|, 41
\_\_has_cpp_attribute(maybe_unused), 45
__has_cpp_attribute(nodiscard), 43
__has_cpp_attribute 式, 4
__has_include 式, 3
__USE_RVALUE_REFERENCES, 2
_v 版, 23, 201
16 進数浮動小数点数リテラル, 27
3 次元 hypot, 221
absolute, 248
addressof, 196
all_of, 153, 155
allocate, 134, 149
\mathtt{any},\, 85,\, 104
    any_cast<T>, 109
    \mathtt{emplace},\, 105,\, 106
    {\tt has\_value},\, {\tt 107}
    make_any<T>, 108
    \mathtt{reset},\, \underline{106}
    {\tt std::in\_place\_type<T>,\ 105}
    swap, 107
    type, 108
    構築, 105
    代入, 106
    破棄, 105
any_cast<T>, 109
The\ Art\ of\ Computer\ Programming,\ 183
as const. 193
auto, 8, 61
    厳格な~,9
```

```
{\tt BinaryOperation},\, {\color{red}157}
                                                                     {\tt disjunction},\, {\color{red} 203}
                                                                     {\tt do\_allocate},\, 135,\, 143,\, 149
BinaryOperation1, 157
BinaryOperation2, 157
                                                                     {\tt do\_deallocate},\, 135,\, 149
{\tt BinaryPredicate},\, {\tt 157}
                                                                     {\tt do\_is\_equal},\, {\tt 135}
bool, 115
bool_constant, 201
                                                                     \mathtt{emplace},\, 90,\, 92,\, 105,\, 106,\, 208
Boyer-Moore-Horspool 検索アルゴリズム, 182
                                                                          戻り値, 206
Boyer-Moore 文字列検索アルゴリズム, 180
                                                                     emplace_back, 206
                                                                     emplace_front, 206 empty, 220
C++03, v
C++11, v
                                                                     equivalent, 259
C++14, v, 5
                                                                     \mathtt{error\_code},\, \textcolor{red}{\mathbf{228}},\, \textcolor{red}{\mathbf{241}}
     コア言語,5
                                                                     {\tt ExecutionPolicy},\, {\color{red}156}
                                                                     \mathtt{exists},\, \textcolor{red}{\mathbf{259}}
C++17, vi, 1, 27
     コア言語, 27
                                                                     extract, 213
C++20, vi
                                                                     {\tt false\_type},\, {\tt 204}
C++98, v
c_str, 232
                                                                     {\tt file\_size},\, {\tt 259}
                                                                     {\tt file\_status},\, 236,\, 257,\, 258
canonical, 248
\mathtt{char},\ 121,\ 230
                                                                     {\tt file\_time\_type},\, {\tt \frac{260}{}}
CHAR_BIT, 81
                                                                     file_type, 236, 256
char16_t, 121, 230
                                                                     filesystem_error, 227
\mathtt{char} 32\_\mathtt{t}, \ \underline{121}, \ \underline{230}
                                                                     fold 式, 30
clamp, 220
                                                                           单項~, 31, 32
二項~, 31, 33
左~, 31, 33
clear, 228
Compare, 157
{\tt conjunction},\, {\color{red} 202}
                                                                           右~, 31, 33
\mathtt{constexpr},\, \textcolor{red}{23},\, \textcolor{red}{37}
                                                                     {\tt follow\_directory\_symlink,\, 243}
\mathtt{constexpr}\ \mathtt{if}\ \dot{\mathbb{X}},\ \underline{\mathbf{46}}
                                                                     for-range 宣言, 67
     解決できない問題,55
                                                                     free, 136
     解決できる問題, 55
copy, 251
                                                                     gcd, 222
copy_file, 251
                                                                     {\tt generic\_string},\, {\tt 234}
\mathtt{copy\_options},\, \textcolor{red}{251},\, \textcolor{red}{252}
                                                                     get<I>(v), 97
{\tt copy\_symlink},\, {\color{red} 252}^{^{''}}
                                                                     get<T>(v), \frac{99}{}
{\tt create\_directories},\, {\tt 249}
                                                                     {\tt get\_default\_resource},\ 138,\ 140
{\tt create\_directory},\, {\tt 249}
                                                                     {\tt get\_if < I > (vp),\, \frac{100}{}}
{\tt create\_directory\_symlink},\, {\tt 250}
                                                                     {\tt get\_if < T>(vp),\, 100}
{\tt create\_hard\_link},\, {\tt 251}
create_symlink, 250
                                                                     {\tt hard\_link\_count},\, {\tt 260}
current_path, 248
                                                                    {\tt has\_unique\_object\_representations<T>},
C プリプロセッサー, vi, 1
                                                                                205
                                                                     \mathtt{has\_value},\, \underline{107},\, \underline{114}
data, 220
                                                                     {\tt holds\_alternative < T > (v),\,96}
deallocate, 134, 149
                                                                    hypot, 221
decltype(auto), 9
delete, 25
                                                                     \quad \text{if constexpr},\, 46 \\
depth, 244
                                                                     {\tt in\_place\_type},\, \frac{120}{}
{\tt destroy},\, {\color{red} 199}
                                                                     increment, 241
{\tt directory\_entry},\ {\tt 236},\ {\tt 238}
                                                                     index, 94
{\tt directory\_iterator},\, 238,\, 240
                                                                     inline
     error_code, 241
                                                                           関数, 75
     increment, \frac{241}{}
                                                                           キーワード,75
                                                                           展開, 75
directory_options, 241, 242
disable_recursion_pending, 245
                                                                           変数, 75, 78
discarded statement, 52
                                                                     insert, 215
```

```
{\tt insert\_or\_assign},\, {\tt 208}
                                                          mutex, 160
{\tt insert\_return\_type},\, {\tt 216}
integral_constant, 201
                                                          \mathtt{native},\, \textcolor{red}{\mathbf{232}}
IntType, 83
                                                          negation, 203
INVOKE, 195
                                                          new, 141
invoke, 195
                                                          new_delete_resource, 139
\verb|is_always_lock_free|, \frac{221}{}
                                                          node_type, 211
noexcept, 29
is_directory, 257
is_equal, 134
                                                          \mathtt{not\_fn},\, \underline{196}
is_invocable, 204
                                                          not1, 196
is_invocable_r, 204
                                                          not2, 196
{\tt is\_lock\_free},\, \textcolor{red}{221}
                                                          {\tt null\_memory\_resource},\, 139
{\tt is\_nothrow\_invocable},\, {\tt 204}
                                                          null 終端, 121, 126
is\_nothrow\_invocable\_r, 204
{\tt is\_nothrow\_swappable<T>,}\ 206
                                                           ODR (One Definition Rule), 76
\verb|is_nothrow_swappable_with<T, U>, 206|\\
                                                           operator (), 14, 37
is_x, \frac{258}{}
                                                           operator delete, 25
ISO/IEC 14882, v
                                                           \mathtt{optional},\, 85,\, 110
                                                               bool, 115
key, 212
                                                               has_value, 114
                                                               in_place_type, 120
                                                               make_optional<T, Args ...>, 120
{\tt largest\_required\_pool\_block},\, 146
                                                               make_optional<T>, 119
{\tt last\_write\_time},\, {\tt 260}
                                                               reset, 117
1cm, 223
                                                               std::bad_optional_access, 116
lock, 160
                                                               \verb|std::in_place_type<T>, \, 113|
{\tt lock\_guard},\, {\tt \frac{221}{}}
                                                               std::nullopt, 112, 119
make_any<T>, 108
                                                               swap, 114
                                                               value, 115
make_from_tuple, 194
                                                               value_or, 116
make_optional<T, Args \dots>, 120
                                                               構築, 112
{\tt make\_optional< T>}, \, {\small 119}
                                                               代入, 113
malloc, 136, 141
                                                                テンプレート実引数, 112
map, 207, 209
                                                               破棄, 113
    key, 212
                                                               比較, 117
    mapped, 212
                                                          options, 147, 243
mapped, 212
max_blocks_per_chunk, 146
                                                          {\tt parallel\_policy},\, 159,\, 160
memory_resource, 133
                                                          parallel_unsequenced_policy, 160
    allocate, 134
                                                          path, 229, 235
    {\tt deallocate},\, {\color{red}134}
                                                          path::string_type, 233
    do_allocate, 135, 143
                                                          path::value_type, 230
    {\tt do\_deallocate},\, {\color{red} 135}
                                                          perm_options, 254
    {\tt do\_is\_equal},\, {\color{red} 135}
                                                          {\tt permissions},\, {\tt 236},\, {\tt 254}
    free, 136
                                                          perms, 236
    get_default_resource, 140
                                                          {\tt polymorphic\_allocator},\, 137
    is_equal, 134
                                                               ,
コンストラクター, 138
    malloc, 136
                                                          pool\_options, 145, 146
    {\tt new\_delete\_resource},\,139
                                                          \mathtt{pop},\ \textcolor{red}{\mathbf{244}}
    {\tt null\_memory\_resource},\, {\tt 139}
                                                           Predicate, 157
    {\tt set\_default\_resource},\, 140
                                                          {\tt preferred\_separator},\, {\tt 230}
merge, 210
                                                          proximate, 249
{\tt monotonic\_buffer\_resource},\, 137,\, 147
multi_map, 207
multimap, 209
                                                           queue, 206
multiset, 209
mutable, 36
                                                          read_symlink, 262
```

```
{\tt recursion\_pending},\, {\tt 245}
                                                         std::filesystem, 225
{\tt recursive\_directory\_iterator},\, 238,\, 242
                                                         \verb|std::filesystem::filesystem_error|, 227|
    depth, 244
                                                         std::filesystem::path, 229
    {\tt directory\_options},\, {\tt 242}
                                                         std::for_each, 158
    disable\_recursion\_pending, 245
                                                         std::hardware_constructive_interference_
    follow_directory_symlink, 243
                                                                  \mathtt{size},\, \textcolor{red}{176}
    options, 243
                                                         std::hardware_destructive_interference_
    pop, 244
                                                                  size, 176
                                                         \mathtt{std::in\_place\_type<T>},\,90,\,105,\,113
    {\tt recursion\_pending},\, 245
refresh, 240
                                                         std::integral_constant, 22
{\tt relative},\, {\tt 249}
                                                         std::is_execution_policy<T>, 161
\mathtt{release},\, 147,\, 151
                                                         std::monostate, 89
                                                         std::nullopt, 112, 119
remove, 253
remove_all, 253
                                                         std::pmr::memory_resource, 133
remove_prefix, 129
                                                         std::pmr::polymorphic_allocator, 137
{\tt remove\_suffix},\, {\tt 129}
                                                         \mathtt{std}::\mathtt{sample},\ 183
rename, 255
                                                         std::scoped_lock, 221
reset, 106, 117
                                                         std::size_t, 25
{\tt resize\_file,\, 256}
                                                         std::string, 123
rvalue リファレンス, 1
                                                              ユーザー定義リテラル、130
                                                         \mathtt{std::string\_view},\ \underline{123}
                                                              ユーザー定義リテラル, <u>130</u>
scoped enum, 81
                                                         std::terminate, 161
\mathtt{searcher},\ 179
                                                         std::true\_type, \frac{201}{}
sequenced_policy, 159
                                                         std::tuple_size<E>, 71
set, 209
                                                         \verb|std::uncaught_exception|, 176|
    value, 212
                                                         \mathtt{std::uncaught\_exceptions},\ 176,\ 177
set_default_resource, 140
                                                         std::variant_alternative < I, T>, 96
SFINAE, 38
                                                         std::variant_size<T>, 95
shared_ptr::weak_type, 200
                                                         std::visit, 103
shared_ptr<T[]>, 192
                                                         string, 233
size, 220
                                                         \mathtt{string\_type},\ \underline{230},\ \underline{233}
space, 262
                                                         {\tt string\_view},\, {\color{red} 121}
\mathtt{space\_info},\, \underline{262},\, \underline{263}
                                                              {\tt remove\_prefix},\, {\color{red} 129}
{\tt splice},\, {\color{red} 209}
                                                              remove_suffix, 129
stack, 206
                                                              構築, 125
static_assert
                                                              操作, 128
    文字列なし, 39
                                                              変換関数, 127
status, 236, 259
                                                         swap, 94, 107, 114
status_known, 259
                                                         {\tt symlink\_status},\, {\tt 259}
statvfs, 263
                                                         {\tt synchronized\_pool\_resource},\, \underline{142},\, \underline{145}
std::any, 104
std::apply, 178
                                                         {\tt temp\_directory\_path},\, 248
std::bad_alloc, 160
                                                         traits, 22
\verb|std::bad_optional_access|, 116|
                                                              変数テンプレート版, 201
std::basic_string, 123
                                                              淪理演算, <u>202</u>
std::basic_string_view, 123
                                                         {\tt trivial-clock},\, {\color{red} 261}
std::boyer_moore_horspool_searcher, 182
std::boyer_moore_searcher, 180
                                                         {\tt true\_type},\, {\tt \frac{204}{}}
                                                         try_emplace, 207
\mathtt{std::byte}, 81, 222
                                                         tuple, 178, 194
\mathtt{std} \colon \mathtt{chrono\_time\_point}, \ \underline{260}
                                                         type, 108, 236
std::default_searcher, 179
                                                         typedef 名, 19
\mathtt{std} \colon \mathtt{error\_code}, \ 227, \ 228
std::execution::par, 156
std::execution::par_unseq, 156
                                                         u16string, 233
std::execution::seq, 156
                                                         u16string_view, 123
std::false_type, 201
                                                         u32string, 233
```

```
アグリゲート初期化, 23
u8, <mark>28</mark>
                                            アライメント, 141
u8path, 231
                                            アルゴリズム R(保管標本), 187
UnaryOperation, 157
                                            アルゴリズム S(選択標本), 186
{\tt uninitialized\_copy},\ 198
                                            アロケーター, 133
uninitialized_default_construct, 197
                                            エイリアス宣言, 19
uninitialized_fill, 199
uninitialized_move, 199
                                            エルミート多項式, 168
uninitialized_value_construct, 198
                                            演算子の評価順序,45
union, 85, 86
   型安全, 85
   型非安全,86
                                                IntType, 83
{\tt unordered\_map},\ {\tt 207},\ {\tt 209}
                                                scoped enum, 81
{\tt unordered\_multi\_map},\ {\tt 207}
                                                std::byte, 81
{\tt unordered\_multimap},\, {\tt 209}
                                                バイト, <u>81</u>
unordered_multiset, 209
                                            型安全な
{\tt unordered\_set},\, {\tt \frac{209}{}}
                                                union, 85
unsigned char, 81
                                            型が違う定数, 21
unsynchronized_pool_resource, 142, 145
                                            型指定子, 9
upstream_resource, 147, 152
                                            型非安全,86
using 属性名前空間, 62
                                            可変長 using 宣言, 79
UTF-16 エンコード, 230
                                            可変長テンプレート,30
UTF-32 エンコード, 230
                                            関数型(例外指定), 29
UTF-8 エンコード, 230
                                            関数宣言, 19
UTF-8 文字リテラル, 28
                                            関数テンプレート, 21
                                            関数の戻り値の型推定、8
                                            完全型, 206
value, 115, 212
{\tt value\_or},\, {\color{red}116}
                                            機能テスト,1
                                            機能テストマクロ, 2
{\tt value\_type},\, {\tt \frac{230}{}}
                                            キャッシュメモリー, 175
valueless_by_exception, 93
variant, 85
                                            キャッシュライン, 175
   emplace, 90, 92
                                            球ノイマン関数, 173
                                            球面ルジャンドル陪関数, 167
   get<I>(v), 97
                                            クラス宣言, 18
   get<T>(v), 99
                                            クロージャーオブジェクト, 14, 37
   get_if<I>(vp), 100
                                            クロージャー型, 14
   get_if<T>(vp), 100
                                            厳格な auto, 9
   {\tt holds\_alternative < T>(v),\,96}
   index, 94
                                            コア言語, vi
   \verb|std::variant_alternative<I, T>, 96|
                                            構造化束縛,63
   std::variant_size<T>, 95
                                                完全形の名前, 71
   std::visit, 103
                                                クラス, 73
                                                仕様, 69
   swap, 94
                                                配列, 69
   {\tt valueless\_by\_exception},\, 93
   コピー初期化,89
                                                非 static データメンバー, 74
   初期化,88
                                                ビットフィールド,74
                                            構造化束縛宣言, 67
   宣言, 88
   大小比較, 102
                                            古典的な union, 86
   代入, 92
                                            コピーキャプチャー, 16, 34
                                            コンテナーアクセス関数, 220
   デフォルト初期化,88
   同一性の比較, 101
                                                data, 220
   破棄, 91
                                                empty, 220
{\tt void\_t}, \, {\color{red} 201}
                                               size, 220
                                            コンパイル時条件分岐, 46, 49
                                            コンパイル時定数, 47
wchar_t, 121, 230
weak_type, 200
weakly_canonical, 248
                                            最小公倍数, 223
                                            サイズ付き解放関数, 25
wstring, 233
```

```
最大公約数, 222
                                        第3種不完全楕円積分,171
ジェネリックラムダ, 14
                                        畳み込み、30
シーケンス実行ポリシー, 161
                                        多值, 63
指数積分, 174
                                        単項 fold 式, 31, 32
実行ポリシーオブジェクト, 162
                                        単純宣言,67
実行時ポリシー, 156
                                        定義は1つの原則,76
   \mathtt{std} \colon \mathtt{:execution} \colon \mathtt{:par}, \ 156
                                           型が違う~, 21
   \verb|std::execution::par_unseq|, \ 156|
                                           コンパイル時~,47
   \mathtt{std}::\mathtt{execution}::\mathtt{seq},\ 156
条件文
                                        ディレクトリー
   初期化文付き~,56
                                           create_directories, 249
条件分岐
                                           {\tt create\_directory},\, {\tt 249}
   コンパイル時~, 46, 49
                                           {\tt create\_directory\_symlink},\, {\tt 250}
   実行時の~,46
                                        ディレクトリー区切り文字, 230
   プリプロセス時の~,48
                                        データ競合, 159
初期化文付き条件文,56
                                        デッドロック, 159
                                        テンプレート実引数の推定,59
初期化ラムダキャプチャー, 15
シンボリックリンク, 250
                                        テンプレート宣言, 18, 19, 20
                                        動的ストレージ, 133
推定ガイド, 59
数学の特殊関数, 165
                                        動的ポリモーフィズム, 137
                                        トライグラフ, 27
   エルミート多項式, 168
   球ノイマン関数, 173
   球面ルジャンドル陪関数, 167
                                        名前空間
   指数積分, 174
                                           ネストされた~,39
   第1種完全楕円積分,169
                                        二項 fold 式, 31, 33
   第1種球ベッセル関数, 173
                                        二進数リテラル, 5
                                        ネイティブナローエンコード, 230
ネイティブワイドエンコード, 230
   第1種不完全楕円積分,170
   第1種ベッセル関数, 171
   第 1 種変形ベッセル関数, 172
                                        ネストされた名前空間, 39
   第2種完全楕円積分,169
                                        ノイマン関数, 171
   第2種不完全楕円積分,170
                                        ノードハンドル, 211
   第2種変形ベッセル関数, 172
                                           extract, 213
   第3種完全楕円積分,169
                                           insert, 215
   第3種不完全楕円積分,171
                                           {\tt insert\_return\_type},\, {\tt 216}
   ノイマン関数, 171
                                           key, 212
   ベータ関数, 168
                                           \mathtt{mapped},\, \textcolor{red}{212}
   ラゲール多項式, 166
                                           node_type, 211
   ラゲール陪多項式, 166
                                           value, \frac{212}{}
   リーマンゼータ関数, <del>174</del>
                                           取得, 213
   ルジャンドル多項式, 166
                                           要素の追加, 215
   ルジャンドル陪関数, <del>167</del>
数値区切り文字,5
                                        バイト, 81
スレッド, 154
                                           ビット数,81
選択標本, 186
                                        ハードウェア干渉サイズ, 175
属性トークン, 4,62
                                        ハードリンク, 251
属性名前空間,62
                                        パーミッション, 236, 254
                                        パラメーターパック, 30
                                       パラレル実行ポリシー, 162
第1種完全楕円積分,169
第1種球ベッセル関数, 173
                                        パラレル非シーケンス実行ポリシー, 162
                                       非 static データメンバー, 23
非型テンプレートパラメーター, 61
第1種不完全楕円積分,170
第 1 種ベッセル関数, 171
第1種変形ベッセル関数, 172
                                        非順序連想コンテナー, 209
第2種完全楕円積分,169
                                          \mathtt{merge},\, \textcolor{red}{\mathbf{210}}
第2種不完全楕円積分,170
                                        左 fold, 31, 33
                                        非標準属性, 63
第2種変形ベッセル関数, 172
第3種完全楕円積分,169
                                        ファイルシステム, 225
```

```
ファイルタイプ, 256
                                                 パラレル非シーケンス実行ポリシー, 162
ファイルのタイプ, 236
                                                 要素アクセス関数, 157
                                                 例外, 160
ファイルパス
   absolute, 248
                                              ベータ関数, 168
                                              ヘッダーファイルの存在, 3
   canonical, 248
                                              変数宣言, 20
   current_path, 248
   proximate, 249
                                              変数テンプレート, 18, 22
   \mathtt{relative},\, \overset{^{\circ}}{2}49
                                              保管標本, 187
   {\tt temp\_directory\_path},\, {\tt 248}
                                              マジックナンバー, 21
   weakly_canonical, 248
   取得, 248
                                              右 fold, 31, 33
                                              ムーブキャプチャー, 18
   操作, 234, 248
                                             メモリーアロケーター, 140
メモリー管理アルゴリズム, 196
ファイルパス文字列, 229
不完全型, 206
                                              メモリーリソース, 133, 140
浮動小数点数サフィックス, 28
浮動小数点数リテラル, 27
                                                 取得, 139
プールリソース, 142
                                                 プールリソース, 142
   {\tt largest\_required\_pool\_block,}~ 146
                                                 モノトニックバッファーリソース, 147
                                              メンバー初期化子, 23
   max_blocks_per_chunk, 146
   options, 147
                                              文字型, 121
   {\tt pool\_options},\, 145,\, 146
                                                  ~の配列, 121
                                              文字列エンコード, 230
   release, 147
                                              文字列なし static_assert, 39
   {\tt synchronized\_pool\_resource},\, 142,\, 145
                                             文字列ビュー, 121
文字列ラッパー, 121
   unsynchronized_pool_resource, 142,
      145
                                              モノトニックバッファーリソース, 147
   {\tt upstream\_resource},\, 147
コンストラクター, 146
プレイスホルダー型, 9
                                                 allocate, 149
                                                 deallocate, 149
                                                 {\tt do\_allocate},\, {\tt 149}
プログラミング言語 C++, v
並列アルゴリズム, 153, 155, 156
                                                 do_deallocate, 149
                                                 monotonic_buffer_resource, 147
   BinaryOperation, 157
                                                 \mathtt{release},\, \bar{151}
   BinaryOperation1, 157
   BinaryOperation2, 157
                                                 upstream_resource, 152
                                                 コンストラクター, 150
   BinaryPredicate, 157
   Compare, 157
                                              ユーザー定義リテラル, 130
   {\tt ExecutionPolicy},\, {\color{red}156}
                                              要素アクセス関数, 157
   lock, 160
   mutex, 160
   parallel_policy, 159, 160
                                              ライブラリ, vi
   parallel_unsequenced_policy, 160
                                              ラゲール多項式, 166
                                              ラゲール陪多項式, 166
   Predicate, 157
   {\tt sequenced\_policy},\, {\color{red}159}
                                              ラムダキャプチャー, 15
                                              ラムダ式, 14, 15, 34, 37
   std::bad_alloc, 160
                                             乱択アルゴリズム, 183
リファレンスキャプチャー, 16
   \verb|std::is_execution_policy<T>|, 161|
   \mathtt{std} \colon \mathtt{:terminate}, \ \underline{161}
   UnaryOperation, 157
シーケンス実行ポリシー, 161
                                              リーマンゼータ関数, 174
                                              ルジャンドル多項式, 166
   実行ポリシーオブジェクト, 162
                                              ルジャンドル陪関数, 167
   実行時ポリシー, 156
                                              例外指定, 29
   データ競合, 159
                                              連想コンテナー, 209
   デッドロック, 159
                                                 merge, \frac{210}{}
   パラレル実行ポリシー, 162
                                              論理演算 traits, 202
```

●本書に対するお問い合わせは、電子メール(info@asciidwango.jp)にてお願いいたします。 但し、本書の記述内容を越えるご質問にはお答えできませんので、ご了承ください。

# 江添亮の C++17 入門(仮)

2018年 x 月 x 日 初版発行

著者 江添 亮

発行者 川上量生

発 行 株式会社ドワンゴ

〒 104-0061

東京都中央区銀座 4-12-15 歌舞伎座タワー

編集 03-3549-6153

電子メール info@asciidwango.jp

http://asciidwango.jp/

発 売 株式会社 KADOKAWA

〒 102-8177

東京都千代田区富士見 2-13-3

営業 0570-002-301 (カスタマーサポート・ナビダイヤル)

受付時間 9:00~17:00 (土日 祝日 年末年始を除く)

http://www.kadokawa.co.jp/

印刷・製本 株式会社リーブルテック

Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。 下記 KADOKAWA 読者係までご連絡ください。 送料小社負担にてお取り替えいたします。

但し、古書店で本書を購入されている場合はお取り替えできません。

電話 049-259-1100 (9:00-17:00/土日、祝日、年末年始を除く)

〒354-0041 埼玉県入間郡三芳町藤久保 550-1

定価はカバーに表示してあります。

ISBN: 978-4-04-xxxxxx-x

アスキードワンゴ編集部 編 集 星野浩章